埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第28集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—XVII—

若　宮　台

1983

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第28集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—XVII—

若宮台（わかみやだい）

1983

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は首都圏の北の入口として重要な位置にあり、北日本への各種幹線が県内を通過しております。

関越自動車道も現在青森へ向う東北自動車道は、すでに盛岡まで完成し、新潟へ向う一部東京―前橋間の供用が開始されております。

関越自動車道にかかる埋蔵文化財は数多く、これの取扱いについては埼玉県教育委員会、日本道路公団と慎重な協議を重ねましたが、36か所の遺跡についてはやむなく発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることになりました。

上里サービスエリア地内の若宮台遺跡の発掘は日本道路公団の委託を受けて、埼玉県教育委員会が行ない、整理報告書作成は埼玉県教育委員会及び埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施しましたが、ここに埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第28集として報告し、まとめることができました。この報告書が教育・文化・学術研究に大いに活用されることを期待します。

調査・整理にあたり、種々の便宜を計っていただいた日本道路公団東京第二建設局、同東松山工事事務所、そして御協力いただいた上里町教育委員会、及び直接過酷な自然条件の中で発掘作業に携われた方々に深く感謝いたします。

昭和58年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　長　井　五　郎

例　　言

1　本書は関越自動車道にかかる、埼玉県児玉郡上里町大字帯刀字堀之内に所在する若宮台遺跡（昭和49年、委保第５―1891号）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は埼玉県教育委員会文化財保護課が調整し、日本道路公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和49年３月４日～３月27日に試掘調査を行ない、昭和49年11月８日～昭和51年１月22日に亘って本調査を実施した。整理作業は昭和52・53年度は埼玉県教育委員会が受託し、土器の水洗・注記復元を行い、昭和57年度は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し、土器の復元・実測等を経て、報告書作成作業を実施した。なお、調査の組織は４ページに示した。

3　発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第三係があたり、駒宮史朗、大和修が担当した。

4　出土品の整理および図の作成は大和　修、鈴木仁子、酒井和子が主としてあたり、鈴木孝之の協力があった。

5　発掘調査における写真は駒宮史朗、大和　修、小島滋が撮影した。遺物写真は水村孝行、大和が撮影した。

6　本書の執筆は横川好富、駒宮史朗、大和　修、鈴木仁子があたった。分担は次のとおりである。

横川　Ⅰ

大和　Ⅱ、Ⅲ、Ⅵ、Ⅴ、Ⅵ

鈴木　Ⅴ、Ⅵ

駒宮　Ⅶ

なお、出土土器の胎土分析については井上厳氏に、中世陶器については、愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏にお願いした。

7　本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第四課があたり、横川好富が監修した。

8　本書の作成に当り、下記の方々から御教示、御助力を得た。

外尾常人、三上元一、小野英彦、鈴木定明

（発掘参加者）

小島滋、中村敏幸、量博満、青柳洋治、松井千鶴子、清水比呂之、高井尚一郎、宮崎静一

上智大学学芸員課程実習生

凡　　例

1　遺物説明で、遺物番号の次の（　）内は、各住居跡の図中の遺物出土位置を示す番号である。

2　Ｓ１は胎土分析資料の１番である。

3　遺物説明で、ほぼ完形としたのは、口唇部などを僅かに欠くものから、全体的に10％程欠けるものでも、その遺物の全体像が明確なものは含まれる。

4　胎土について、胎土に含まれる砂粒の内容は、概ね、目立つものから順に記した。砂粒の大きさは、４～５種に分けた、しかし、時期や、器種によって微妙な相異があり、一定して見ることが出来ない場合もあったと思われる。超微粒砂―計測出来ないが、光線の具合などによって認められる雲母など。微粒砂―0.4㎜以内のもの。角閃石、浮石、酸化鉄などが多い。細粒砂―0.5～0.9㎜のもの。内容は前者と同じ。粗粒砂―１～２㎜前後のもの。石英、酸化鉄、片岩などが多い。小石２㎜以上の大きさのもの。片岩や砂利などが多い。

　胎土、焼成は、鬼高期においては、器種や産地の違いなどにより、３～４通りのものが認められた。しかし、ここで真間期Ⅰとした時期より、胎土はほとんど均一化し、焼成温度は高温となる。砂粒の大小や、含まれる量の多寡が僅かに認められるのみである。

5　赤彩について、胎土や焼成の関係で残りにくいため、判定する材量に甚だ不明瞭なものであった。そのような痕跡で見てゆくと、普通に施されているべきもの以外の器種、例えば甕などにも同様な痕跡が認められたので、そのまま記した。

6　各住居跡出土の遺物は、各時期の分類に沿って記した。分類のところに基準資料の説明を行ない、特に相違のないときは、Ⅰ―１類１（№.１）100％残存、色調という順に記した。

7　鬼高期はＯ　真間期はＭ　国分期はＫで示した。

目　　次

序

例　　言

凡　　例

Ⅰ　調査に至るまでの経過……1

Ⅱ　調査の経過……6

Ⅲ　遺跡の立地と環境……9

Ⅳ　遺跡の概観……12

Ⅴ　遺構と出土遺物……17

1　住居跡と出土遺物……17
2　土壙と出土遺物……174
3　河川跡と出土遺物……179
4　その他の遺物……183

Ⅵ　結　　語……201

1　若宮台遺跡出土遺物について……201
2　若宮台遺跡の遺構と遺物について……240
3　まとめ……248

Ⅶ　附　　編……250

挿　図　目　次

第１図　若宮台遺跡周辺遺跡分布図…… 7
第２図　遺跡付近の地形図…… 9
第３図　若宮台遺跡全測図(1)……12
第４図　全測図(2)……13・14
第５図　標準土層図……15
第６図　第１号住居跡・カマド実測図……17
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)……18
第８図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)……19
第９図　第２・３・４・５・６・７号住居跡実測図……21・22
第10図　第２号住居跡出土遺物実測図……24
第11図　第３号住居跡出土遺物実測図……24
第12図　第４号住居跡出土遺物実測図……25
第13図　第５号住居跡出土遺物実測図……26
第14図　第６号住居跡カマド実測図……28
第15図　第６号住居跡出土遺物実測図……29
第16図　第７号住居跡出土遺物実測図……30
第17図　第８号住居跡出土遺物実測図……30
第18図　第８・９・10・11号住居跡実測図・第９号住居跡カマド実測図……31・32
第19図　第９号住居跡出土遺物実測図……34
第20図　第10号住居跡出土遺物実測図……34
第21図　第11号住居跡出土遺物実測図……35
第22図　第12・13号住居跡実測図……36
第23図　第12号住居跡出土遺物実測図……37
第24図　第13号住居跡出土遺物実測図……38
第25図　第14号住居跡実測図……39
第26図　第14号住居跡出土遺物実測図……40
第27図　第15号住居跡・第４号土壙・第５号土壙実測図……41
第28図　第15号住居跡出土遺物実測図……41
第29図　第16号住居跡・第７号土壙実測図…42
第30図　第16号住居跡カマド実測図……43
第31図　第16号住居跡出土遺物実測図……43
第32図　第17号住居跡・第６号土壙実測図…44
第33図　第17号住居跡カマド実測図……45
第34図　第17号住居跡出土遺物実測図……46
第35図　第18号住居跡実測図……48
第36図　第18号住居跡カマド実測図……49
第37図　第18号住居跡出土遺物実測図……50
第38図　第19号住居跡出土遺物実測図……52
第39図　第19・20・21・22号住居跡実測図…53・54
第40図　第20・22号住居跡カマド実測図……55
第41図　第20号住居跡出土遺物実測図……56
第42図　第21号住居跡出土遺物実測図……58
第43図　第22号住居跡出土遺物実測図……59
第44図　第23・24号住居跡実測図……61
第45図　第23号住居跡出土遺物実測図……62
第46図　第24号住居跡出土遺物実測図……63
第47図　第25・26号住居跡実測図……64
第48図　第25号住居跡出土遺物実測図……65
第49図　第26号住居跡出土遺物実測図(1)……66
第50図　第26号住居跡出土遺物実測図(2)……67
第51図　第27号住居跡・カマド実測図……69
第52図　第27号住居跡出土遺物実測図……70
第53図　第28号住居跡実測図……71
第54図　第28号住居跡出土遺物実測図……72
第55図　第29号住居跡実測図……73
第56図　第29号住居跡カマド実測図……74
第57図　第29号住居跡出土遺物実測図……75
第58図　第30・31号住居跡実測図……76
第59図　第30号住居跡カマド実測図……77
第60図　第31号住居跡出土遺物実測図……78
第61図　第32号住居跡実測図……79
第62図　第33号住居跡実測図……80
第63図　第33号住居跡出土遺物実測図……81
第64図　第34号住居跡・カマド実測図……82
第65図　第34号住居跡出土遺物実測図……83

第66図　第35・36号住居跡実測図……84
第67図　第35号住居跡出土遺物実測図……85
第68図　第36号住居跡カマド実測図……86
第69図　第36号住居跡出土遺物実測図(1)……88
第70図　第36号住居跡出土遺物実測図(2)……90
第71図　第36号住居跡出土遺物実測図(3)……92
第72図　第36号住居跡出土遺物実測図(4)……93
第73図　第36号住居跡出土遺物実測図(5)……94
第74図　第37号住居跡実測図……95
第75図　第37号住居跡出土遺物実測図……95
第76図　第38・39号住居跡実測図……97・98
第77図　第38号住居跡出土遺物実測図……91
第78図　第39号住居跡出土遺物実測図(1)… 100
第79図　第39号住居跡出土遺物実測図(2)… 101
第80図　第40号住居跡実測図…… 102
第81図　第40号住居跡カマド実測図…… 103
第82図　第40号住居跡出土遺物実測図(1)… 105
第83図　第40号住居跡出土遺物実測図(2)… 106
第84図　第40号住居跡出土遺物実測図(3)… 107
第85図　第40号住居跡出土遺物実測図(4)… 108
第86図　第41・42・43号住居跡実測図…… 110
第87図　第41号住居跡カマド実測図…… 111
第88図　第43号住居跡カマド実測図…… 112
第89図　第41・42・43号住居跡出土遺物実測図(1)…… 113
第90図　第41・42・43号住居跡出土遺物実測図(2)…… 114
第91図　第44・45号住居跡実測図…… 116
第92図　第44号住居跡カマド実測図…… 117
第93図　第44号住居跡出土遺物実測図…… 117
第94図　第45号住居跡出土遺物実測図(1)… 120
第95図　第45号住居跡出土遺物実測図(2)… 121
第96図　第46号住居跡実測図…… 122
第97図　第46号住居跡カマド実測図…… 123
第98図　第46号住居跡出土遺物実測図(1)… 124
第99図　第46号住居跡出土遺物実測図(2)… 126
第100図　第46号住居跡出土遺物実測図(3)… 128
第101図　第47号住居跡実測図…… 130
第102図　第47号住居跡カマド実測図…… 131
第103図　第47号住居跡出土遺物実測図…… 132
第104図　第48号住居跡・掘立柱建物跡実測図…… 133
第105図　第49・50・51号住居跡実測図…… 134
第106図　第49号住居跡出土遺物実測図…… 135
第107図　第50号住居跡出土遺物実測図…… 136
第108図　第51号住居跡出土遺物実測図…… 136
第109図　第52号住居跡実測図…… 137
第110図　第52号住居跡出土遺物実測図…… 138
第111図　第53・54号住居跡実測図…… 139
第112図　第53・54号住居跡カマド実測図… 140
第113図　第53・54号住居跡出土遺物実測図(1)…… 142
第114図　第53・54号住居跡出土遺物実測図(2)…… 143
第115図　第55号住居跡・カマド実測図…… 144
第116図　第55号住居跡出土遺物実測図(1)… 146
第117図　第55号住居跡出土遺物実測図(2)… 148
第118図　第55号住居跡出土遺物実測図(3)… 149
第119図　第55号住居跡出土遺物実測図(4)… 150
第120図　第55号住居跡出土遺物実測図(5)… 151
第121図　第56号住居跡・カマド実測図…… 152
第122図　第56号住居跡出土遺物実測図…… 153
第123図　第57号住居跡実測図…… 154
第124図　第57号住居跡カマド実測図…… 155
第125図　第57号住居跡出土遺物実測図…… 155
第126図　第58号住居跡実測図…… 156
第127図　第58号住居跡カマド実測図…… 157
第128図　第58号住居跡出土遺物実測図…… 158
第129図　第59号住居跡実測図…… 160
第130図　第59号住居跡カマド実測図…… 161

第131図　第59号住居跡出土遺物実測図…… 162
第132図　第60・61・62・63・64号住居跡
実測図……165・166
第133図　第60号住居跡出土遺物実測図…… 167
第134図　第61号住居跡出土遺物実測図…… 168
第135図　第62号住居跡出土遺物実測図…… 169
第136図　第63号住居跡出土遺物実測図…… 170
第137図　第64号住居跡出土遺物実測図…… 171
第138図　第１・２号土壙実測図…… 173
第139図　第３号土壙実測図…… 174
第140図　第10号土壙実測図…… 175
第141図　第１・２・３・６・７号土壙出
土遺物実測図…… 176
第142図　河川跡試掘溝位置図…… 179
第143図　試掘溝土層断面図…… 180
第144図　河川跡出土遺物実測図…… 181
第145図　縄文土器拓影図…… 183
第146図　縄文土器実測図…… 184
第147図　弥生土器拓影図…… 185
第148図　その他の遺物(1)…… 186
第149図　その他の遺物(2)…… 188
第150図　その他の遺物(3)…… 190
第151図　その他の遺物(4)…… 192
第152図　第５地点一括出土遺物…… 196
第153図　石　鏃…… 197
第154図　Mo–Mi–Hb三角ダイヤグラム … 251
第155図　Mo—Ch、Mi—Hb菱型ダイヤ
グラム…… 251
第156図　三角ダイヤグラム位置分類図…… 252
第157図　菱型ダイヤグラム位置分類図…… 252
第158図　WK１…… 255
第159図　WK３・４・９…… 256
第160図　WK11・12・15…… 257

図　版　目　次

図版１　遺跡より北方を望む
天神社
図版２　第１号住居跡
第２・３号住居跡
図版３　第６・７号住居跡
第６号住居跡カマド
図版４　第８・９・10号住居跡
第９号住居跡カマド
図版５　第10・11号住居跡
第10号住居跡カマド
図版６　第12・13号住居跡
第12号住居跡カマド
図版７　第14号住居跡
第14号住居跡遺物出土状態
図版８　第15号住居跡・第４・５号土壙
第16号住居跡・第７号土壙
図版９　第17号住居跡
第18号住居跡
図版10　第19・20・21・22号住居跡
第19号住居跡カマド
図版11　第20号住居跡カマド
第23・24号住居跡
図版12　第23・24号住居跡カマド
第25・26号住居跡
図版13　第26号住居跡カマド
第26号住居跡遺物出土状態
図版14　第27号住居跡
第28号住居跡
図版15　第29号住居跡
第29号住居跡カマド
図版16　第30・31号住居跡
第31号住居跡遺物出土状態

図版17　第32号住居跡
第33号住居跡
図版18　第34号住居跡
第35・36号住居跡
図版19　第36号住居跡カマド
第38・39号住居跡
図版20　第40号住居跡
第40号住居跡カマド
図版21　第40号住居跡貯蔵穴
第41・42号住居跡カマド
図版22　第43号住居跡カマド
第44・45号住居跡
図版23　第46号住居跡
第46号住居跡貯蔵穴
図版24　第47号住居跡炭化材出土状態
第47号住居跡
図版25　第47号住居跡カマド
第47号住居跡貯蔵穴
図版26　第48号住居跡・掘立柱建物跡
第49号住居跡カマド
図版27　第49・50・51号住居跡
図版28　第50号住居跡カマド
第51号住居跡カマド
図版29　第52号住居跡
第53・54号住居跡
図版30　第55号住居跡
第55号住居跡遺物出土状態
図版31　第55号住居跡遺物出土状態
第56号住居跡
図版32　第57号住居跡
第58号住居跡
図版33　第58号住居跡カマド
第59号住居跡
図版34　第59号住居跡カマド
第60～64号住居跡
図版35　第60号住居跡
第60号住居跡カマド
図版36　第61号住居跡カマド
第62号住居跡カマド
図版37　第63号住居跡遺物出土状態
第64号住居跡
図版38　第１・２号土壙
第３号土壙
図版39　第６号土壙
第10号土壙
図版40　河川跡　第６号試掘溝
河川跡　第６号試掘溝遺物出土状態
図版41　第１号住居跡出土遺物
図版42　第１・２・４・６号住居跡出土遺物
図版43　第６・８・９・10号住居跡出土遺物
図版44　第11・13・14号住居跡出土遺物
図版45　第17号住居跡出土遺物
図版46　第18・20・22・23号住居跡出土遺物
図版47　第24・26号住居跡出土遺物
図版48　第26・28・29・31号住居跡出土遺物
図版49　第31・33号住居跡出土遺物
図版50　第33・35・36号住居跡出土遺物
図版51　第36号住居跡出土遺物
図版52　第36・38号住居跡出土遺物
図版53　第39・40号住居跡出土遺物
図版54　第40号住居跡出土遺物(1)
図版55　第40号住居跡出土遺物(2)
図版56　第40号住居跡出土遺物(3)
図版57　第40・41～３号住居跡出土遺物
図版58　第41～３・44・45号住居跡出土遺物
図版59　第45号住居跡出土遺物
図版60　第46号住居跡出土遺物(1)
図版61　第46号住居跡出土遺物(2)
図版62　第46号住居跡出土遺物(3)
図版63　第47・49号住居跡出土遺物

図版64　第51・52・53・55号住居跡出土遺物
図版65　第55号住居跡出土遺物
図版66　第55号住居跡出土遺物
図版67　第55号住居跡出土遺物
図版68　第56・58号住居跡出土遺物
図版69　第59・60号住居跡出土遺物
図版70　第61・62・63・64号住居跡出土遺物
図版71　第２・４号土壙・試掘溝出土遺物
図版72　グリッド出土遺物(1)
図版73　古墳時代以降の遺物・縄文土器
図版74　縄文土器・第１群土器
　　縄文土器・第２群土器(1)
図版75　縄文土器・第２群土器(2)
　　縄文土器・弥生土器
図版76　紡錘車
　　第46号住居跡出土鉄製品
図版77　土錘
　　瓦
図版78　線刻を有する紡錘車
図版79　胎土分析　ＷＫ―１・３・４
図版80　胎土分析　ＷＫ―９・11・12
図版81　胎土分析　ＷＫ―15

Ⅰ　発掘調査に至る経過

関越自動車道新潟線は、東京都練馬区を起点として、本県の川越市・東松山市・上里町を経て群馬県・新潟県新潟市に至る310㎞の高速道路である。すでに、東京川越市間は、昭和46年12月に、また、川越市東松山市間は昭和50年８月に供用が開始されている。埼玉県内のこの供用区間の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、東京川越市間２遺跡を埼玉県遺跡調査会が、また、川越市東松山市の12遺跡を埼玉県教育委員会が直営で実施し、すでに調査報告書が刊行されているところである。

さて、東松山市から県境の児玉郡上里町に至る、いわゆる東松山以北については、昭和44年４月埼玉県行政推進対策委員会高速自動車道部会幹事会において、５万分の１の地形図に基本計画ルートが示された。この案を、昭和36年度に実施した、埼玉県埋蔵文化財包蔵地分布図と照合すると、20箇所の遺跡と、埼玉県指定史跡杉山城跡（嵐山町）と十条条里遺跡（美里村）が含まれていた。

そこで、この基本ルートに対する文化財保護側の意見を次のようにとりまとめ、高速自動車道部会長（企画部長）あて提出した。

1　県指定史跡杉山城跡、県指定史跡十条条里遺跡のルートの変更を検討されたい。

2　その他のルート内に所在する埋蔵文化財については、事前調査、発掘調査等により対処可能と思われる。

3　出土品が多量にあると予想されるので、資料館・陳列館等の建設による保存について考慮してもらいたい（サービスエリア内でも可）。

4　当面事前調査が必要となる関係箇所が多いので、計画的に調査できるよう検討する必要がある。

関越自動車道東松山以北のルートは、丘陵上・丘陵裾部・平野地帯を約36キロメートルにわたって建設されるもので、かなり多くの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと予想されたので、昭和45年度、文化庁から国庫補助金の交付を受けて、改めて分布調査を実施した。この調査は、県内の考古学研究者を調査員に委嘱して実施したもので、基本計画ルートの東西約２キロメートルの範囲を対象にした。その結果、244箇所の遺跡が確認され、ルートをどのように変更しても、かなりの遺跡が建設用地内に入ることが確実となった。

昭和45年５月、埼玉県行政推進対策委員会高速道路部会幹事会において、建設省関東地方建設局から、５千分の１の図面によるルート説明、さらに、本年６月上旬には、日本道路公団に事業を委託することになっている、との説明があった。一方、この５千分の１のルート図は、県道路建設課にある地図によって各課が検討することにし、重大な支障のある場合は、５月中に、県企画課を通して建設省へ通知することになった。

それから約１年が経過。昭和46年４月、行政推進委員会高速道路部会幹事会において、関越自動車道建設計画にかかる東松山市～上里町間の関連公共事業調査について日本道路公団との打合せ会が行われ、同年８月以降、関係各課による調査が開始された。この年、県教育局内の組織改正が行われ、社会教育課から文化財係が分離し、文化財保護室が新設され、まだ日本道路公団高速道路建

設局と協議の最中であった関越自動車道川越市～東松山市間と並行して、文化財第二係がこの事務に当たった。さて、関連公共事業調査で、文化財保護室が担当した調査は、５万分の１の地形図上にルート案のセンター両側２キロメートル、さらに２千分の１の平面図でセンターの両側100メートルに所在する埋蔵文化財を調べることであった。この調査の結果、５万分の１の地形図を利用したセンター両側２キロメートルでは112箇所の埋蔵文化財が、またセンターの両側100メートルの範囲では、23箇所の埋蔵文化財が含まれていることを確認し、一応この結果を日本道路公団に通知し、埋蔵文化財については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

この間、日本道路公団は、県指定史跡杉山城跡及び十条条里遺跡をルートから大きくはずす努力がなされた。

昭和47年４月、日本道路公団高速道路建設局から千分の１平面図（設計図）が届けられ、本線内の遺跡分布確認調査が文化財保護室第二係の職員によって東松山側と上里町側からの二班に分かれてセンター杭をたどって幅約100メートルの範囲内で行われ、時期的に地上観察の困難な寄居町の一部を後日に残して、一応次の17箇所を日本道路公団に提示した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
滑川　１号	屋田遺跡	比企郡滑川村大字月輪字西新井	古墳群	古墳
滑川　２号	寺ノ台遺跡	比企郡滑川村大字水房字寺の台	塚	
嵐山　１号	越畑城跡	比企郡嵐山町大字越畑字城山	城館跡	戦国
寄居　１号	おかね塚	大里郡寄居町大字鷹巣	塚	
花園　１号	台耕地遺跡	大里郡花園村大字黒田	集落跡・古墳群	縄文・古墳
寄居　２号	新堀遺跡	大里郡寄居町大字用土字新堀	塚	
寄居　３号	沼下遺跡	大里郡寄居町大字用土字沼下	集落跡	奈良・平安
岡部　１号	清水谷遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	集落跡	縄文・古墳・奈良
岡部　２号	安光寺古墳群	大里郡岡部町大字本郷字清水谷 児玉郡美里村大字古郡字石神	古墳群	古墳
美里　１号	塚本山古墳群	児玉郡美里村大字下児玉字西山	古墳群	古墳
児玉　１号	雷電下遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字雷電下	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉　２号	飯玉東遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字飯玉東	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉　３号	女堀条里遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字四方田前 本庄市四方田字堰場	条里跡	奈良・平安
上里　１号	本郷東遺跡	児玉郡上里町大字七本木字本郷下	集落跡	奈良
上里　２号	愛宕遺跡	児玉郡上里町大字七本木字愛宕耕地	集落跡	古墳
上里　３号	中堀遺跡	児玉郡上里町大字堰字中堀北	集落跡	奈良・平安
上里　４号	若宮台遺跡	児玉郡上里町大字帯刀字堀の内	集落跡	奈良・平安

日本道路公団の用地買収および工事計画案の整ってきた昭和48年２月、高速道路建設局及び東松山工事事務所と、工事発注予定と埋蔵文化財についての打合せ会が行われた。東松山以北の工事区は、東松山側から滑川・嵐山・寄居・花園・美里・上里の六工区に分かれており、工事発注は、48年11月、上里工区から始まるという。ここで問題となったのは、48年度に発掘調査を実施しなければならないとなると、関越自動車道川越市～東松山市間で発掘調査した遺跡の整理報告書刊行事業とかち合って調査員が大幅に不足することになる。そこで、今後の工事発注計画と発掘調査を要する遺跡との関係を詳細に検討し、調査員の人員増に関する資料を整え、教育局内人事担当課と協議を開始した。

その後、公団側と48年度に調査事業を開始する方針で、細部の協議がもたれ、発掘調査から整理報告書刊行に至る調査事業年次もほぼ了解点に達した。

昭和48年4月7日付け東建総総第222号で、日本道路公団高速道路建設局長から、埼玉県教育委員会を経由して、文化庁長官あて、昭和42年9月30日付けで締結した「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」の第1項に基づく協議が行われ、埼玉県教育委員会は「当該地内に所在する埋蔵文化財については、公団と十分協議し、記録保存のための発掘調査を実施する」との副申を付け、文化庁に進達した。

これについて、文化庁は、昭和48年6月2日付け委保第59号で「当該施行地内の遺跡については工事前に発掘調査を実施すること。重要な遺構を発見した場合には、設計変更等によりその保存に配慮すること。」と回答した。

問題となっていた調査員の人員増も解決し、調査体制も整い、上里町地内の4遺跡の調査経費が48年9月、県議会に上程可決され、昭和48年9月25日付けで日本道路公団東京建設局長あて、発掘調査の実施について、昭和48年度計画書を添えて通知し、10月25日、上里1号(本郷東遺跡)をトップに関越自動車道東松山—上里町間約36キロメートルに所在する埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。

発掘調査を進める一方、山林や宅地等、時期的に地上観察の困難な場所についても、随時確認調査を進めた。その場合、新たに次の11箇所が確認され、その都度、日本道路公団に提示し、発掘調査を実施した。

(横川好富)

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
嵐山 2号	中郷遺跡	比企郡嵐山町大字広野字中郷	集落跡	縄文
寄居 5号	中井丘遺跡	大里郡寄居町大字用土字中井丘		縄文
寄居 6号	中山遺跡	大里郡寄居町大字用土字中山	炭焼窯	平安
寄居 7号	狢久保遺跡	大里郡寄居町大字用土字狢久保		縄文
寄居 8号	平原遺跡	大里郡寄居町大字用土字平原	集落跡	奈良・平安
寄居 9号	鶴巻遺跡	大里郡寄居町大字赤浜字鶴巻	集落跡	縄文・平安
岡部 3号	北坂遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	古墳群・集落跡	縄文・古墳
美里 2号	甘粕山遺跡	児玉郡美里村大字甘粕字東山	集落跡	縄文・古墳・平安
児玉 4号	後張遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字下モ田 本庄市大字四方田字堰場	集落跡	古墳
上里 5号	耕安地遺跡	児玉郡上里町大字堤字中堀北	寺院跡	平安・鎌倉
上里 6号	久城前遺跡	児玉郡上里町大字嘉美字一本松西 本庄市大字今井字久城前		奈良・平安

発掘調査の組織

1　発　掘（昭和50年度）

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	豊田　重穂
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課長	柳田　敏司
		課長補佐兼庶務係長	野村　鍋一
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係係長	吉川　國男
			塩野　博
			柿沼　幹夫
庶務	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係	持田まり子
			太田　和夫
			桂　正澄
			千村　修平
発掘調査	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係係長	横川　好富
			駒宮　史朗
			大和　修

2　整　理（昭和57年度）

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井　五郎
		副理事長	岩上　進
		常務理事	渡辺　澄夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	佐野　長二
			関野　栄一
			福田　浩
			本庄　朗人
			江田　和美
整理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川　好富
		調査研究第四課長	水村　孝行
		主任調査員	大和　修
			鈴木　仁子
			酒井　和子

3　協力者　　児玉郡上里町教育委員会　地元区長及び地元住民

関越高速道関係遺跡一覧表

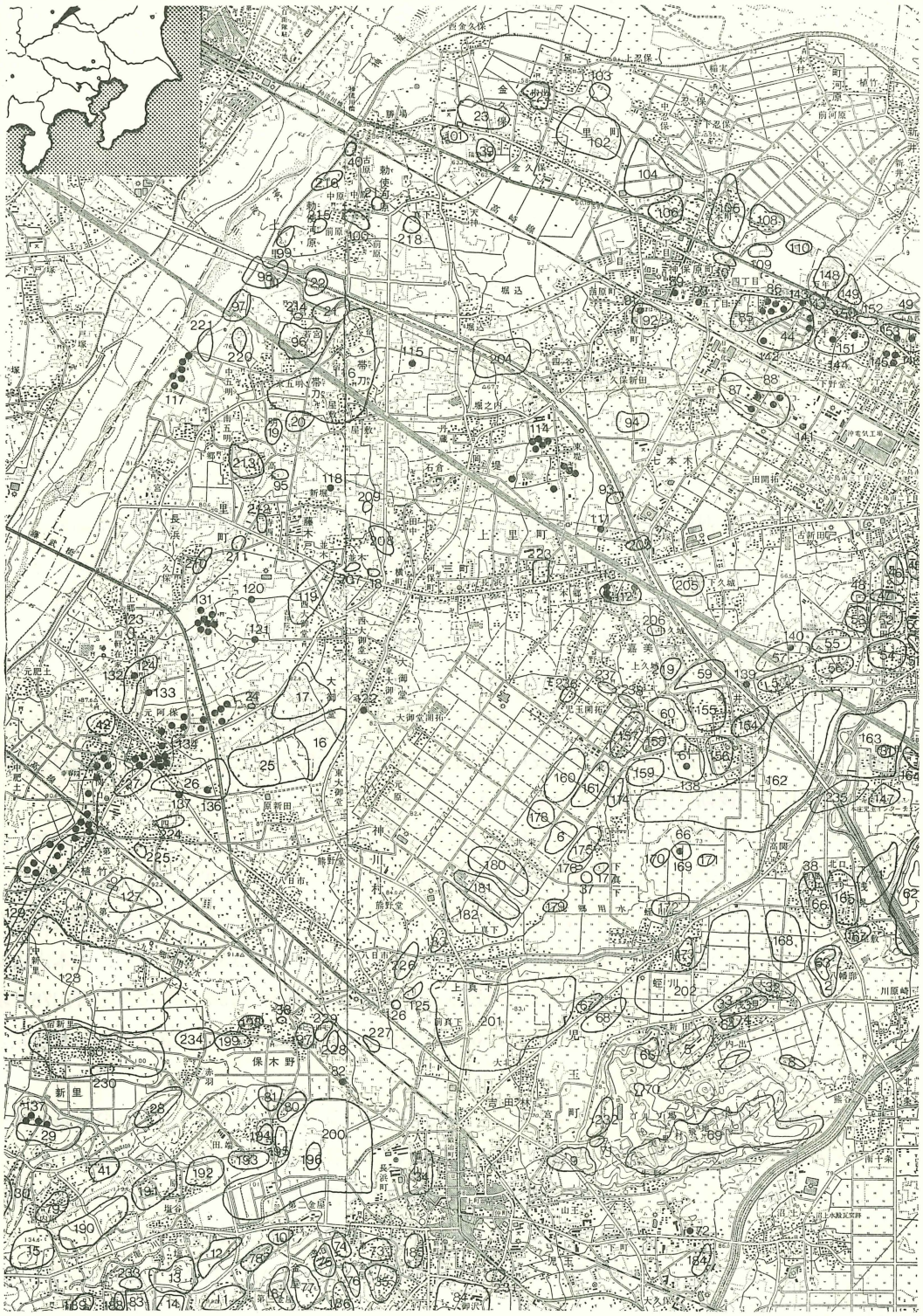
番号	遺跡名	所在地	調査年	時代・遺構	報告・遺跡No.
A	内畑	新座市片山字池田	44	縄文前　住居跡9他　埼玉県遺跡調査会報告	第7集(1970)
B	城	所沢市城	44	縄文前　住居跡3、土壙　〃	第6集(1970)
1	南大塚	川越市豊田本字中原	46・47	古墳3基　埼玉県発掘調査報告書	第3集(1974)
2	中組	川越市的場字六畑	46	古墳・平安　土壙、溝	〃
3	上組	川越市笠幡字後大町	47	縄文早・弥生・古墳　住居跡14	〃
4	鶴ケ丘	川越市笠幡字下丹草 鶴ケ島町鶴ケ丘字富士見	47	縄文・鎌倉　土壙、溝	〃
5	花影	坂戸市花影	47	縄文中・奈良・平安　住居跡16、方形周溝墓8	〃
6	駒堀	東松山市田木字立野	46・48	弥生・古墳　住居跡35、方形周溝墓1、古墳2	第4集(1974)
7	田木山	東松山市田木字相生	47	古墳2基	第5集(1974)
8	弁天山	東松山市田木字弁天山	47	塚5基	〃
9	舞台	東松山市田木字舞台	46・48	古墳2基、縄文中・古墳住居跡11	〃
10	宿ケ谷戸	東松山市西本宿字宿ケ谷戸	47	中世　井戸2、溝	〃
11	附川	東松山市石橋字附川	47	古墳4基、古墳住居跡6、弥生後一括土器	〃
12	青鳥城	東松山市石橋字城山他	47	中世城郭　堀、溝、ピット群、地下式壙	第6集(1974)
13	屋田	滑川村月輪字西新井	53・54	弥生・古墳　古墳9基、住居跡21	滑川1号
14	寺之台	滑川村水房字寺の台	53・54	古墳・奈良　古墳1基、住居跡2、塚2基	滑川2号
15	中郷	嵐山町広野字中郷	53	縄文中　住居跡7、土壙、溝	嵐山2号
16	越畑城	嵐山町越畑字城山	52	中世城郭	嵐山1号
17	お金塚	寄居町鷹巣字西浦	52	塚1基	寄居1号
18	鶴巻	寄居町赤浜字鶴巻	52	縄文後　土壙26	寄居9号
19	台耕地	花園村黒田字竹後	52・53	古墳3、縄文中・住25、平安・住80、製鉄炉3	花園1号
20	新堀	寄居町用土字新堀	52	塚2基	寄居2号
21	中井丘	寄居町用土字中井丘	51	縄文中～後・平安　包含層	寄居5号
22	中山	寄居町用土字中山	51	中世～近世　炭焼窯2基	寄居6号
23	狢久保	寄居町用土字狢久保	51	縄文前　包含層	寄居7号
24	沼下	寄居町用土字沼下	51	平安　住居跡24、井戸	寄居3号
25	平原	寄居町用土字平原	52	平安　住居跡3、掘立柱1	寄居8号
26	甘粕山	美里村甘粕字東山	48・49	縄文草～前・晩～弥・平安　住居跡14、炭焼窯4	第30集(1980)
27	北坂	岡部町本郷字北坂	51・52	縄文草・平安　住居跡15、掘立柱9	埼埋文報告第1集(1981)
	清水谷		51	平安・中世　住居跡23、溝	
	安光寺	岡部町本郷字清水谷他	51	古墳2基	
28	塚本山	美里村下児玉字西山	49・50	弥生～平安　方形周溝墓9、古墳28、住居跡2	第10集(1977)
29	雷電下	児玉町浅見字雷電下	49	古墳～平安　住居跡63、井戸	第22集(1979)
30	飯玉東	児玉町浅見字飯玉東	49	縄文中・弥生・平安　住居跡2、方形周溝墓5	〃
31	後張	児玉町下浅見字下モ田 本庄市四方田字堰場	50・51	古墳・平安　住居跡170	児玉4号
32	久城前	上里町嘉美字一本松西 本庄市今井字久城前	50	古墳末　溝、井戸	第15集(1978)
33	本郷東	上里町七本木字本郷東	48	奈良　住居跡6	第7集(1976)
34	愛宕	上里町七本木字愛宕耕地	48・49	古墳　住居跡8、溝、土壙	〃
35	中堀	上里町堤字中堀北	49	平安　住居跡8	第15集(1978)
	耕安寺	上里町堤字耕安寺	50	平安　包含層	〃
36	若宮台	上里町帯刀字堀の内	49・50	古墳～平安住居跡64、掘立柱1、土壙10	埋文第28集

Ⅱ　調査の経過

昭和49年３月４日、本遺跡の約１㎞程東にある中堀遺跡の調査中に、上里サービスエリア東端の用地内の45×30ｍ程の陸田に18ケ所のグリッドを設定し、遺構の確認面、遺跡の拡がりを調べるため試掘調査を行なった。その結果地表面から約１ｍ程下で平安時代の竪穴住居跡１軒が検出され、東端ではほぼ同様な深さの部分で縄文時代後期堀之内期の土器破片が出土したが、遺構等は検出できなかった。西側は土取りのため、既に住居跡は破壊されていた。この試掘の結果から、本遺跡はかなり広範囲に拡がるものと予想された。調査は３月27日に終了し、児玉町雷電下遺跡の調査が終了した後、11月８日から本調査を開始した。（第２地点）

調査はまず重機による、表土を70～80㎝程除去する事から始められた。地山はやや黄色味を帯びた灰褐色土で、氾濫原特有の土質のため、住居跡のプラン確認には非常な困難を来たした。この第２地点では第１～33号の古墳時代末～平安時代にかかる住居跡が検出され、遺構の切合いも多く認められ、更に冬期のため、土が固く締まって、唐鍬を多用せざるを得ない場合がほとんどであった。更にこの調査では南側の五明廃寺の乗る台地との間の谷の部分に直交する方向で20ｍ毎に、Ｔ１～Ｔ９のトレンチを設定し調査を行なったが、少量の土器が出土したのみであった。２月20日に終了。

昭和50年度は４月14日から調査を再開し、第４地点に重機を入れ、表土剥ぎを行ない、遺構確認を進めた。７月21日から約１ヵ月上智大学学芸員課程実習生を受け入れ、炎天下の調査が続いた。今回の調査は火災を受けた住居跡、遺物の多い住居跡が顕著で、予想以上の多大な成果を上げ、翌昭和51年１月22日に器材を撤収し、調査を終えた。



第１図　　若宮台遺跡周辺遺跡分布図

Ⅲ　遺跡の立地と環境

若宮台遺跡は児玉郡上里町大字帯刀字堀の内932に所在し、国鉄高崎線神保原駅から西方2.5㎞程にある。

遺跡の標高は70～71ｍで、木庄台地北西縁の神流川によって形成された自然堤防上にあり、付近は南西に高く北東に低い緩傾斜となっており、微地形を見ると、若宮台は南・西側部分に旧河道と思われる低地と１ｍ近い段差をもって区切られており、北・東側部分では除々に低くなって水田面となる。遺跡地図によれば上里町№36・37遺跡となっているが、調査の結果から見ると、これらは範囲を拡げてつながるものと思われる。（図中21・22）

付近一帯はやや高い部分は桑畑・蔬菜畑・果樹園で、比較的低い部分は水田となっていたが、砂利採取・瓦等の土取りによって、その景観は既にかなり変わってしまっている。

つぎに、上里町を中心に周辺の遺跡を見て行く事にする。

縄文時代の遺跡は埼玉県遺跡地図によれば、１～30の遺跡があるが、発掘調査例は少ない。若宮台遺跡の調査では試掘調査の際に中期加曾利Ｅ期と後期堀之内期の土器破片が出土している。又近年上里町教育委員会による発掘調査では北房ケ谷戸遺跡で前～中期のまとまった土器群が出土している。更に、６、161、178、160にかかる将監塚・古井戸遺跡は現在調査中であるが、奈良・平安時代にかかる集落と共に、縄文中期・勝坂～加曾利Ｅ期にかけての住居跡150余軒の集落遺跡が確認されており、当地域での縄文時代研究に大きく寄与するものと期待される。

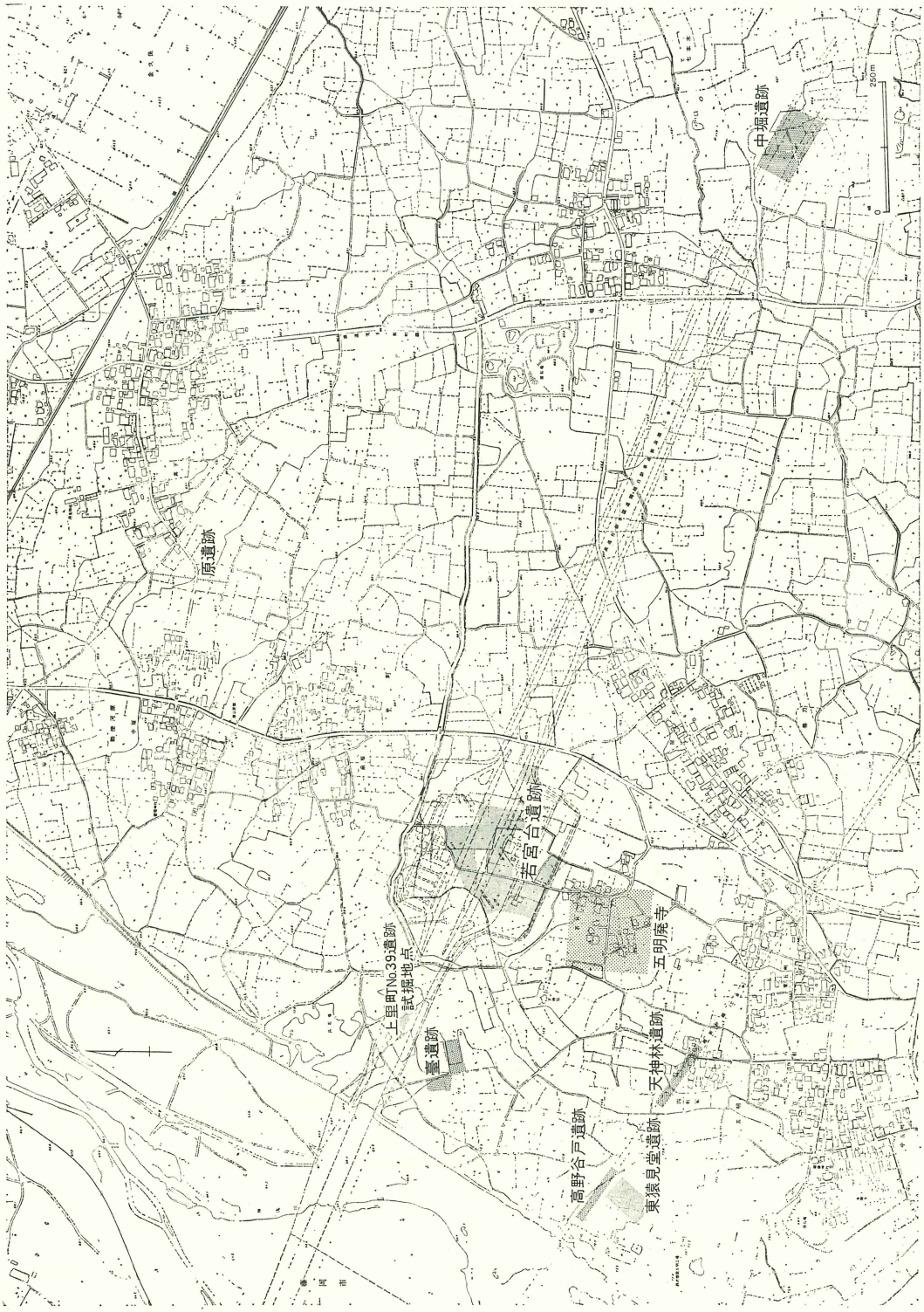
弥生時代の遺跡は少なく、塚本山古墳群（62）中に１軒の住居跡が調査されている。本遺跡でも試掘グリッド中から後期須和田期の壺破片が出土している。又、飯玉東遺跡(1)からも五領期の方形周溝墓に切られて、後期の住居跡が１軒検出されている。

古墳時代に入ると集落としてとらえられる遺跡が出現する。雷電下遺跡(1)、後張遺跡（235）、諏訪遺跡（57）等でいずれも低地を臨む微高地上に立地するものである。上里町では、若宮台遺跡で試掘時に２個体の甕を採集しており、神流川沿いの自然堤防上にも少ないながらも概期の遺跡が存在するものと思われる。この時期の方形周溝墓は割合い多く、飯玉東遺跡、諏訪遺跡、塚本山古墳群、下野堂古墳群（142）、児玉町では枇杷橋遺跡（10）、金屋池脇遺跡（186）、等で、生野山78号墳もある。これらは盛土をもつものともたないもの、大形のもの等、様々であり立地等からも時期差が与えられている。

次の和泉期の遺跡は上里町周辺では少なく、関越道にかかる愛宕遺跡（93）で14軒の集落が調査されたのみで、本庄市西富田新田（55）、二本松遺跡（45）、夏目遺跡（46）等、女堀川流域に多い。近年、後張遺跡の調査により、五領～鬼高期にかけての大集落の存在が明らかとなり、児玉町倉林後遺跡（77）でも概期の住居跡が調査されるなど、注目に値する資料が増加している。

又、この時期になると、前期古墳も出現し、生野山古墳群（69）の将軍塚古墳、長沖古墳群(84)の14号墳等が調査されている。

後期鬼高期に入ると遺跡は激増し、44～147の遺跡の大半はこの時期のものである。



第2図　遺跡付近の地形図

上里町内で調査された遺跡としては、若宮台遺跡の近くでは鬼高Ⅰ期～真間期にかけての臺遺跡（97)、東猿見堂遺跡（220)、やや時期的に遅れる天神林・高野谷戸遺跡（96・97）があり、やや北に位置する原遺跡（21）等と共にいずれも南北に近く延びる自然堤防上に立地するものである。やや南下して中道遺跡（128)、そしてやや古い須恵器を多く出土したミカド遺跡（200）が知られている。又、先述の後張遺跡も鬼高Ⅰ期までの集落である。

これらの集落に対応する古墳群も又、神流川の自然堤防上に多く、若宮台遺跡周辺ではやや遅れて出現するとされる下郷古墳群（117)、帯刀古墳群（116)、南下して大御堂古墳群（119)、四軒在家古墳群（131)、元阿保古墳群（134)、植竹古墳群、又、総数150基を数え、その一部が調査された、6世紀後半～7世紀後半にかけての青柳古墳群がある。又、台地～丘陵上に立地する古墳群としては児玉町長沖古墳群、生野山古墳群、大久保山丘陵の支丘上に170基で構成され、その内28基が調査された、後期古墳の塚本山古墳群等がある。又、上里町内陸部のものとして東堤古墳群（114)本郷南古墳群（112）がある。

又、7世紀代になると灌漑用水として自然の河川に手を加えたと考えられる、久城前遺跡（59)、諏訪遺跡（57）の大溝も検出されている。

8世紀以降、奈良・平安時代になると、187～234、236～238の遺跡があり乏水性の台地奥部にも集落は進出し、6・160・161・178の将監塚・古井戸遺跡・本郷東遺跡（203)、下廓遺跡（205)、がある。若宮台遺跡もこの時期に住居跡が急増し、8世紀前半に創建される五明廃寺（214)、との関連が注目される。この時期の調査された遺跡としては、清水南遺跡(102)、檜下遺跡(16)、皂樹原遺跡（25)、女堀遺跡(16)、東の立野南遺跡(236)、八幡大神南遺跡（237)、熊野大神南遺跡（238)、等がある。特に皂樹原、檜下遺跡では試掘調査時に8世紀～10世紀にかけての住居跡38軒が確認されており、施釉陶器・瓦が出土するなど、郡衙と関連する遺跡と考えられている。平安時代以降に出現する遺跡は中堀遺跡（204)、田中前遺跡（209)、雷電下遺跡等があり、中堀遺跡は鉄滓・鞴の羽口と共に施釉陶器が多く出土しており、これも寺院址もしくは郡衙等と関連する遺跡と考えられる。又、田中前遺跡は羽釜や酸化炎焼成の土器群があり、児玉町枇杷橋遺跡（10）と共に10世紀以降の年代を与えられている。

引用・参考文献（上里町周辺部）

菅谷浩之・坂本和俊・市川修ほか「大御堂檜下・女堀遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会　1976年
坂野和信「皂樹原・檜下遺跡試掘報告」神川村遺跡調査会　1980年
石岡憲雄・高橋一夫ほか「下廓遺跡」上里町下廓遺跡調査会　1978年
中村倉司・並木隆ほか「臺遺跡」埼玉県遺跡調査会　1980年
駒宮史朗・大和修ほか「中堀・耕安地・久城前」　1978年　埼玉県教育委員会
梅沢太久夫・高橋一夫・石岡憲雄ほか「原・清水南」　1978年　上里町教育委員会
駒宮史朗・大和修「本郷東・愛宕」　1976年　埼玉県教育委員会

Ⅳ　遺跡の概観

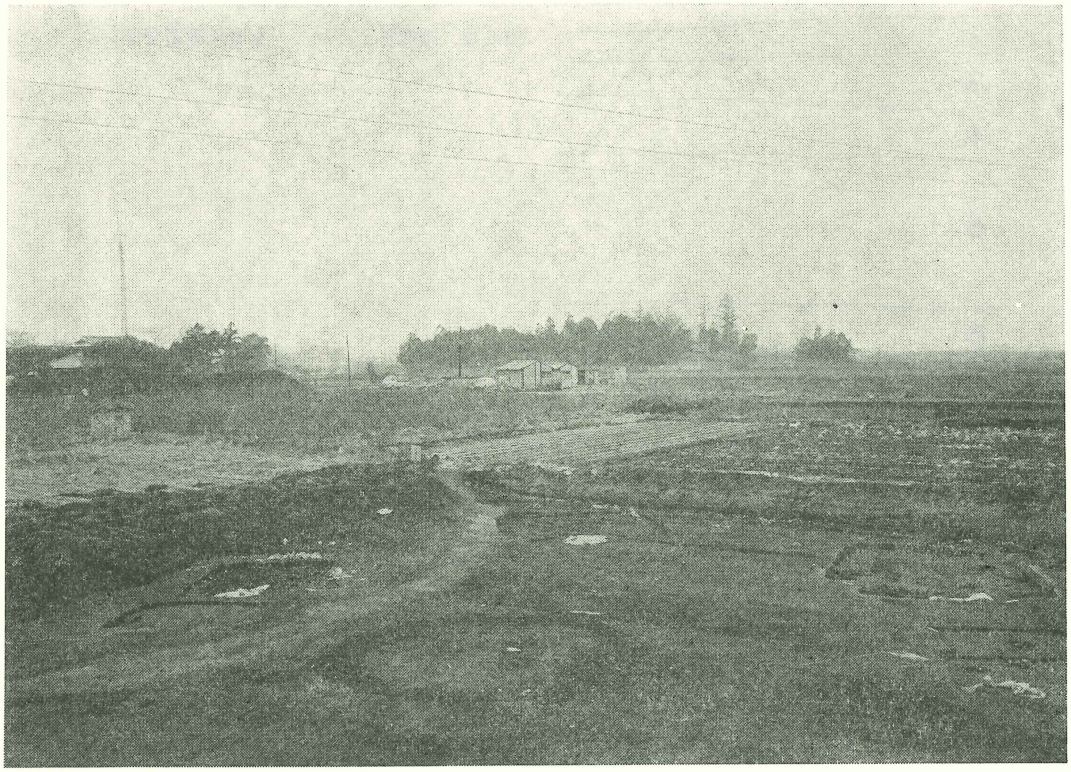
若宮台遺跡は神流川右岸の自然堤防上に立地する。浅い谷を隔てた南側には五明廃寺があり、更に南側には台遺跡・高野谷戸・天神林・東猿見堂遺跡があり、南東に中堀遺跡がある。埼玉県遺跡地図上里町№36・37遺跡にあたる。

遺跡の標高は71.0m～72.0mである。現況は陸田・蔬菜畑・桑畑であった。調査の結果検出した遺構・遺物は次のとおりである。

縄文時代　加曽利E期土器破片
　　堀之内期土器・破片
弥生時代　須和田期土器破片
古墳時代　後期の住居跡16軒・土壙1基
奈良時代　住居跡18軒・土壙2基
平安時代　住居跡10軒

他に古墳時代後期末以降の掘立柱建物跡1軒が検出されている。

遺跡全面積は62,000㎡で、今回の調査における範囲確認の面積は約27.000㎡に止まった。但し、

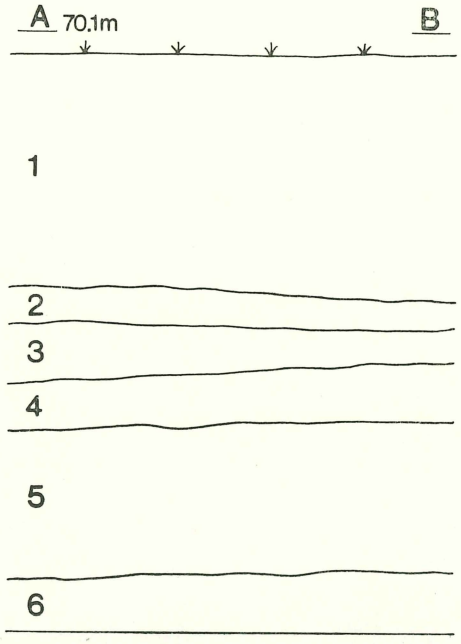


遺跡周辺は瓦等の原料の土取りにより、又、堆積下部の礫層の砂利採取等により、かなり広範囲の部分を破壊されてしまっており、集落の拡がりをつかむまでに至らなかった。

又、上記の縄文土器・弥生土器は第１地点に設定したグリッド中から出土したものが殆んどで、これらを伴なう遺構は検出できなかった。恐らく、この時期の遺跡の中心部をはずれたものと思われる。

本遺跡の遺構は、自然堤防上特有の氾濫土が遺構の上に１ｍ近く堆積していた事、又遺構のプラン確認が火災を受けた住居以外は困難を極め、カマドの存在によってかろうじて住居跡の検出が可能なものもあった。これらの様々な条件下での限られた調査であったため、実際の集落は更に拡がりグリッド等から古墳時代前期の土器も出土しており、時期的にも更に遡る可能性がある。

今回の調査範囲の南側の谷部分にトレンチを設定し、溝等の存在を調査したが、少量の土器が出土し、特に人為的な遺構は検出されなかった。

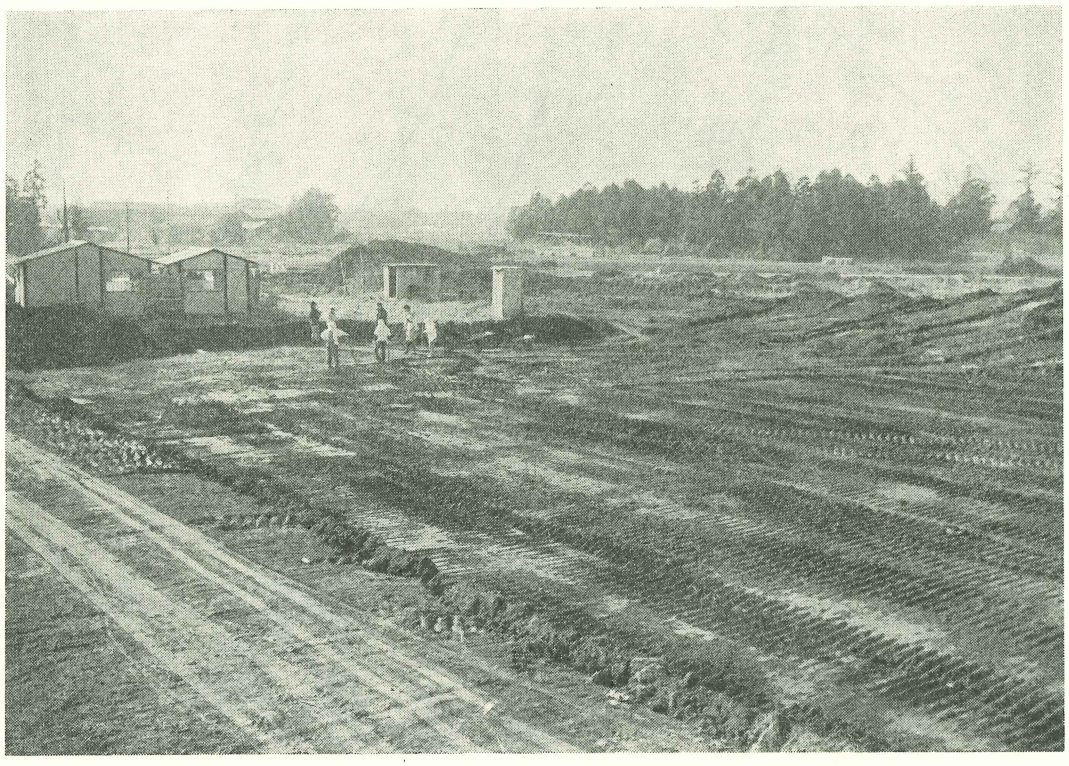


第１層　暗灰褐色土　やや粘性がある。層厚60㎝前後
第２層　灰褐色土　褐色と白色のスコリアを含む　層厚10㎝前後
第３層　茶褐色土　層厚15㎝前後
第４層　暗茶褐色土　層厚10㎝前後
第５層　褐色土　ローム分を含みやや黄味を帯び粘土質　層厚40㎝前後
第６層　暗褐色土　ロームを含み緻密で堅い。

第５図　若宮台遺跡標準土層図

第3図　若宮台遺跡全測図(1)

第4図　若宮台遺跡中央部全測図(2)



第6地点　発掘風景

現　地　説　明　会

V　遺構と出土遺物

1　住居址と出土遺物

第1号住居跡（第6図・図版2）

本住居跡は第2地点の住居跡群中の東端にあり、西側及び北側に2～36の各住居跡がある。

覆土は灰色味を帯びた暗褐色土で、確認面でも地山との差がかすかにわかる程度で、遺構の検出にかなりの時間を要した。北側壁の一部と西側壁は部分的に立上がりが確認できたのみであった。

形状は四隅のやや丸味をもつ方形を呈する。

大きさは5.0×5.0m。主軸の方向はN—64°—E。

カマドは残存状態が悪く、袖の一部が検出できたのみであった。袖から出土した№1、2の甕は芯として使われたものと思われる。底は浅い。

柱穴は4個検出されたが、東側の深いもので21cmである。

床面は平坦で、やや固くなっている。壁高は14cm柱で緩やかに立上る。

出土遺物は住居跡の中央部から破片で出土しているものが多く、床面上及びやや浮いた状態で出土している。№8、10の甕はカマドの袖の芯として使用されていた。

第1号住居跡出土遺物（第7・8図・図版41・42）

鬼高第V期に属する。

土師器

1　坏

OV—1①類　3（№4）75%残。基準資料。淡橙褐色、底部外面に黒斑。器面の磨滅著しい。器形歪む。4（№4）ほぼ完形。明橙褐色。器面磨滅。器形は歪む。

OV—4①類　1（№10）40%残。基準資料。口唇部を欠損する。赤茶褐色、内面底部褐色。外面に煤付着。

OV—4②類　2（№7）基準資料。約80%残るが1同様口唇部を欠く。淡い橙茶褐色。①類よりやや器肉厚い。底部内面は、放射状に篦磨きされる。

2　鉢

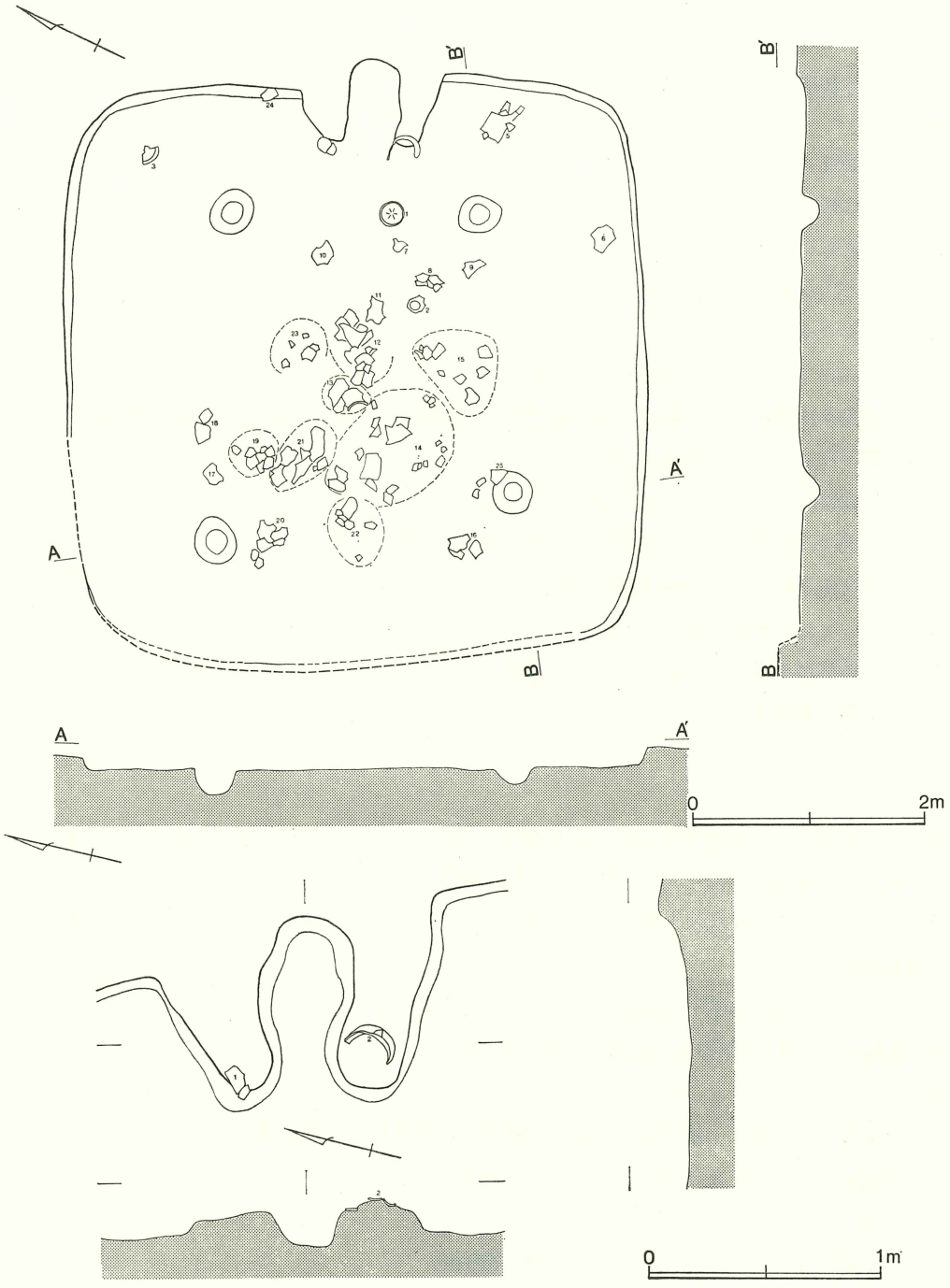
OV—5類　5（№1）底面を欠くが他は完存。基準資料。器肉は薄く丁寧なつくり、外面は特に器面の磨滅が著しい。内面は赤彩と思われる赤色が残る。

3　小形壺

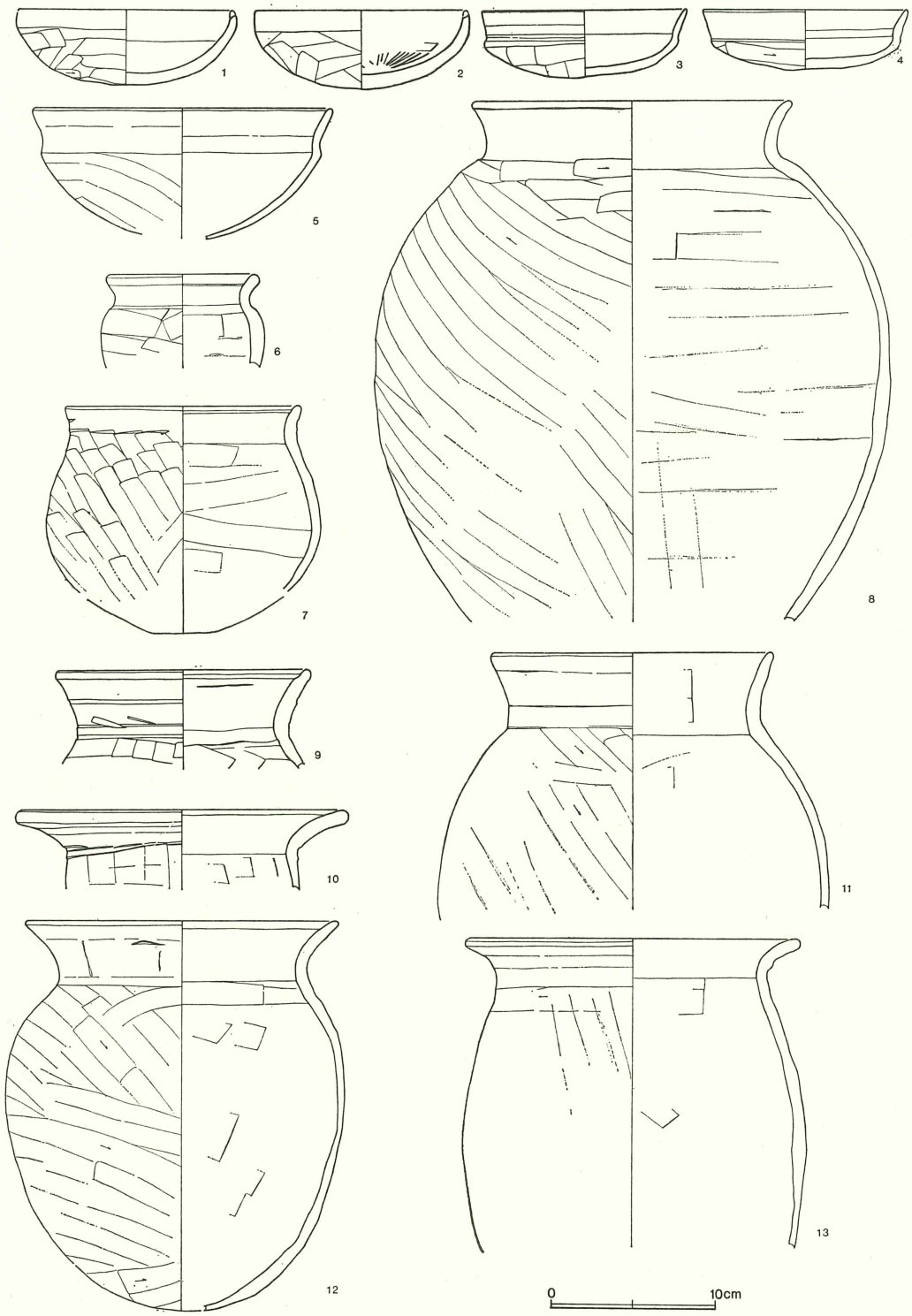
OV—7類　6（覆土）23%残。基準資料。橙褐色。

OV—8類　7（№17）底部欠損。38%残。基準資料。黄褐色、外面に10×8cmの黒斑。

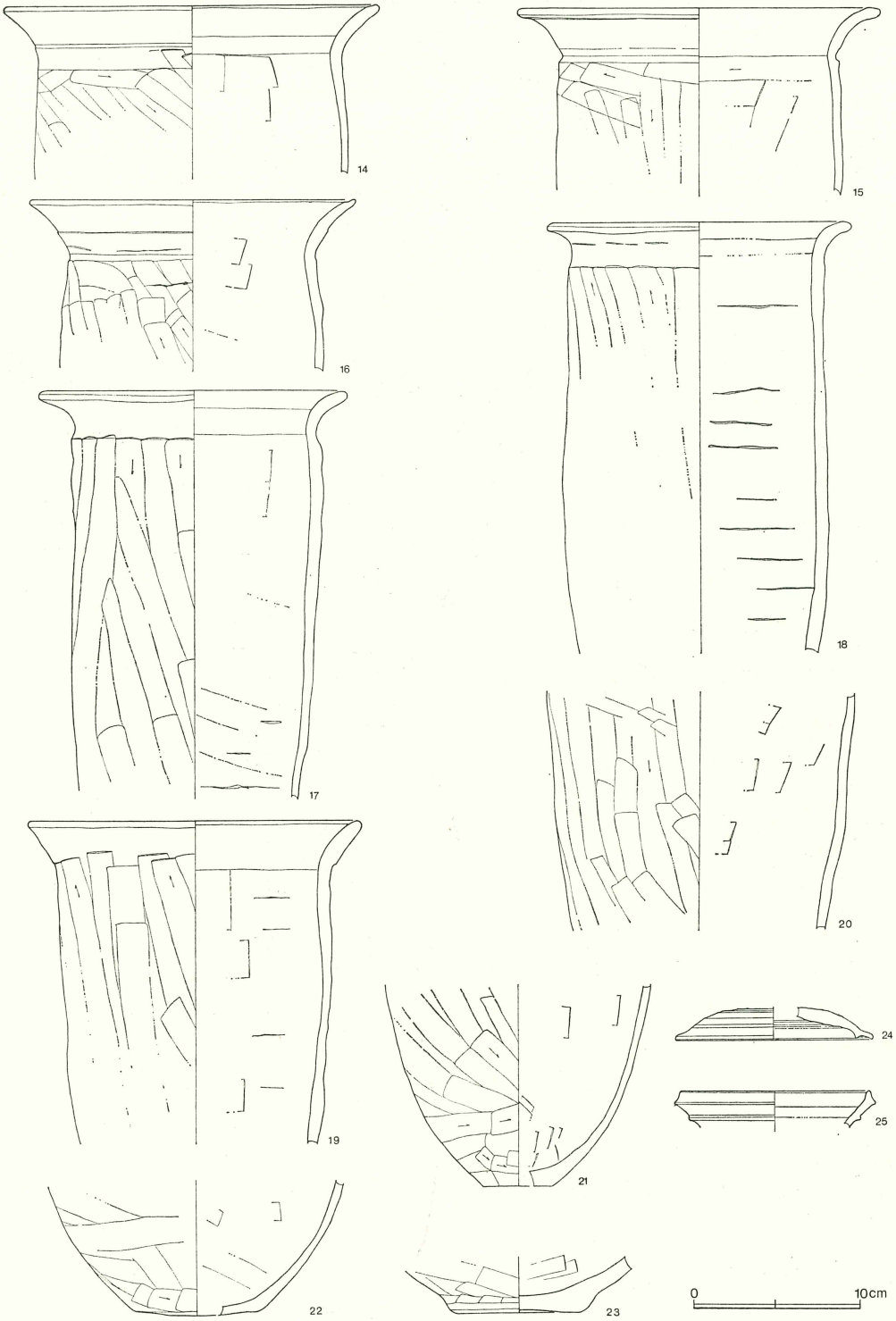
OV—9類　12（№7・8・12・15・覆土）胴上半と底部を50%欠く。基準資料。つくり整形はやや雑となる。2次加熱のため、特に内面胴中位の器面があばた状に剥離する。淡橙褐色～黒褐色。22（№14・15）底部のみ40%残。胎土、焼成は基準資料と同じ。2次加熱。淡橙褐色～暗褐色。



第6図　第1号住居跡・カマド実測図



第７図　　第１号住居跡出土遺物実測図(1)



第８図　　第１号住居跡出土遺物実測図(2)

4　大形壺

ＯⅤ—10類　11（№.7・10・19・20）胴部以下を欠く。基準資料。淡橙褐色～暗褐色。２次加熱のためもろく器面荒れザラつく。９（№.２）口縁部と頸部のみ100％残。胎土は８類の７と同じ。焼成も良い。淡黄褐色～暗褐色。口縁部は最低３回に亘り横ナデされる。

ＯⅤ—11類　８（№.６・８・９・14・カマド袖・№.２・覆土）口縁部90％、胴部50％残。基準資料。橙茶褐色、内面は暗褐色～黒色。外面肩部に２×５㎝の黒斑１つ。口径19.2㎝、胴最大径31.6㎝。23（№.24）60％残存。茶褐色、外面大部分黒色を呈する。

５　甕

ＯⅤ—12①類　18（№.５）胴下半を欠くがほぼ完形。基準資料。器形は歪み、口縁部は楕円形を呈する。内面には粘土紐の巻き上げ痕顕著。２次加熱のため器面荒れる。朱色。外面胴部短径部黒色。19（№.13、15）胎土は18より粗く、小石が目立つ。２次加熱で器面はボロボロになる。色調は18と同じ。口縁部の形態は異なるが、全体の感じが同じなので、この類に入れた。本来は淡橙褐色を呈するものと思われるが、２次加熱のため、明橙褐色～朱色となる。10（カマド袖）30％残。胎土、つくり、焼成は３類に似る。橙褐色。２次加熱で外面は赤変し、器面荒れる。

ＯⅤ—12②類　17（№.13・14・21・覆土）口縁部75％。胴部40％残。橙褐色、外面一部褐色。

ＯⅤ—12③類　15（№.３）と20（14・15・21・覆土）は同一個体である。口縁部50％、胴部60％残。基準資料。内面淡橙褐色、胴下位に黒斑（10×８㎝）、外面口縁部、淡黄褐色、胴部淡褐色。

16（№.21）約20％残。胎土は15と同じ。焼成はやや良い。橙～黄褐色。口縁部赤彩か？　14（№.11・14・15）75％残。胎土は７類６に似る。焼成も非常に良い。器肉薄くつくりも丁寧。内外面赤彩か？　橙赤褐色。21（№.19）14と同一個体と思われる。

６　甑

ＯⅤ—13類　13（№.16・18）20％残。基準資料。器面磨滅。

須恵器

１　蓋　24（覆土）13％残。胎土には浮石、角閃石などの微粒砂と長石などの粗粒砂を少量含み粗い。軟質。内面灰青色、外面暗灰色。ろくろ整形。

２　横瓶　25（覆土）12％残。胎土は精製され非常に密で焼きも良い。淡灰色、内外面に暗緑色～褐色の自然釉が付着する。胴部の破片も出土している。

第２号住居跡（第９図・図版２）

位置は第２地点住居跡群中の西側にあり、３号住居跡を切っており、西に近接して４・５・６・７の各住居跡がある。

覆土は砂と粘土を含む灰茶褐色土を主体とするもので、３号住居跡の覆土と非常に似通ったものであり、識別は困難であった。形状は東壁及び北壁がやや丸味を帯びた長方形を呈する。

大きさは4.8×4.0ｍ。主軸の方向はＮ—86°—Ｅ。

カマドは東壁中央部やや北寄りに設けられていた。残存状態は悪く、焼土の散布によってその存在が確認できたのみであった。柱穴等の付属施設は発見できなかった。床面は覆土との差はほとんどなく、遺物が出土しなくなる面を一応、床面とした。

壁高は西側で20㎝で、ほぼ垂直に立上る。

遺物はカマドに向かって右側から№10の須恵器蓋、№3の坏破片、土師器坏・甕等が覆土中から、又№7の甕は床面上から出土している。

第2号住居跡出土遺物（第10図・図版42）

真間第Ⅱ期に属する。

土師器

1　坏

MⅡ1—1類　4（№ナシ）24％残存。淡橙褐色。1（№16）30％残存。橙褐色。

MⅡ1—3類　5（覆土）25％残存。図より2㎜程径は小さくなる。黄褐色。

2と3は3号住に属するものと考える。

3（№17）20％残存。淡橙褐色、外面底部褐色。2（№1）38％残存。淡橙褐色。

2　大形壺

MⅡ1—9類　6（№13・14・覆土）接合しない2片がある。口縁部15％、肩部40％残存。薄手で焼成良くチヨコレートブラウン。8（№13）62％残存。褐色～チヨコレート色。

3　甕

MⅡ1—10類　7（№7）30％残存。淡橙褐色。

須恵器

1　坏

9（№ナシ）底部25％、口縁部5％残存。胎土には角閃石、浮石の微粒砂、酸化鉄、石英などの細～粗粒砂を含み土師器のものに似る。焼成も悪く、器面磨滅激しい。淡橙灰色。

2　蓋

10（№1・2）70％残存。ろくろ整形。かえりは奥まり、小さく丸味を持つ。精製された胎土に小石を僅かに含む。焼成良い。つまみは扁平で大きい。暗灰色、外面部分的に灰褐色。

11（覆土）つまみのみ残存。胎土には微～細粒砂を多含し、燃成は甘く、軟質。明灰青色。

3　甕

12（№3）30％残存。ろくろ整形。胎土には、微細粒砂の他、浮石、赤色粒などの粗粒～小石を多含し、焼成良く焼きしまる。明灰色。

第3号住居跡（第9図・図版2）

位置は第2地点東側にあり、第2号住居跡に切られており、第7号住居跡を切っている。

覆土は灰茶褐色土を主体とする単一土層であった。

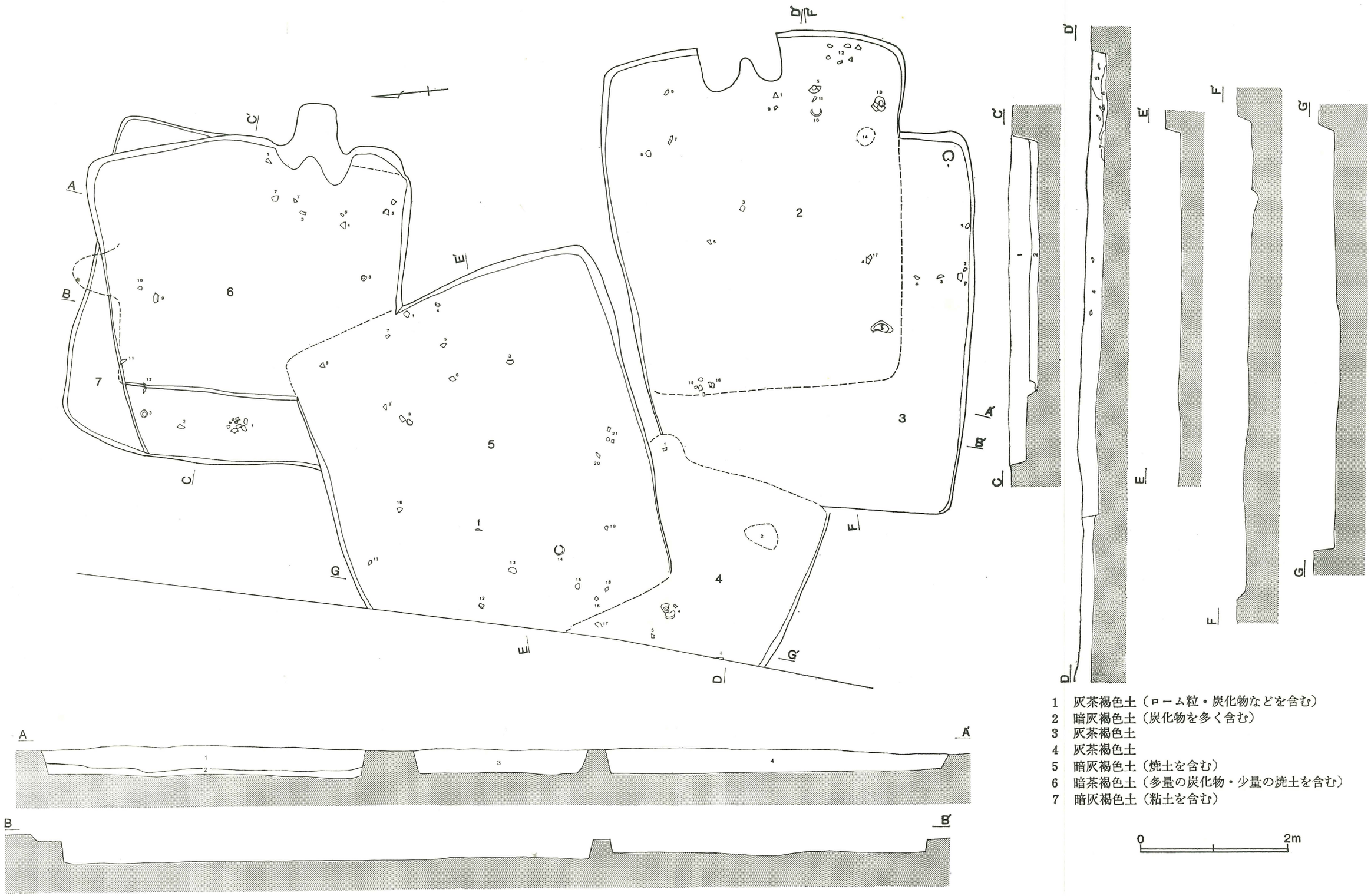
形状は全容は第2号住居跡に切られて不明であるが、東西方向に長い長方形を呈するものであろう。大きさは5.1×（4.2）m。

主軸の方向はN—94°—E（長軸。）

カマドは2号住居跡によってこわされた部分にあったものと思われる。

床面は平坦であるが、堅さは覆土との差はほとんどなく、堅い。

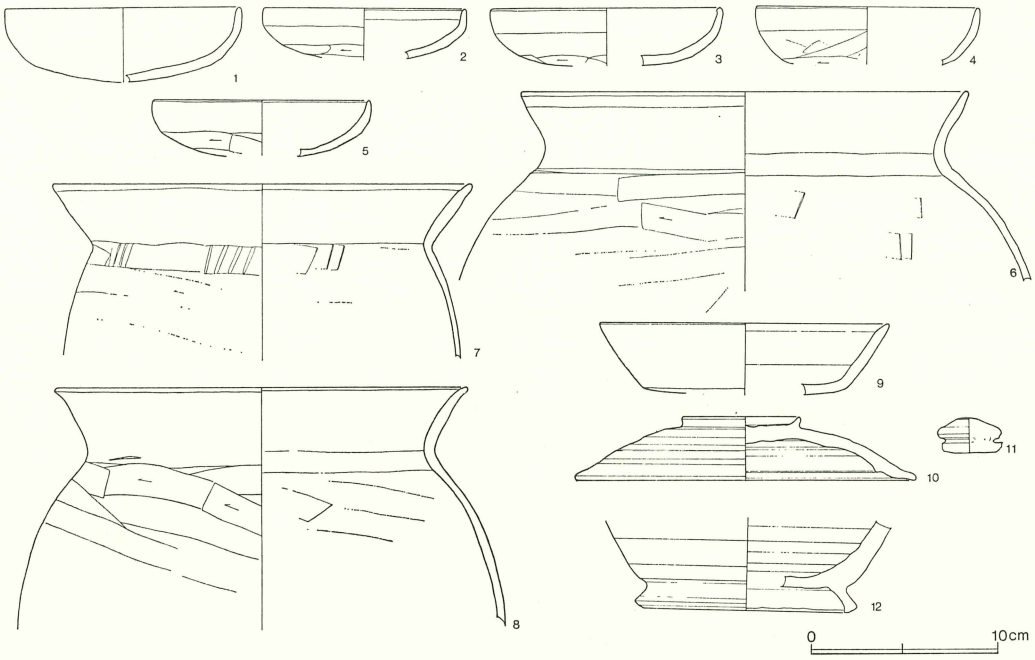
壁は南側で19㎝で、やや斜方向に立上る。



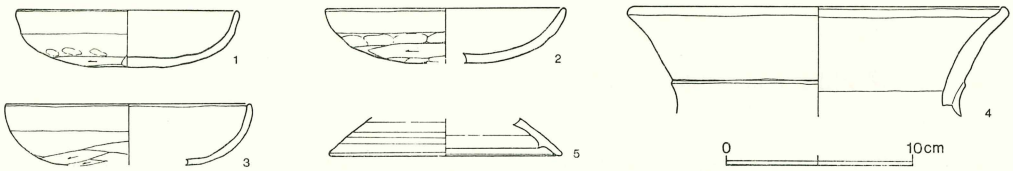
1　灰茶褐色土（ローム粒・炭化物などを含む）
2　暗灰褐色土（炭化物を多く含む）
3　灰茶褐色土
4　灰茶褐色土
5　暗灰褐色土（焼土を含む）
6　暗茶褐色土（多量の炭化物・少量の焼土を含む）
7　暗灰褐色土（粘土を含む）

0　2m

第9図　第2・3・4・5・6・7号住居跡実測図



第10図　　第２号住居跡出土遺物実測図



第11図　　第３号住居跡出土遺物実測図

遺物は東と南側の壁寄りに、流れ込んだような状態で覆土中から出土している。土師器坏と甕破片である。

第３号住居跡出土遺物（第11図）

真間第Ⅰ期に属する。

土師器

１　坏

ＭⅠ―６類　２（№２）15％残。淡橙茶褐色。

１と３の坏は、２号住のものと考える。また２号住の２と３の坏は３号住のものであろう。

１（№５）20％残。茶褐色。

３（№２）28％残。淡橙褐色、外面一部黒色。

２　甕

４（№２）23％残。淡茶褐色。外面磨滅著しい。

３　須恵器

５（２・３号住）12％残。微～細粒砂を含み焼成良い。暗灰色、上部の肥厚している所はサンド

イッチ状に中が淡褐色を呈する。

第4号住居跡（第9図）

位置は第2地点西側にあり、3・5号住居跡に切られており、大部分は道路下に延びている。

形状、大きさは不明である。

カマドは西壁に掘り込まれているが、堅く赤変した焼土部分の存在でそれが確認できたに留まる。

壁高は南側で23㎝程で緩かに立上がる。

遺物は土師坏、小形甕があるが、混入している。出土状態は床面よりやや浮いた覆土中からである。

第4号住居跡出土遺物（第12図　旧17号住）と15号住居跡出土遺物（第28図　旧17号住）

発掘時のミスで、住居跡の17号住という番号が重複していたため、遺物を分けた。しかし、その時点で、間違ったため、混同してしまった。原図によると15号住は鬼高期のもので遺物が少ない。したがって4号住の1が相当する。その他に小片で、坏の破片が3点出土している。鬼高第Ⅳ$_2$期に属するものである。

その他の4号住出土遺物と、15号住出土遺物となっているのは、全て4号住のものと考える。4号住の2・3・4と15号住の1は、国分Ⅰ期に属するものと考える。その他の遺物は、2号住からの混入と考える。

以下、分類に沿って説明したい。

第15号住居跡出土遺物（第28図　4号住）

土師器坏

OⅣ$_2$—2①類　4住1（№.2）ほぼ完形。胎土は精製されるが、焼きの悪い粉っぽいものである。淡黄褐色。

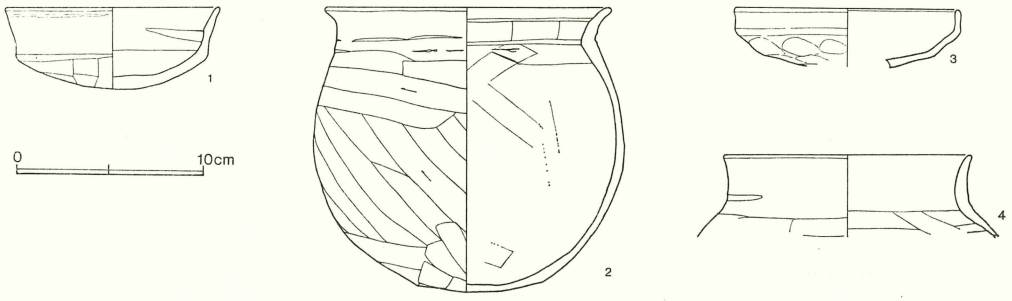
第4号住居跡出土遺物（第12図・第28図15号住）

土師器

1　坏

MⅡ$_1$—1類　15—3（№.ナシ）24%残。橙褐色。

MⅡ$_1$—2類　15—2（№.3）25%残。橙褐色。



第12図　　第4号住居跡出土遺物実測図

MⅡ$_1$—8類　4—2（№.4）ほぼ完形。淡黄～橙褐色、部分的に黒色。

2　小形台付甕

MⅡ$_1$類　4—4（№.1）20%残。明橙褐色。

3　甕

MⅡ$_1$—10類　15—4（№.ナシ）15%残。橙褐色～褐色。

4　坏

KⅠ—1①類　15—1（№.ナシ）38%残。明橙褐色。内外面磨滅。

KⅠ—1②類　4—3（№.ナシ）21%残。橙褐色。焼成良。46—2と同じつくり。

第5号住居跡（第9図）

位置は第2地点西側にあり第7号住居跡を切っており第4号住居跡に北側を切られている。

形状は東西方向に長い長方形を呈するものと思われる。

大きさ（5.0）×4.5*m*。

主軸の方向はN—79°—E（長軸）。

カマドは検出できなかった。

床は平坦で、覆土よりやや堅い。壁高は南側で30*cm*で、やや斜方向に立上がる。

遺物は住居跡全体に散布しており、覆土中から土師器坏、甕破片、須恵器蓋破片等が出土している。

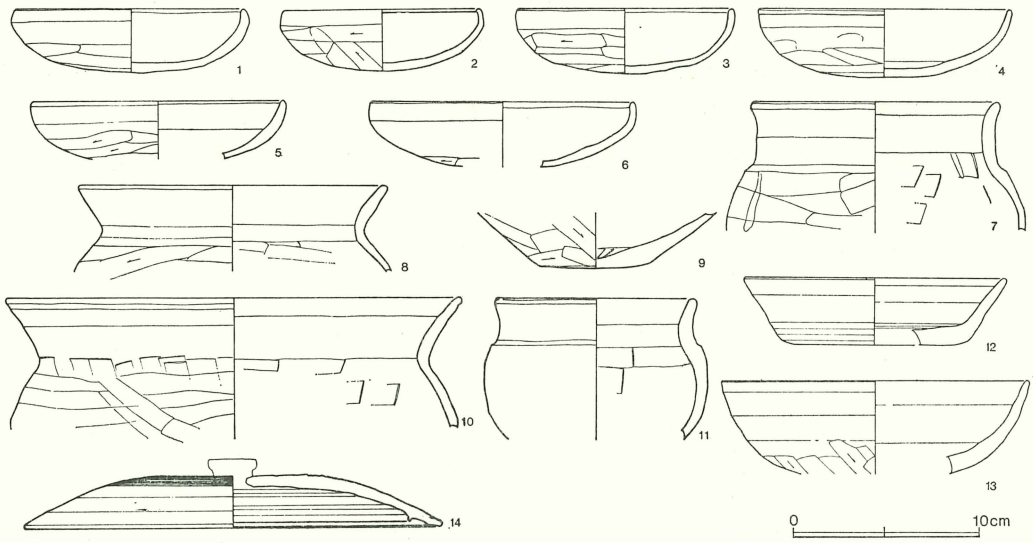
第5号住居跡出土遺物（第13図）

真間第Ⅰ期に属する。

1　坏

MⅠ—2類　1（5住）25%残。明橙褐色。器内外面磨滅、2次加熱によるものか？　5（№.13）30%残。橙褐色。器内外面磨滅。6（№.20）25%残。淡橙褐色、外底一部黒色。

MⅠ—4類　2（№.9）40%残。橙褐色、外面一部褐色。3（№.4）20%残。橙褐色。内器面磨滅



第13図　　第5号住居跡出土遺物実測図

激しい。

2　皿

M Ⅰ—5類　4（№14）口縁部25％を欠く。楕円形を呈し、長径15.0㎝、短径13.7㎝。橙褐色。器内面磨滅。

3　小形壺

M Ⅰ—8①類　11（5号住）20％残。胎土は鬼高期の精製されて砂粒の少ない、焼成の悪い粉っぽいもの。器肉は分厚い。胴部は丸味をもたず、口縁部は一度内傾してから開く。淡橙褐色。

M Ⅰ—8②類　7（№3）33％残。胴部内面と肩部に条となって、有機物が付着している。肩部はやや張りをもつ。口縁部は一度直立し、先端で開く。橙褐色、一部黄～暗褐色。胎土、焼成は基準土器と同じ。8（5号住）20％残。肩部には張りをもち、器内外面荒れる。胎土、焼成は7と同じ。9（№14）底部のみ85％残。黄～暗灰褐色。

M Ⅰ—9類　10（5号住）20％残。焼きは甘い。2次加熱のため器面は内外面とも荒れ朱～赤茶褐色を呈する。

須恵器

1　坏

12（覆土）25％残。器肉厚い。胎土は精製され微粒砂を多く含む。焼成も比較的良い。ろくろ整形、底外面回転篦削り。明灰青色。

2　埦

13（覆土）13％残。ろくろ整形。底外面一定方向の篦削り。胎土には石英などの細粗粒砂含む。焼成良。暗灰色。

3　蓋

14（№3）13％残。大形。小さく丸味をもったかえりをもつ。胎土には石英などの粗粒～小石を少量含む。乳白色～内面淡橙褐色。

その他に東海系の長頸瓶の肩部（№2）が出土している。

第6号住居跡（第9・14図・図版3）

第2地点西側に位置し、7号住居跡を切っているものと思われる。

覆土はローム粒子・焼土・炭化物を含む灰茶褐色土を主体とし、床面近くに炭化物を多く含むものであった。

形状は隅のやや丸く、東側壁の広がる台形状を呈する。

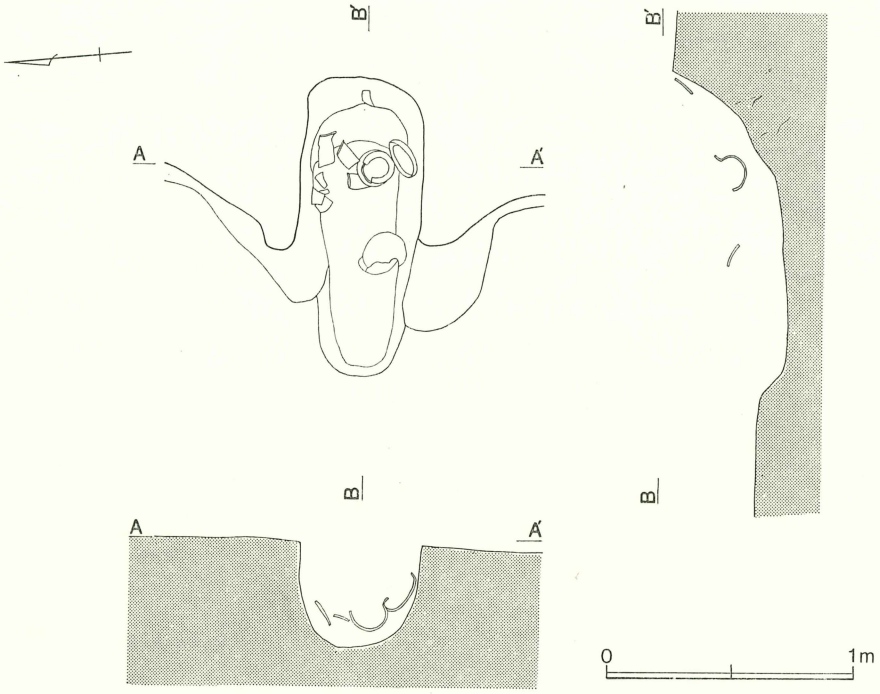
大きさは（4.5）×（3.9）m。

主軸の方向はN—86°—E。

カマドは東側壁の南寄りに掘り込んで設けられている。底は床面から11㎝程下がって、舟底型に掘られており、二段に立上がっている。

柱穴等の施設は検出できなかった。

遺物はカマド中から土師器坏・台付甕・甕破片等と、周辺部から土師器坏、甕等の破片が出土している。



第14図　第６号住居跡カマド実測図

なお、本住居跡の北側壁外に薄くカマド状に赤く焼けて堅くなった部分が認められており、更にもう１軒の住居跡の存在が推定されたが、大部分を６・７号住居跡によってこわされており、詳細は不明である。遺物はほとんどが覆土中から浮いた状態で出土しているが、№.７の土師器坏・№.10の台付甕・№.12の甕はカマド内に落ち込むように検出されたものである。

第６号住居跡出土遺物　（第15図・図版42）

真間第Ⅲ$_2$期に属する。

土師器

１　坏

Ⅲ$_2$—１類　４（№.３）ほぼ完形。基準資料。内外面磨滅。２次加熱。橙褐色～明橙褐色、口縁外面一部黒色。

Ⅲ$_2$—２類　５（西側）口縁部40％、底部100％残。淡橙茶褐色。基準資料。

Ⅲ$_2$—３類　６（№.５）口縁部50％、底部100％残。基準資料。淡橙褐色。

Ⅲ$_2$—４類　３（№.５）30％残。基準資料。淡橙褐色。

Ⅲ$_2$—５①類　２（№.11・12）口縁部８％、底部80％残。基準資料。内面磨滅。淡橙褐色。

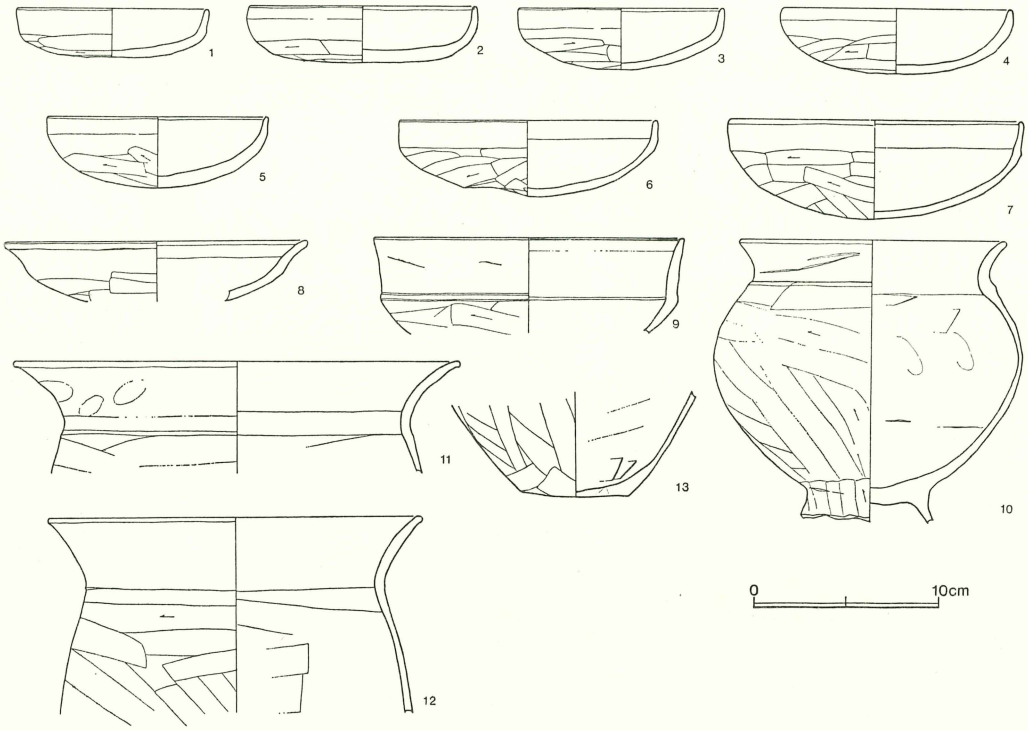
Ⅲ$_2$—５②類　１（６・７住）約20％残。基準資料。黒褐色。

２　皿

Ⅲ$_2$—６類　８（№.10）20％残。基準資料。明橙褐色。

３　埦

Ⅲ$_2$—７類　７（カマドNo.３）ほぼ完形。外面磨滅。内面約60％は遺存状態良く、口縁部横ナデ



第15図　第６号住居跡出土遺物実測図

痕底部木ロナデ痕が明瞭に残る。外面篦削り。

4　小形台付甕

Ⅲ$_2$—８類　10（カマド中№.２）基準資料。台部と口縁部40％を欠く。口縁部明橙褐色。２次加熱を受け、内面黒褐色、外面茶褐色～黒色となる。台部内面は黒色。

5　甕

Ⅲ$_2$—９類　11（カマド中№.２）20％残。基準資料。12（№.14）とは同一個体である。口径は11に近い。13（№.８）底部のみ残存。外面黒色。内面橙茶褐色。やはり11と同一個体かもしれない。

図示しなかったものに、Ⅲ$_1$—10類系の大形壺の口縁部破片と、ＭⅠ—５類系の鉢形で、やや器肉厚く、胎土は４類に似た焼成の良い甑が一点出土している。９（№.１）の坏は赤彩され、６号住と７号住の切り合いでなくなってしまった住居跡のものと考える。

第７号住居跡（第９図・図版３）

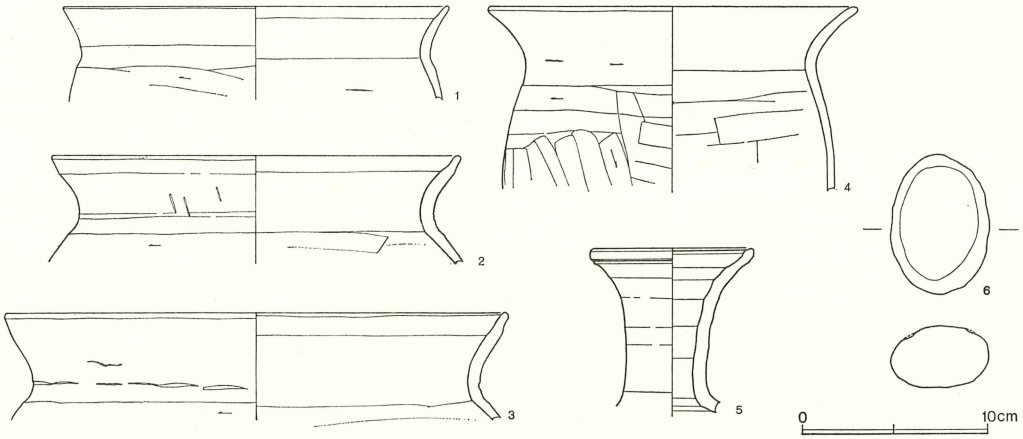
位置は第２地点西側にあり、５・６号住居跡と切合っており、遺構の大部分は６号住居跡にこわされている。

形状は北東隅のやや丸い方形を呈する。

大きさは4.5×（4.2）m。

主軸の方向はM—105°—E（長軸方向）。

カマド等の付属施設は検出できなかった。



第16図　第７号住居跡出土遺物実測図

壁高は西側で22cm程でやや斜めに立上がる。

遺物は土師器甕破片が出土しているが、混入している。

第７号住居跡出土遺物（第16図）

真間第Ⅱ$_2$期に属する。

土師器

１　壺

MⅡ$_2$—10類　２（No.３）と３（No.２）は同一個体と思われる。微細粒砂を含む、焼成良く明茶褐色を呈す。約25％残。口縁部内面磨滅。基準資料。

MⅡ$_2$—９類　１（No.１）10％残。口径はやや小さくなるものと思われる。口縁部内外面磨滅。茶褐色、口縁外面黒褐色。

MⅡ$_2$—11類　４（No.１）約20％残。口径はやや大きくなるものと思われる。赤茶褐色、口縁部内外面一部黒色。

須恵器

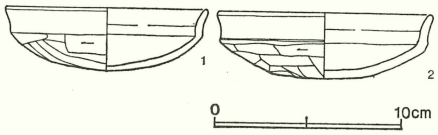
横瓶（２号土壙No.９）　石英・角閃石などの微細粒砂含む。焼成良。暗灰色。内面に濃緑色、外面に黒色の自然釉が付着する。40％残、この資料は整理時のミスで、７号住に入ってしまったが、２号土壙よりの出土遺物である。

軽石

６（７号住）１mm大の角閃石を含む浮石。全面磨かれる。上面に削られた跡あり。

第８号住居跡（第18図・図版４）

第２地点西側に位置する。東側を９号住居跡に切られている。



第17図　第８号住居跡出土遺物実測図

形状は東西方向に長い長方形を呈するものと思われる。

大きさは（1.75）×2.8m

主軸の方向はN—81°—E

カマド等はない。床面は平坦で堅い。立上がりは5㎝と浅い。

遺物は№1・2の土師器坏がほぼ床面から出土している。

第8号住居跡出土遺物（第17図・図版43）

鬼高第Ⅴ期に属する。

土師器

1　坏

ⅤO—2類　1（№2）口縁部25％欠く。淡橙褐色、底部外面黒斑。2（№1）ほぼ完形。胎土は基準資料とほぼ同じであるが焼成良く硬質。橙褐色。

第9号住居跡（第18図・図版4）

第2地点西側に位置し、北側に10号、西側に8号の各住居跡が切合っている。

形状は東西方向に長い長方形を呈する。

大きさは2.4×3.1㎡。

主軸の方向はN—82°—E。

カマドは東壁を70㎝程掘り込んでいるが浅い。焚口部の掘込みはなく、灰、焼土等はほとんど検出されなかった。袖の芯として土師器甕を伏せて利用している。

床はほぼ平坦で堅い。壁高は南側で21㎝でまっすぐに立上がる。

遺物はカマド中から№2の土師器坏、№4・5の甕が出土しており、№1・3の坏は覆土中から出土したものである。

第9号住居跡出土遺物（第19図・図版43）

真間第Ⅰ期に属する。

土師器

1　坏

MⅠ—1類　2（カマド中№1）接合しない2片より成る。35％残。大形。底部と口縁部の境に緩い稜をもつ。胎土は鬼高器の粉っぽい土器と同様混入する超微粒～細粒砂の量は少ないが、焼成は極めて良い。図よりやや径は大きくなるかもしれない。明橙褐色° この他にもカマド中から鬼高期の特長をもつ土器片が出土している。

MⅠ—3類　3（カマド中№2）75％残。基準資料よりもやや微～細粒砂の量は多く焼成も良い。2類よりもなめらかな感じ。外面磨滅。橙茶褐色。内面に煤付着。

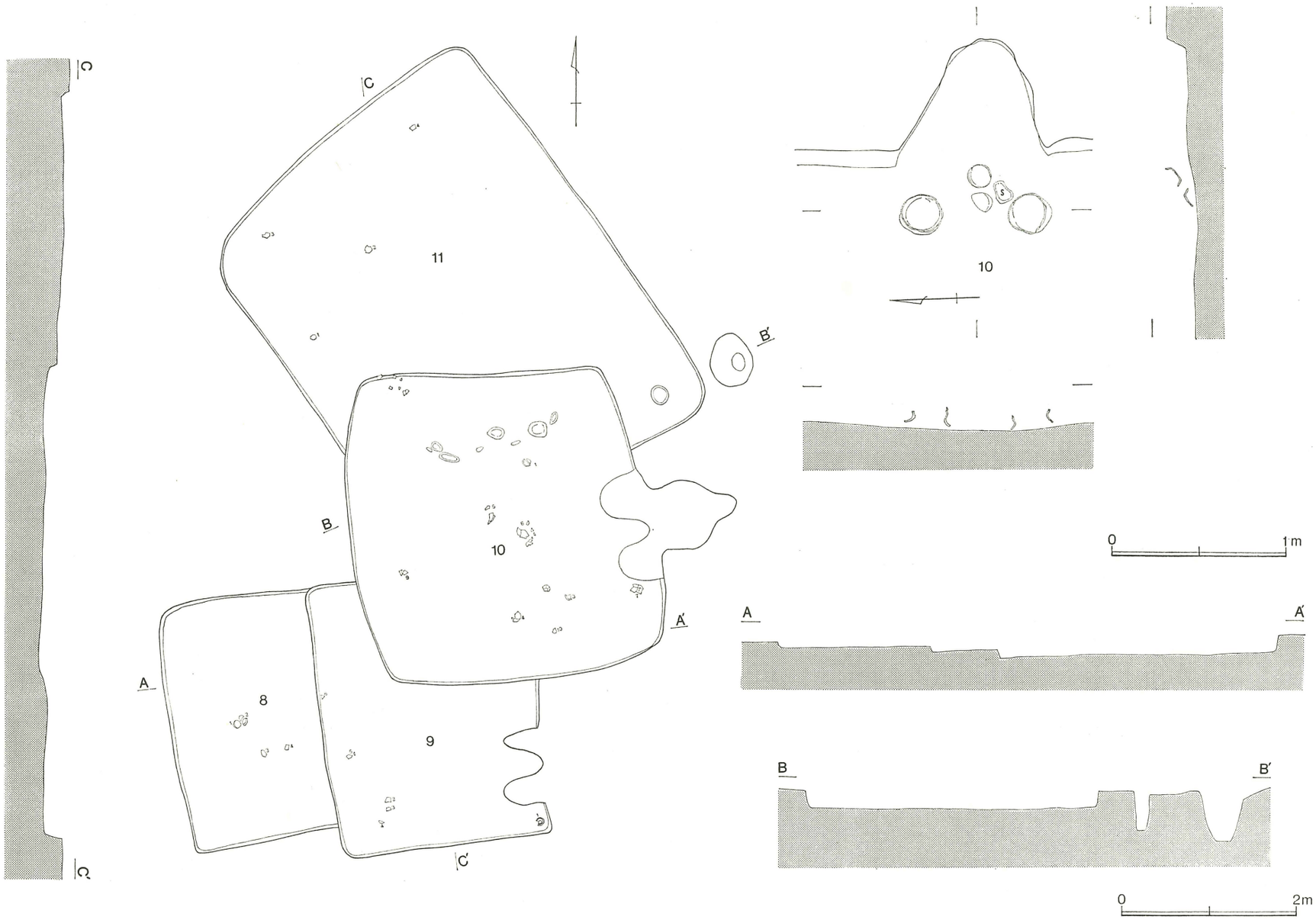
MⅠ—4類　1（№1）75％残。暗橙褐色、底外面に黒斑。この他に（№2）がこの類の土器である。

2　甕

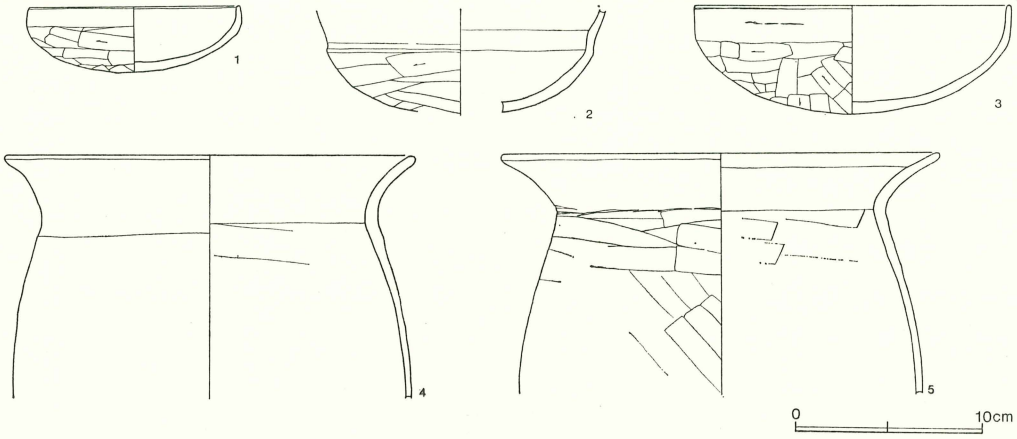
MⅠ—12①類　4（カマド№3・5）上半部のみ残存。明橙褐色。内外面磨滅。5（カマド中）上半部のみ残。暗橙褐色。

第10号住居跡（第18図・図版5）

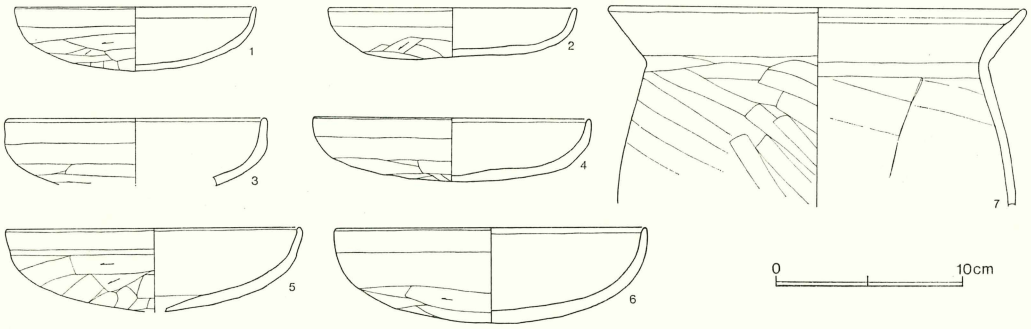
第2地点西側に位置し、第9号住居跡、11号住居跡を切っている。西側に隣接して2～7号の各住居跡がある。



第18図　第８・９・10・11号住居跡・第９号住居跡カマド実測図



第19図　　第９号住居跡出土遺物実測図



第20図　　第10号住居跡出土遺物実測図

覆土は灰茶褐色土を主体とし、堅い。

形状は壁のやや張った、方形を呈する。

大きさは4.5×3.6*m*。

主軸の方向はN—87°—E。

カマドは西壁を80*cm*程掘り込んでつくられていた。

床はほぼ平坦で堅い。壁高は南側で21*cm*でまっすぐに立上がる。

遺物はいずれも床面からやや浮いた状態で出土している。土師器坏・甕である。

第10号住居跡出土遺物　（第20図・図版43）

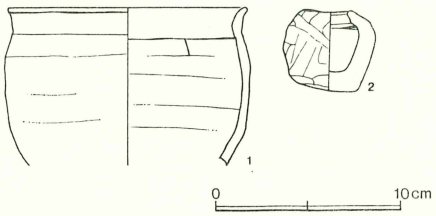
真間第Ⅱ$_1$期に属する。８、９、11住と重複

土師器

１　坏

MⅡ$_1$—２類　６（№６・D区表土）口縁部30％を欠く。胎土焼成はMⅠ—３類と同様、砂粒の量は少なくやや軟質となる。５（№６・D区表土）45％残。扁平な器形となる。胎土焼成は６と同じ。３（№２）約30％残。含まれる砂粒やや少なく、焼成やや甘い。外面磨滅。橙褐色。

MⅡ$_1$—４類　４（№３）25％残。基準資料。２次加熱により、内外面磨滅。明橙褐色～淡黄褐色。２（№１）75％残。２次加熱。淡暗褐色。やや小形。



第21図　第11号住居跡出土遺物実測図

甕

MⅡ1—10類　7（№.7）25%残。基準資料。

第11号住居跡（第18図・図版5）

第2地点西側にあり、第10号住居跡に切られている。

形状は四隅のやや丸味を持った長方形を呈する。

大きさは5.1×3.9m。

主軸の方向はN—55°—W。炉跡は検出できなかった。

柱穴は1個検出されており、直径22cm程の円形で、42cmの深さがある。なお、壁外にもこれよりやや大きな穴があるが、本住居跡に伴なうものかどうか不明である。

床面はほぼ平坦である。壁高は8cmと浅い。遺物は№.1の小形甕破片がやや浮いた状態で、又、№.2の小形手捏土器がほぼ床面上から出土している。

第11号住居跡出土遺物（第21図・図版44）

鬼高第Ⅰ期に属する。

土師器

1　小形壺

OⅠ—12②類　1（№.2）口縁部20%、胴部40%残。胴部と口縁の境の線は整形のものではなく粘土紐の巻き上げ痕である。胎土には微粒砂の他粗粒～小石を含みややごつごつした感じ。焼成良く硬質。赤褐色。赤彩か？

2　手捏　ミニチュア土器

胎土は精製されて密、焼成も良い。淡橙褐色～暗褐色。

第12号住居跡（第22図・図版6）

第2地点北西側に位置する。13号住居跡を切っている。

形状は四隅のやや丸い方形を呈する。

大きさは3.7×3.1m。主軸の方向はN—116°—E

カマドは東壁を50cm程掘り込んでつくられている。床は平坦で堅い。

壁高は北側で7cmと浅い。

遺物は土師器甕が南壁下の床面直上付近から出土しているが、第13号住居跡と切合っており、壁の位置が推定によっており、不明確な為、第13号住居跡に入れるのが妥当であろう。

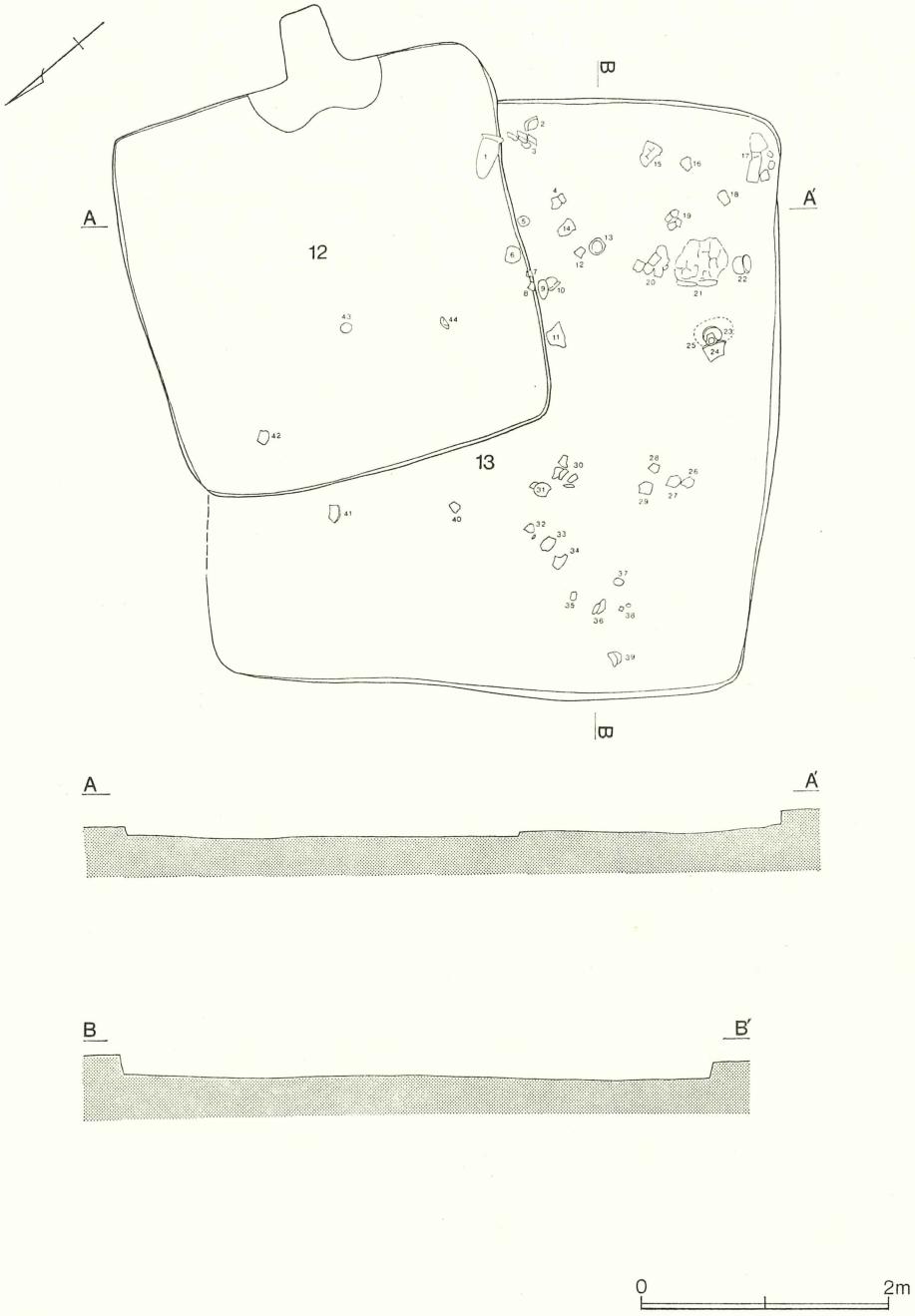
第12号住居跡出土遺物（第23図）

鬼高第Ⅳ1期に属する。

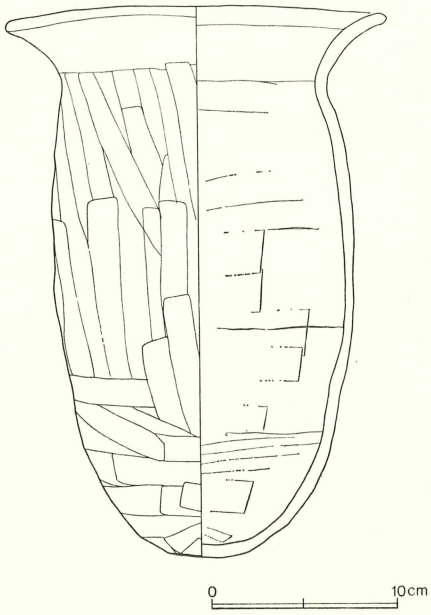
土師器

甕

OⅣ1—16類　（№.1）口縁部と胴部65%、底部100%残存。口径20.4cm、胴部最大径16.2cm、器高29.5cm。底部と体部の境は不明瞭となり、底部は丸味をもつ。器高は低い。口縁部は長く、大きく外反し、歪みも著しい。胎土には角閃石、浮石などの細粒砂と、石英などの粗粒砂を含む。橙褐色、2次加熱のため朱色～暗褐色を呈する。



第22図　　第12・13号住居跡実測図



第23図　第12号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡（第22図・図版６）

第２地点北西側に位置する。第12号住居跡に東側を切られている。

形状は東西方向にやや長い長方形を呈する。

大きさは4.8×4.5*m*

主軸の方向はN—132°—E（長軸）。

カマドは13号住居跡に切られた北壁にあったと思われる。床面は平坦。壁高は西側で16*cm*を測る。

遺物は南東側の床面よりやや浮いた状態で破片で多く出土しており、土師器坏・埦・小形甕・台付甕・鉢・甕等がある。№.３の台付甕、№.４小形甕は床面上から出土している。

第13号住居跡出土遺物（第24図・図版44）

鬼高第Ⅲ期に属する。

１　坏

ⅢO—２②類　１（№.36）20％残。２次加熱。黄褐色～朱色。

２　埦

ⅢO—５類　２（№.31）30％残。基準資料。整形はやや粗く内面に木口状のナデ痕が著しい。

３　高坏

ⅢO—７類　５（不明）脚部のみほぼ完形。裾部接地面に木葉痕残る。胎土は、５類に似る。軟質。赤彩か？　坏部内面は磨かれる。

４　鉢

ⅢO—８　６（№.24）口縁部20％、体部25％残。口縁部内面に指頭圧痕残る。

５　小形壺

ⅢO—13②類　４（№.22）口縁部20％。胴部40％、底部85％残。基準資料。

６　台付甕

ⅢO—16類　３（№.23）脚裾部を欠く。上部完形。基準資料。

７　甕

ⅢO—17類　７（№.21）ほぼ完形。胎土は16類に似るが、やや砂粒少なく焼きも甘い。２次加熱。黄橙褐色～暗褐色黒斑。

８　甑

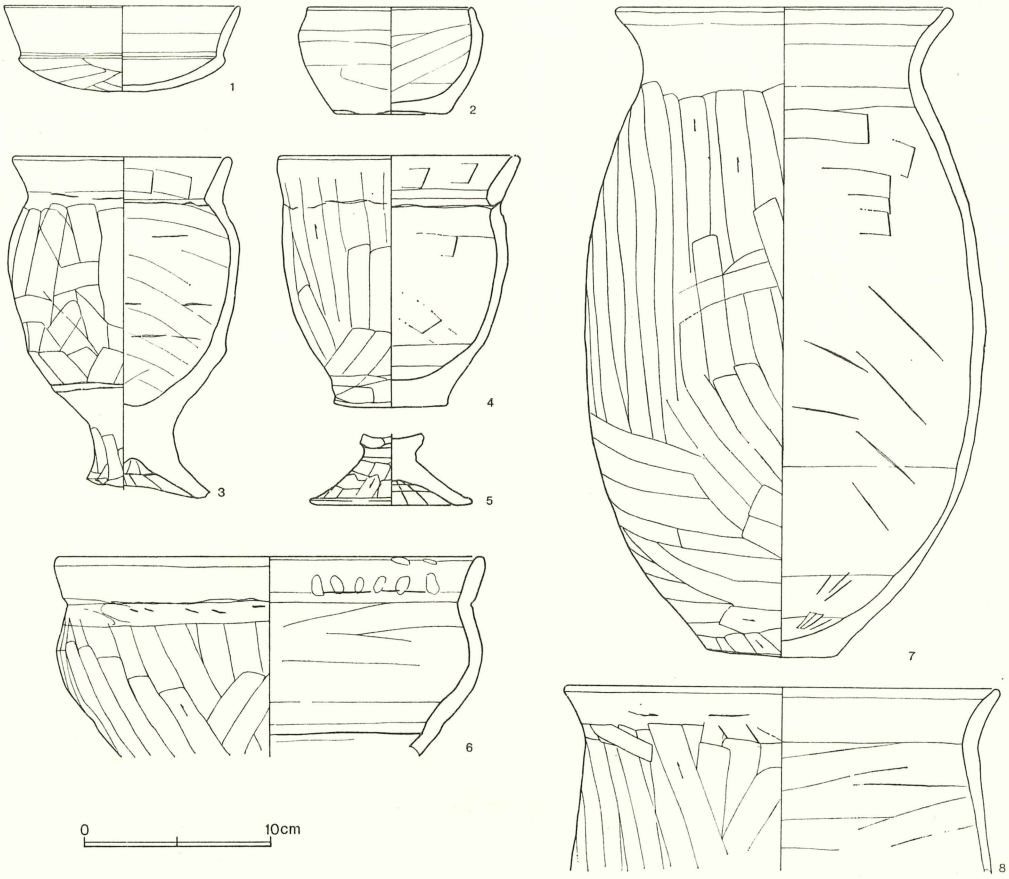
ⅢO—18①類　８（№.11・33）口縁部28％、胴部40％残。基準資料。

第14号住居跡（第25図・図版７）

第２地点中央部に位置し、西側に３号土壙、東側に第15号住居跡が隣接している。

形状は北側の二隅がやや丸い。方形を呈する。大きさは3.8×4.1*m*。主軸の方向はN—71°—E。

カマドは東壁につくられていたようであるが、焼土の痕跡のみで詳細は不明である。



第24図　　第13号住居跡出土遺物実測図

壁高は北側で21㎝でまっすぐに立上がる。床面は平坦で堅い。

遺物は住居跡中央部からカマド周辺にかけての床面から出土しており、土師器坏・甕・甑等がある。

第14号住居跡出土遺物（第26図・図版44）

鬼高第Ⅳ$_2$期に属する。

土師器

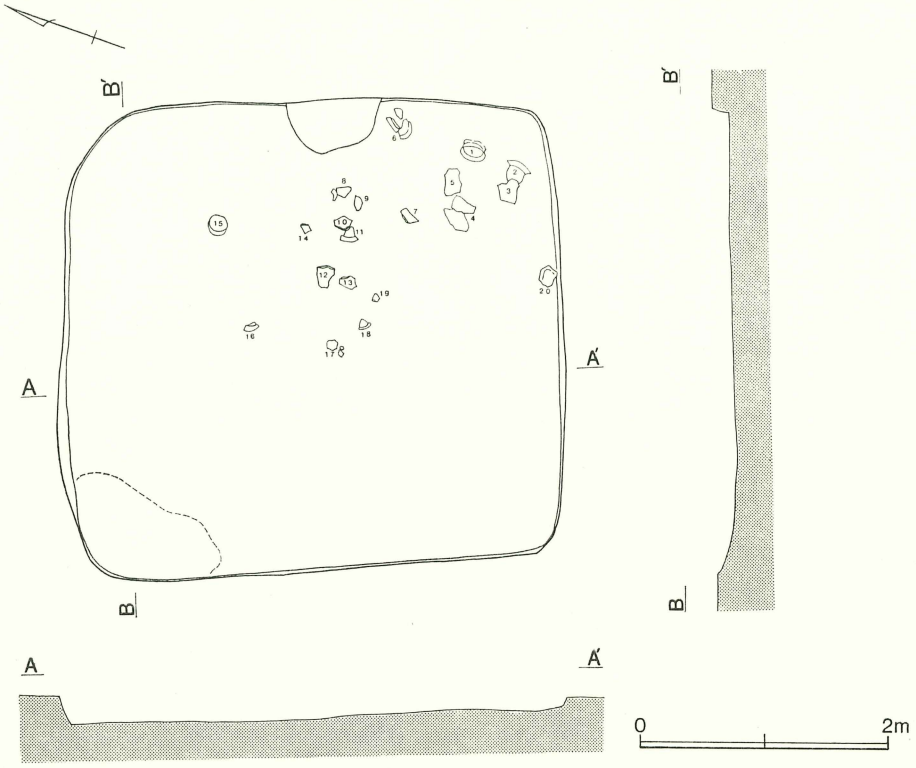
1　坏

OⅣ$_2$—1①類　3（№15）口縁部55％を欠く。基準資料。軟質で器面の磨滅が著しい。内面は炭素吸着により全面が黒色となるが、特にみがかれてはいない。2（№6）口縁部は端部がつままれて直立する。内面黒色。60％残存。

OⅣ$_2$—2①類　1（ピット1）ほぼ完形。淡橙褐色。2次加熱を受け、一部朱色。

2　その他の坏

4（№20）26住の3と同じ形態であるが大形。口径14.0㎝、器高5.0㎝を測る。45％残。焼成は26—3より甘く、明橙褐色を呈する。



第25図　　第14号住居跡実測図

3　甕

OⅣ₂—14②類　5（№.11・12）40%残。胎土は26—15より細、粗粒砂が多く、浮石を混入する。焼成は良く焼きしまる。外面赤褐色～暗褐色、内面、黄褐色～赤褐色、口縁部に黒色の沈線が30%めぐる。6（№.1）胴部下半以下を欠くが上部は完形。器肉は薄く一定でていねいなつくり。胴部は丸味をもつ。長甕ではなく、器高はやや低くなる形態と思われる。胎土に含まれる砂粒は5とほぼ同じであるが、細粒砂となり角閃石が目立つ。細砂粒を多く含み、ザラザラした感じ。焼成良く焼きしまる。淡橙褐色、外面、黄褐色～暗褐色。

4　甑

OⅣ₂—15②類　上半80%、下半50%残。基準資料。外面には粘土ひもの痕をのこし凸凹となる。内面はヘラナデつけされるがあまり丁寧でない。

第15号住居跡（第27図・図版8）

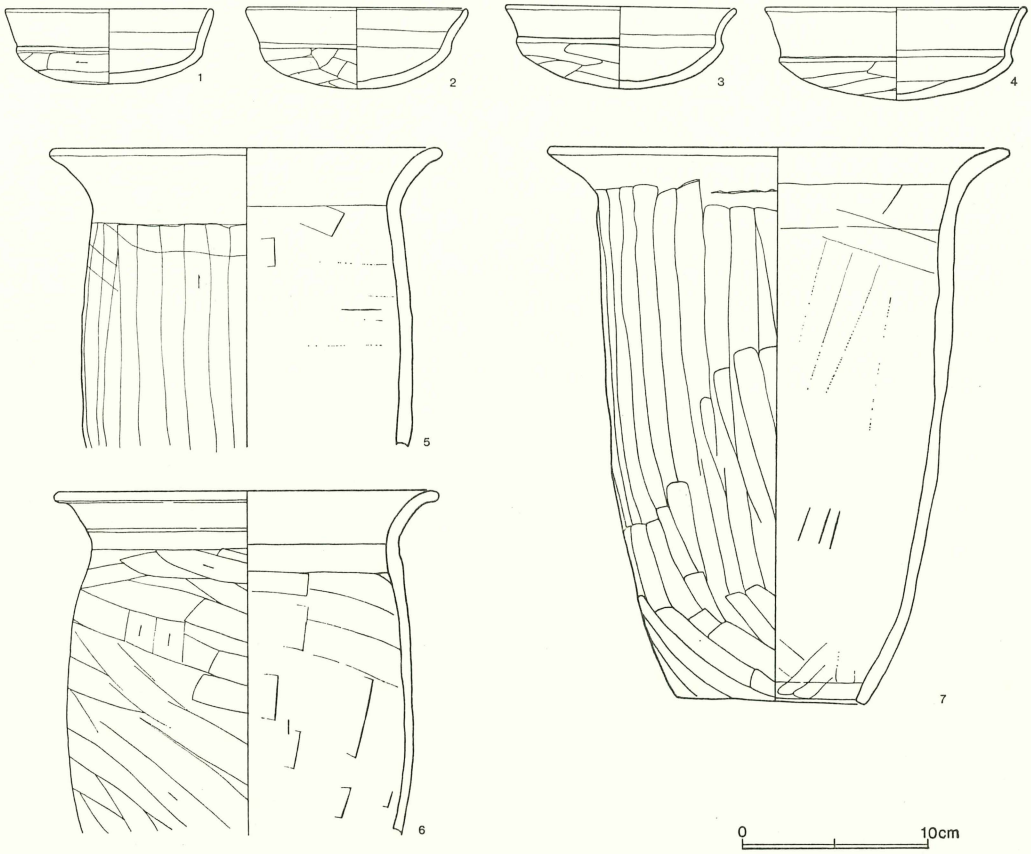
第2地点中央部北寄りに位置し、第5号土壙に切られており、第4号土壙が隣接している。

覆土は単一の灰褐色土層であった。形状は北壁のやや短かい台形状を呈する。

大きさは3.5×3.1*m*。主軸の方向はN—99°—E。

カマドは東壁南寄りにあり、壁を55*cm*程掘込んでつくられているが浅い。床面は平坦である。壁高は西側で15*cm*と浅い。

遺物はカマド近くの床面上から土師器坏破片2・3・4が出土している。



第26図　　第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物（第28図・4号住）

4号住と混同している。詳細は4号住出土遺物の説明を見られたい。

第16号住居跡（第29図・図版8）

第2地点東側に位置し、南側に第17、19～22号の各住居跡があり、第7号土壙を切っている。

覆土は淡灰褐色土を主体とし、下層は暗褐色土が堆積していた。

形状は主軸方向に長く、西壁の短かい台形を呈する。

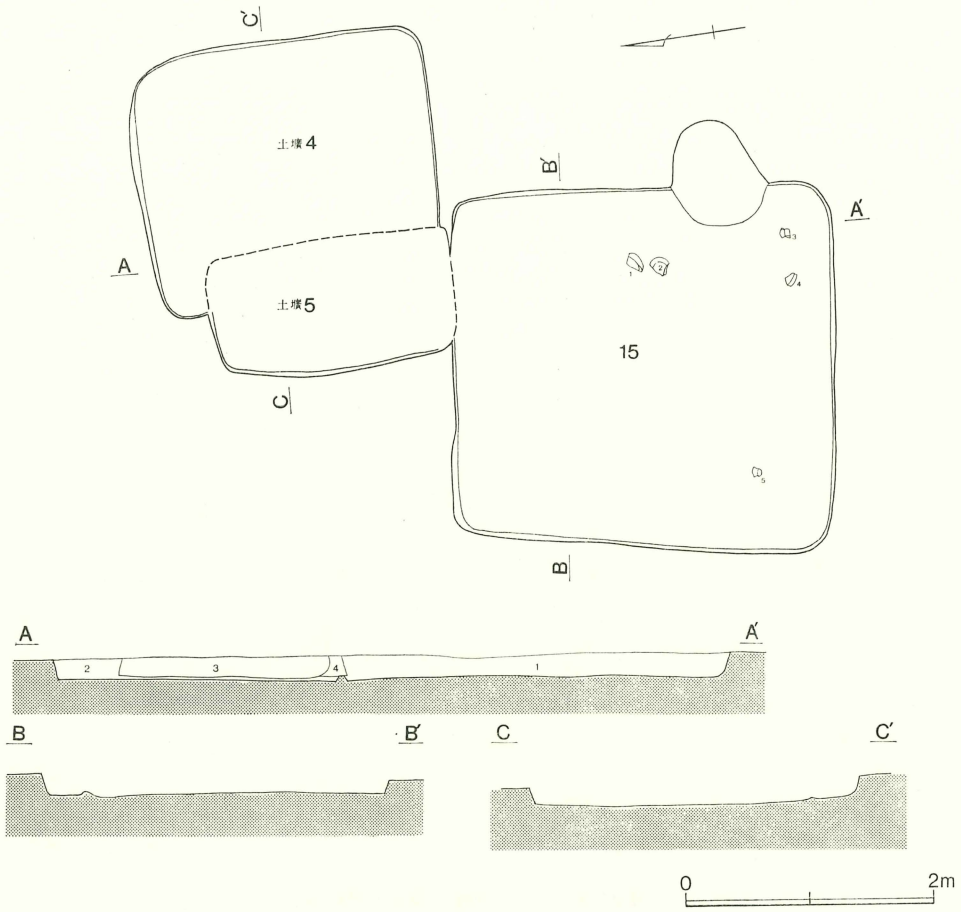
大きさは6.7×3.3m。

主軸の方向はN—111°—E。

カマドは東壁のほぼ中央部を73cm程掘込んでつくられており、底は舟底状で、段をもって垂直に近く立上がる。底には直径16cm程のピットが焚口寄りにある。

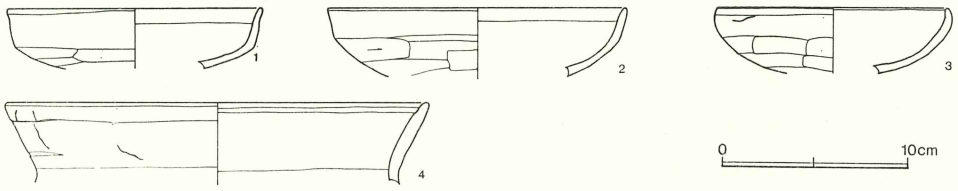
床面はほぼ平坦で西壁付近でやや高くなっている。なお、床面下の地山は礫の混入した砂質土層で堅い。壁は南側で30cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマド中から№1・2の土師器甕、№4の坏が出土しており、他は覆土中から出土したものである。

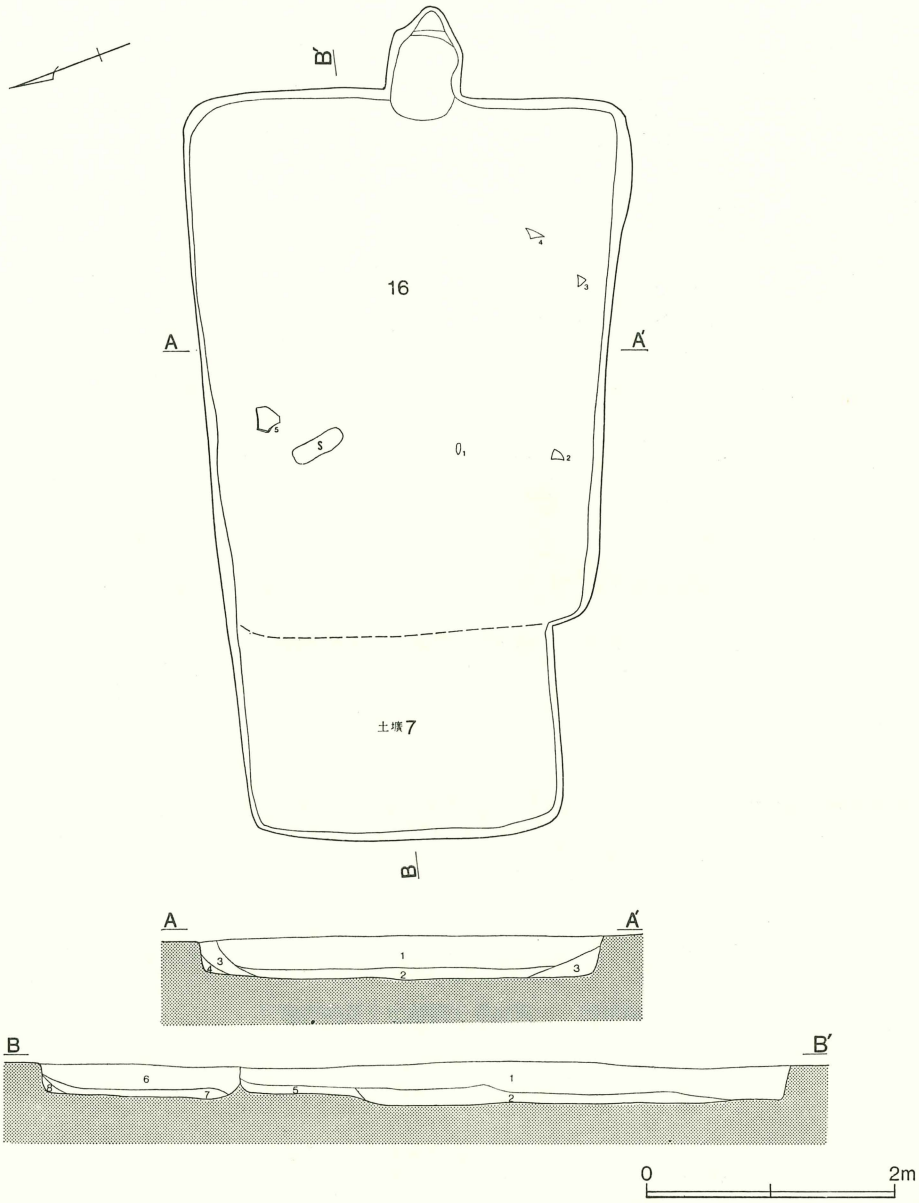


1　灰褐色土　　2　灰褐色土　　3　暗褐色主中に焼土を含む　　4　暗褐色土

第27図　　第15号住居跡・4・5号土壙実測図

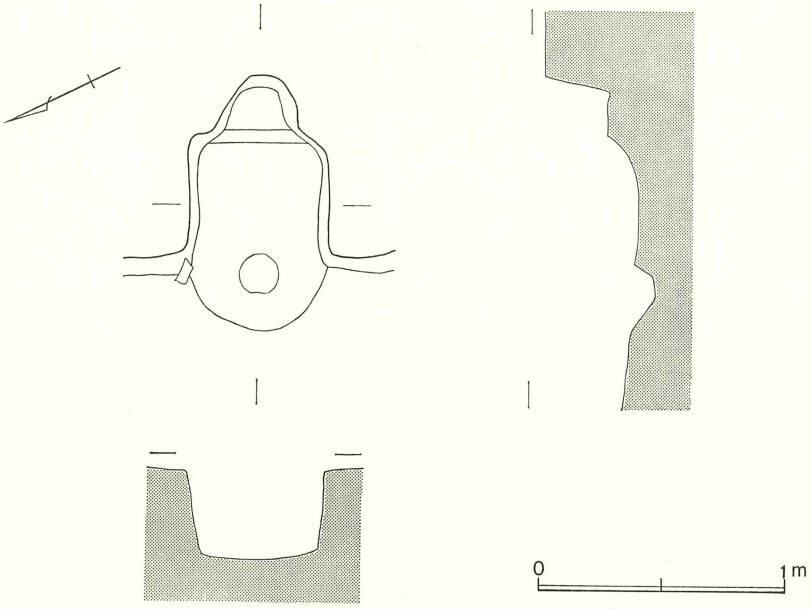


第28図　　第15号住居跡出土遺物実測図

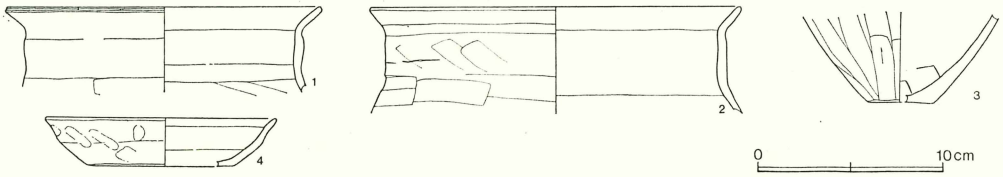


1　淡灰褐色　焼土・炭化物・砂粒を多く含む
2　暗褐色土　焼土・炭化物を含む
3　暗茶褐色土
4　灰茶褐色土　砂質
5　淡茶色土　茶褐色のローム状ブロックを含む
6　淡褐色土　焼土・炭化物・砂粒をやや含む
7　褐色土　炭化物を少量含む　茶褐色土をブロック状に含む
8　茶褐色土　粘性が強い
　（地山　砂質土層・堅緻である）

第29図　　第16号住居跡・第７号土壙実測図



第30図　第16号住居跡カマド実測図



第31図　第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物（第31図）

国分第Ⅱ期に属する。

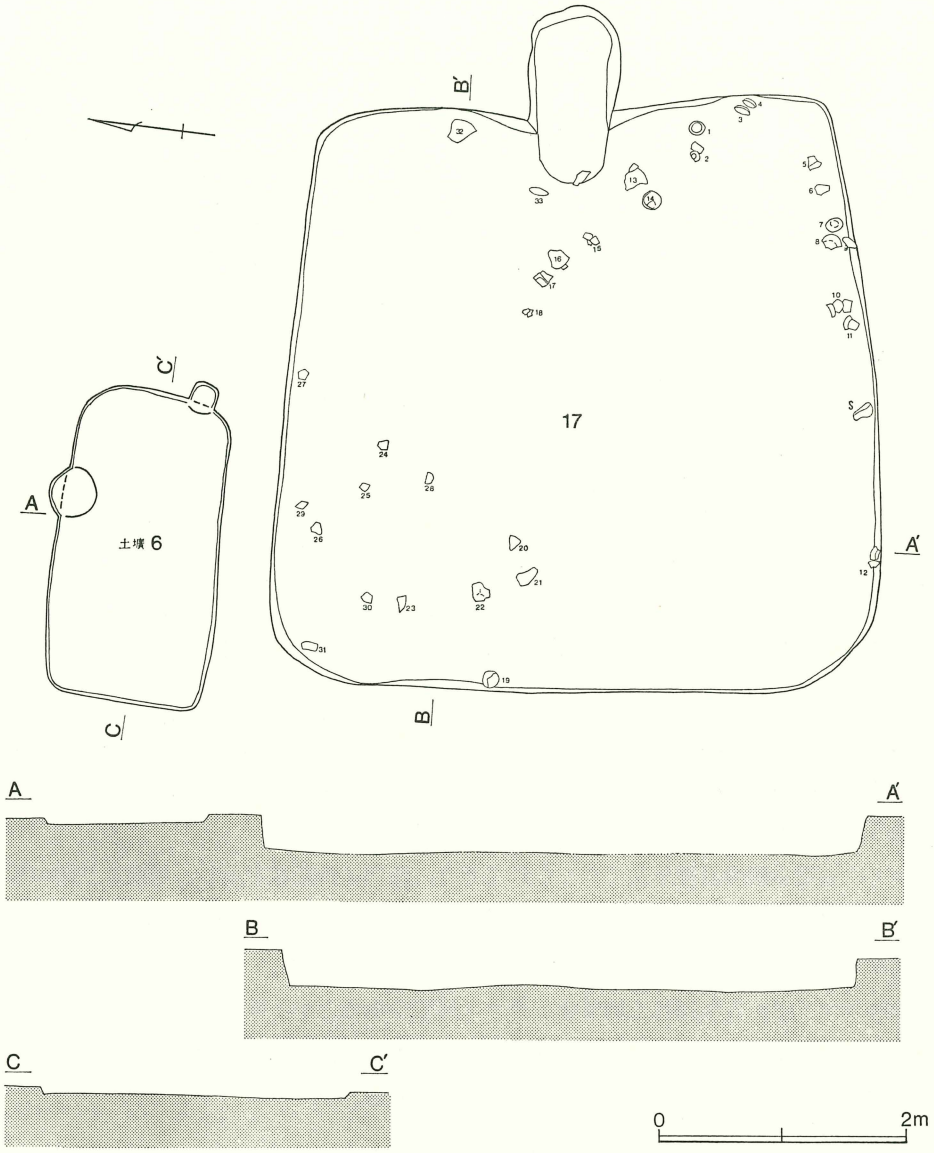
土師器

1　坏

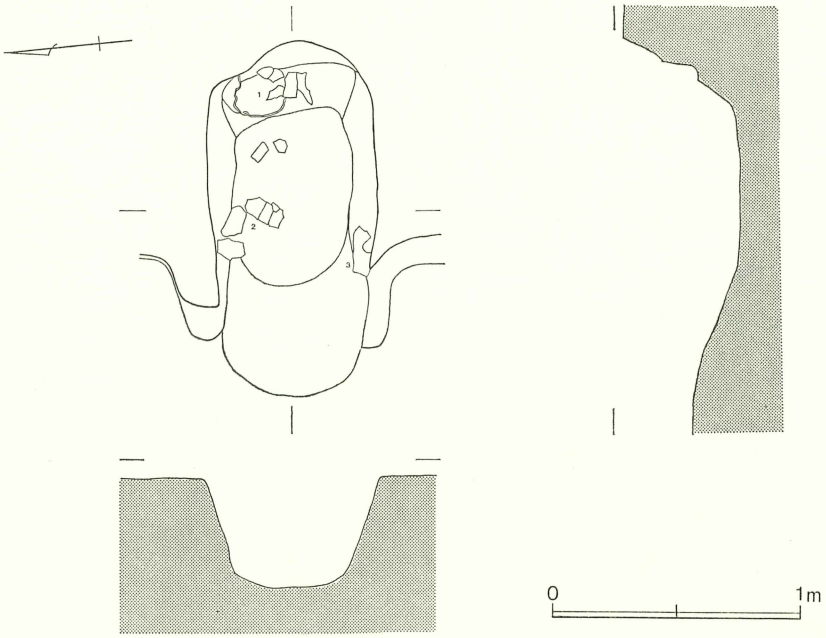
KⅡ—3類　4（カマド）約20％残。微粒砂含む。焼成良。内面磨滅。橙茶褐色。基準資料。

2　甕

KⅡ—8類　2（カマド）8％残。微細粒砂。焼成良。橙褐色。基準資料。1（カマド・D区覆土）25％残。胎土、焼成、手法は2と同じ。3（№ナシ）25％残。微、細粒砂多含。焼成良。外面黒褐色、内面灰褐色。



第32図　　第17号住居跡・6号土壙実測図



第33図　　第17号住居跡カマド実測図

第17号住居跡（第32・33図・図版９）

第２地点中央部やや東寄りの部分に位置し、北側に第６号土壙、南側に第18号住居跡が隣接している。

形状はカマドをもつ東壁はやや短く、西側の二隅の丸い台形を呈する。

大きさは5.5×4.9*m*。

主軸の方向はN—82°—E。

カマドは東壁を80*cm*程掘込んでつくられており、底面は舟底状を呈し、床面より20*cm*程低い。壁は急角度に立上がる。

床面は平坦で堅い。壁高は南側で21*cm*で垂直に立上がる。

遺物はカマド中から№15の土師器甕、カマド周辺の床面上から№１、２、９、11の土師器坏が、又南壁床面近くから４、６、10、12、20の皿・坏類があり、又、７、19の坏、そして13の鉢は壁の上から落ち込むように、覆土中から出土したものである。

第17号住居跡出土遺物（第34図・図版45）

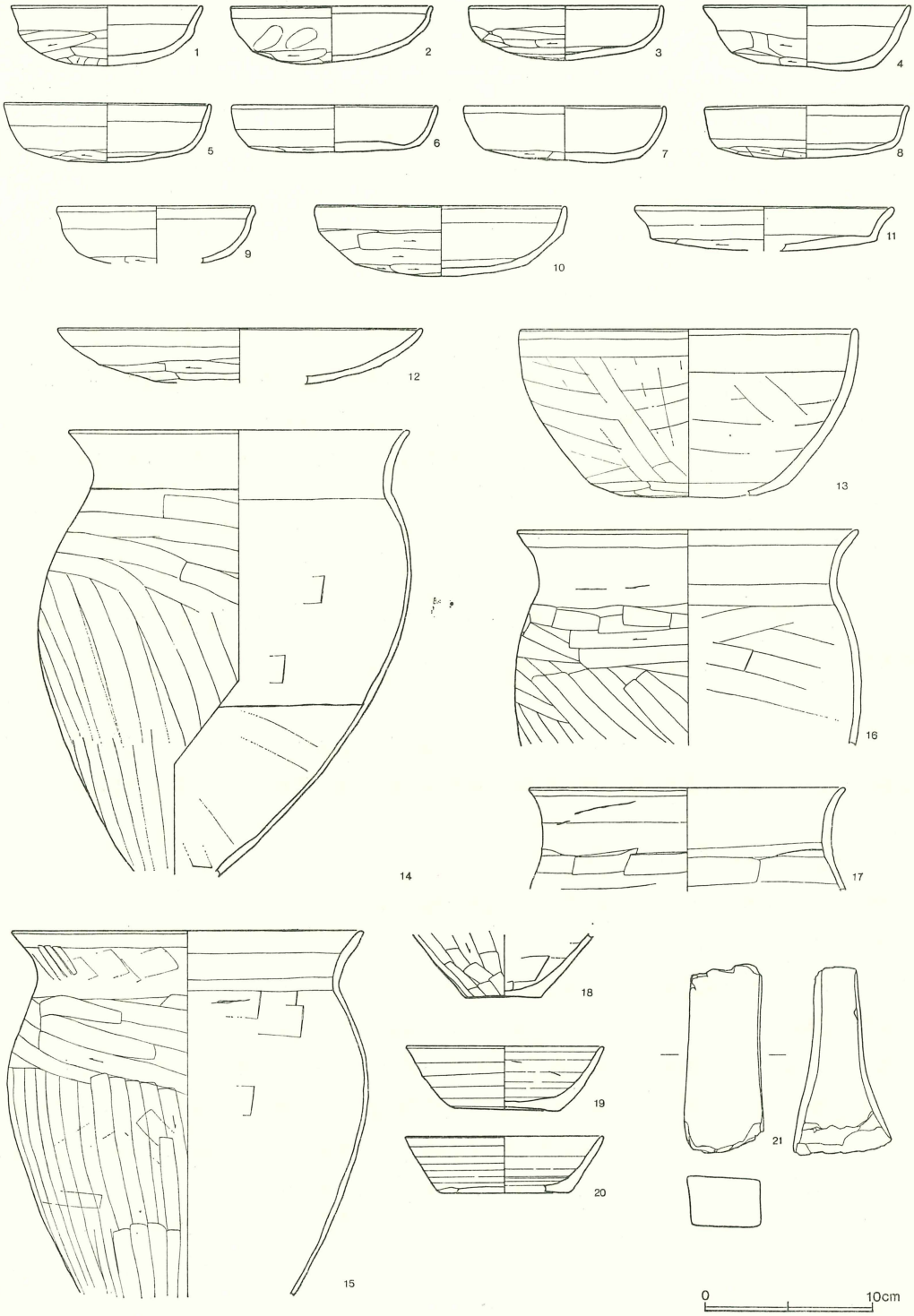
真間第Ⅳ期に属する。

土師器

１　坏

ⅤM—１類　１（№18）ほぼ完形。基準資料。

ⅤM—２①類　５（№１）ほぼ完形。基準資料。暗橙褐色。２次加熱のため底部暗褐色。９（№17）20％残。橙赤褐色。



第34図　第17号住居跡出土遺物実測図

MⅤ—2②類　2（№14）80％残。基準資料。橙褐色。

MⅤ—3①類　10（№8）口縁部49％、底部80％残。基準資料。

MⅤ—4類　4（№7・10）口縁部48％、底部55％残。基準資料。内面に有機物付着。

2　皿

MⅤ—5類　6（№7）口縁部25％を欠く。基準資料。7（№3）口縁部50％、底部80％残。やや歪むが、つくりは8と同じ。色調は6と同じ。8（№10・11）底部の内径は広くなり、口縁部はほぼ直立する形態となる。口縁部60％、底部80％残。色調も6と同じ。

MⅤ—6類　11（№17）　18％残。基準資料。

MⅤ—7類　12（№12）　12％残。基準資料。

MⅤ—8類　13（№32）　口縁部21％。底部30％残。基準資料。

MⅤ—9類　18（№2）　40％残。基準資料。

MⅤ—10類　17（№33）　15％残。胎土焼成は12、13類と同じ。焼成良。橙褐色。基準資料。

MⅤ—12類　14（カマド中№1）75％残。基準資料。胴部は歪みが著しい。

MⅤ—13類　15（カマド中№3）70％残。基準資料。18（№2）底部のみ55％残。内面明橙褐色外面黒褐色。

須恵器

1　坏

20（№7）13％残。ろくろ整形。底部は篦切りか？体下端横篦削り。胎土には微～細粒砂を含み焼成は非常に良い。明灰色、外面に自然釉が薄くかかる。

2　高台付坏

19（№4）口縁部35％と高台部を欠く。図には高台を示さなかった。ろくろ水挽き成形。体部は直線的に開く。底部外面に時計回りの回転糸切り痕。貼付高台は剥落する。微～細粒砂含みやや軟質。灰色。

3　その他の遺物

砥石。21（№35）細粒砂岩。四面使用。両端は割れ口である。

第18号住居跡（第35図・図版9）

第2地点中央部東側にあり、北側に第17号住居跡が隣接している。

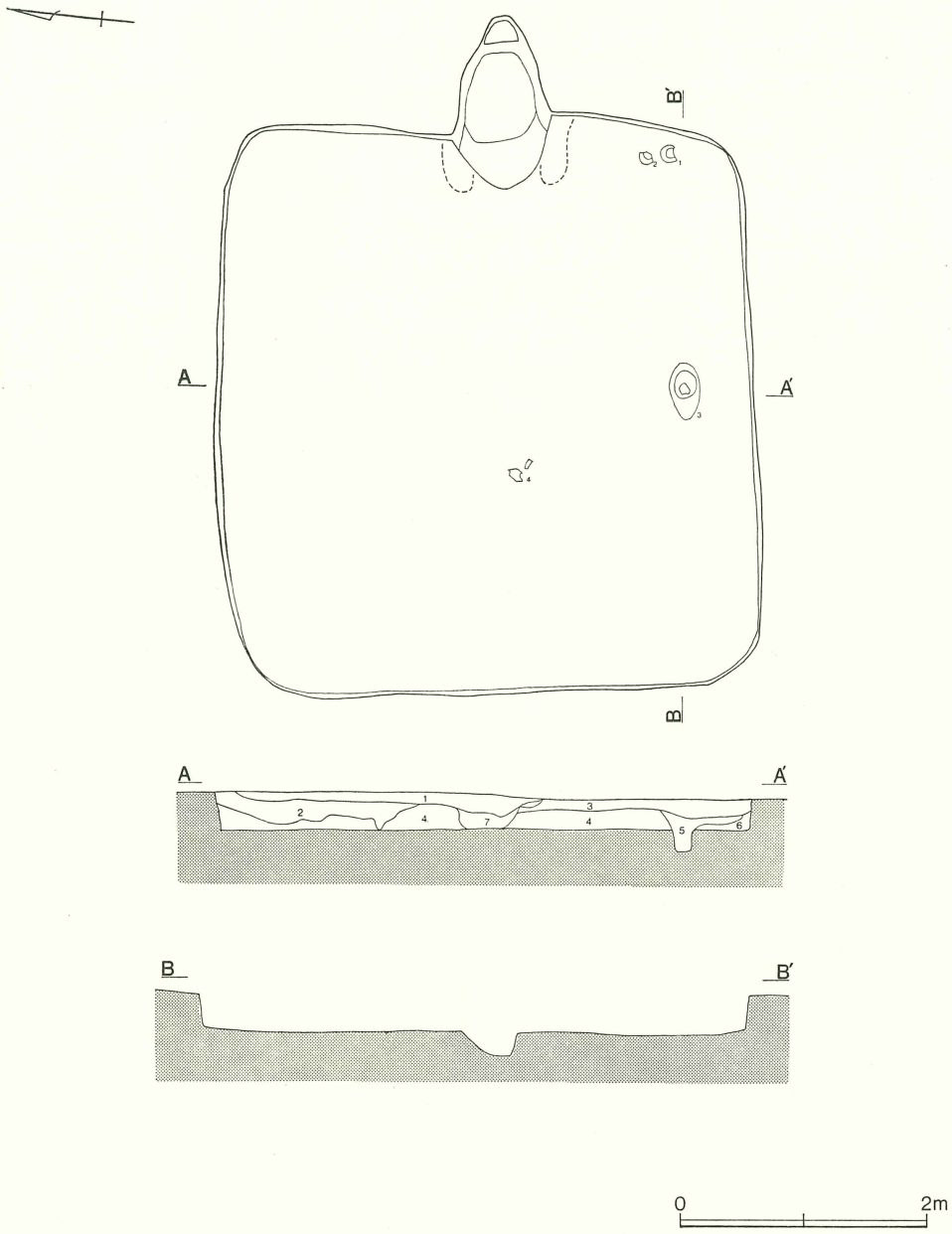
形状は四隅のやや丸い、カマドをもつ東壁のやや食い違った方形を呈する。

覆土は灰褐色土を主体とし、床面近くなるに従い砂質分の多い土が堆積していた。なお、中央部付近には焼土ブロックの流れ込みが見られ、北壁の中央部上方が焼けて赤変しているのが認められた。床面が焼けていない事、下層に炭化物・焼土等がない事等から、これは住居跡廃絶後に利用されたものと推定される。大きさは5.5×4.4m。主軸の方向はN—82°—E。

カマドは東壁中央部に80cm柱掘り込まれてつくられている。底は舟底状に掘り窪められており、二段に立上がって、煙道は更に1m30cm程延びているのが認められた。袖はほとんど残っていない。

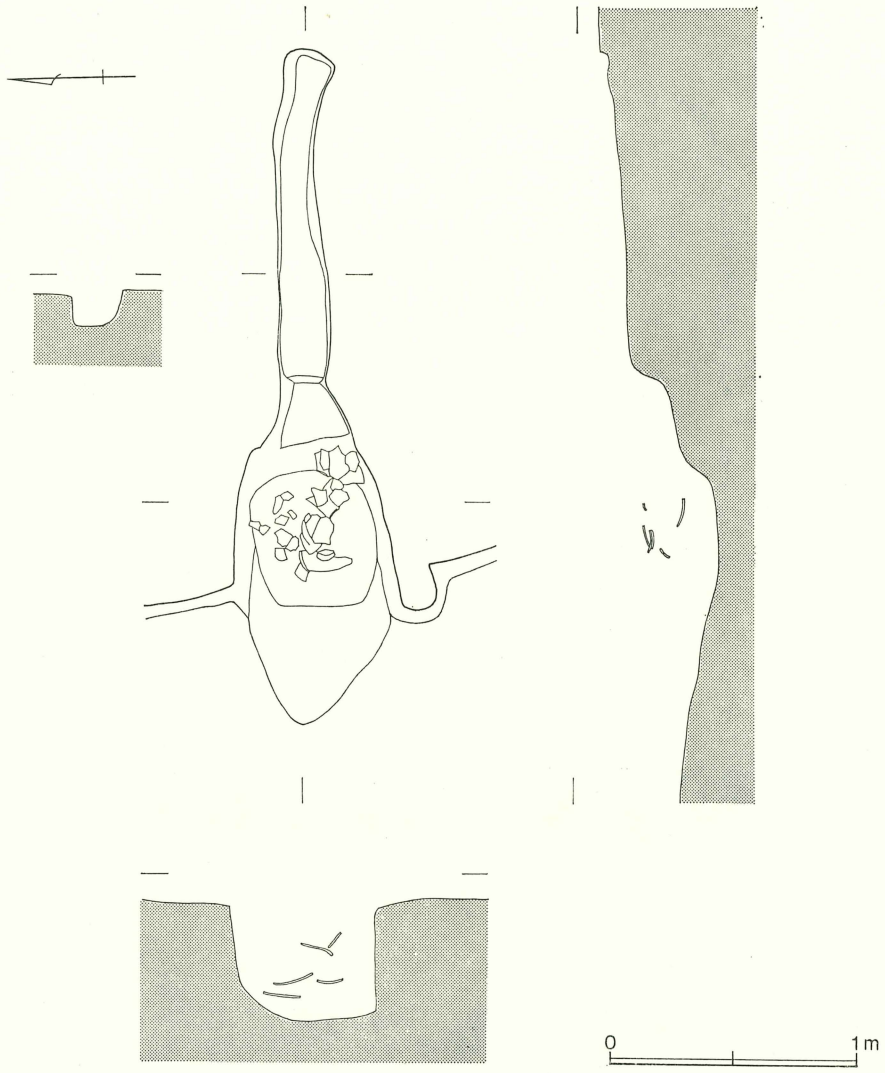
柱穴は南側中央部に1個あるのが認められた。

床面は平坦で堅い。壁高は北及び東側で30cmで垂直に立上がる。



1　灰褐色土　少量の砂　焼土　炭化物を含む。
2　暗灰褐色土　焼土　炭化物を多く含む。
3　灰褐色土　1より砂が少ない。
4　淡灰褐色土　砂を多く含む。
5　暗灰褐色土　炭化物を多く含む。
6　暗灰褐色土　炭化物焼土を多く含む。
7　焼土　ブロックが黒色土と層状となる。

第35図　　第18号住居跡実測図



第36図　第18号住居跡カマド実測図

遺物はカマドの覆土中から８の坏、11・13の甕が、又、貯蔵穴に落ち込むような形で覆土中から３・４・６の坏が出土しており、他は全て覆土中の出土である。

第18号住居跡出土遺物（第37図・図版46）

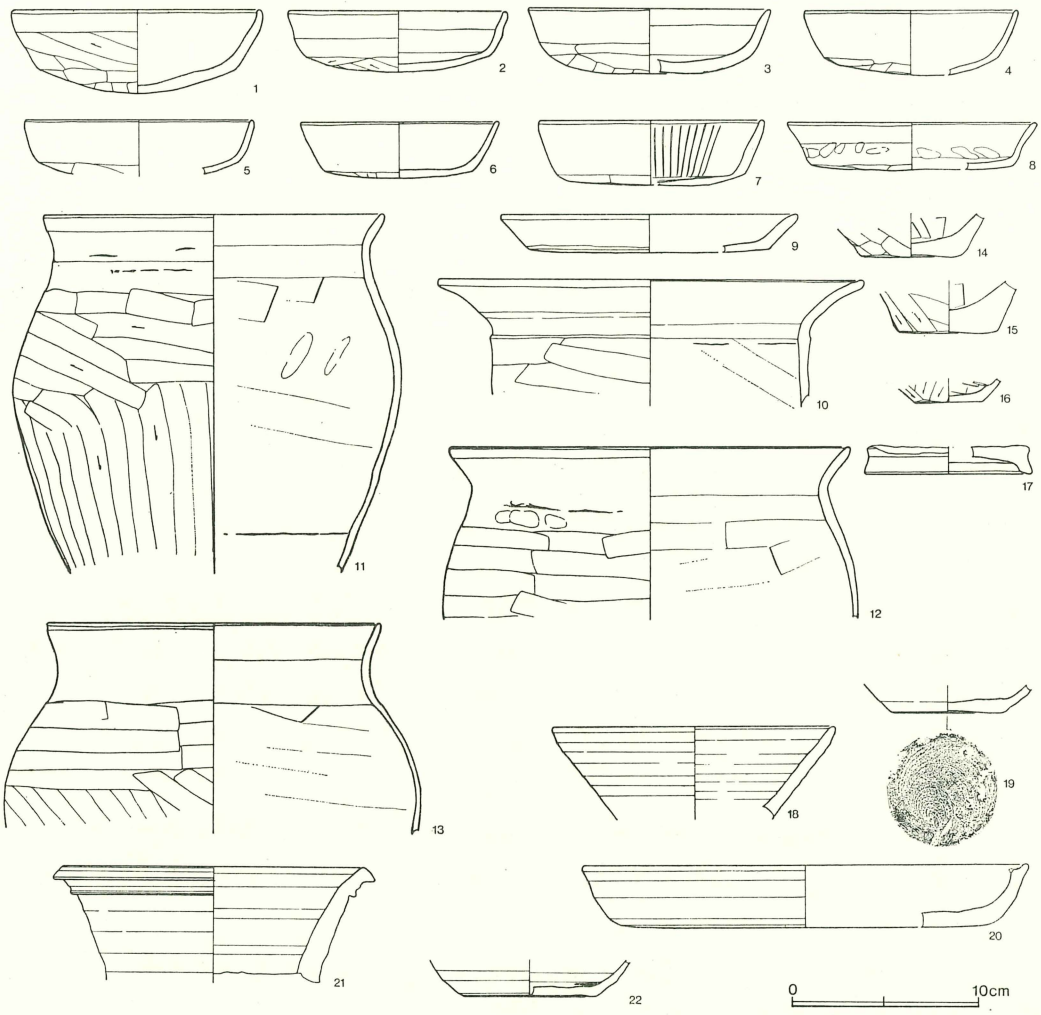
真間第Ⅳ期に属する。

土師器

１　坏

MⅣ—１類　３（南東隅貯蔵穴）口縁部80％、底部25％残。淡橙褐色。やや厚手。基準資料。

MⅣ—２類　２（№４）口縁部50％、底部90％残。淡褐色。２次加熱によって朱色～黒褐色。基準資料。



第37図　第18号住居跡出土遺物実測図

MⅣ—3類　1（№2・覆土）23%残。器肉は一定しない。

MⅣ—3②類　4（南東隅貯蔵穴）口縁部60%、底部10%残。

MⅣ—4類　5（覆土）30%残。基準資料。橙褐色。

MⅣ—5①類　6（南東隅貯蔵穴）20%残。基準資料。橙褐色。

MⅣ—5②類　7（覆土）口縁部100%、底面50%残存。基準資料。橙褐色～黄橙褐色。2次加熱のため特に外面荒れ、器面磨滅。

2　皿

MⅣ—6①類　8（カマド中）13%残。基準資料。橙褐色。

MⅣ—6②類　9（18号住）8%残。基準資料。橙茶褐色。

3　大形壺

MⅣ—7類　13（カマド中）口縁部6%、肩部20%残。基準資料。明橙褐色。16（覆土）底部の

み残。外面黒褐色、内面淡橙褐色。

4　甕

MⅣ—8類　10（覆土）11％残存。基準資料。

MⅣ—9類　12（№.1）18％残。基準資料。

MⅣ—10類　11（カマド中）底部を欠く。ほぼ完形。基準資料。

その他の土師器（鬼高期のもの）

14（№.1）壺底部のみ。胎土には酸化鉄、角閃石、浮石などの微～細粒砂と酸化鉄の小石を含む。焼成は良い。内外面とも赤褐色を呈する。内面木ロナデ、外面底部には1.5㎜程度の棒でおこしたようなあとがある。ナデ様篦削り。

15（№.3）壺底部のみ。分厚い。胎土には雲母、角閃石などの微粒砂、浮石、酸化鉄、片岩などの粗粒砂を多含する。焼成は比較的良い。橙褐色。内面木ロナデ、外面ナデ様篦削り。

須恵器

1　坏

19（覆土）底部のみ。胎土には微～細粒砂の他粗粒砂～小石を含み粗い。焼成良。暗灰青色。ろくろ水挽成形。底部には、時計回りの回転糸切り痕が残る。内面に重ね焼痕・22（覆土）底部30％残。ろくろ水挽成形。時計回り回転糸切り痕。胎土は19よりも密で薄手となる。焼成良。灰色。

18（南東隅貯蔵穴）35％残。厚手で胎土には微細粒砂を含み密。焼成良く堅緻。

2　高台付坏

17（18号住）底部25％残。ろくろ水挽き成形。度部には回転糸切り痕。貼付け高台。胎土には浮石、酸化鉄、片岩などの微～細粒砂を含む。焼成は甘く軟質。暗橙褐色、高台部外面のみ灰色。

3　盤

20（18号住）約10％残。遺存状態悪く、特に内面と底部外面はあばた状に器面剥離する。ろくろ整形。胎土には浮石、酸化鉄などを含み、やや軟質。灰色。

4　甕

21（№.4）約25％残。ろくろ整形。胎土には微細粒砂の他、石英などの粗粒砂～小石を小量含む。焼成は非常に良い。淡暗灰青色。内外面に自然釉が付着し内面頸部は黒色となる。

第19号住居跡（第39図・図版10）

第2地点東側に位置し第20号住居跡に切られている。

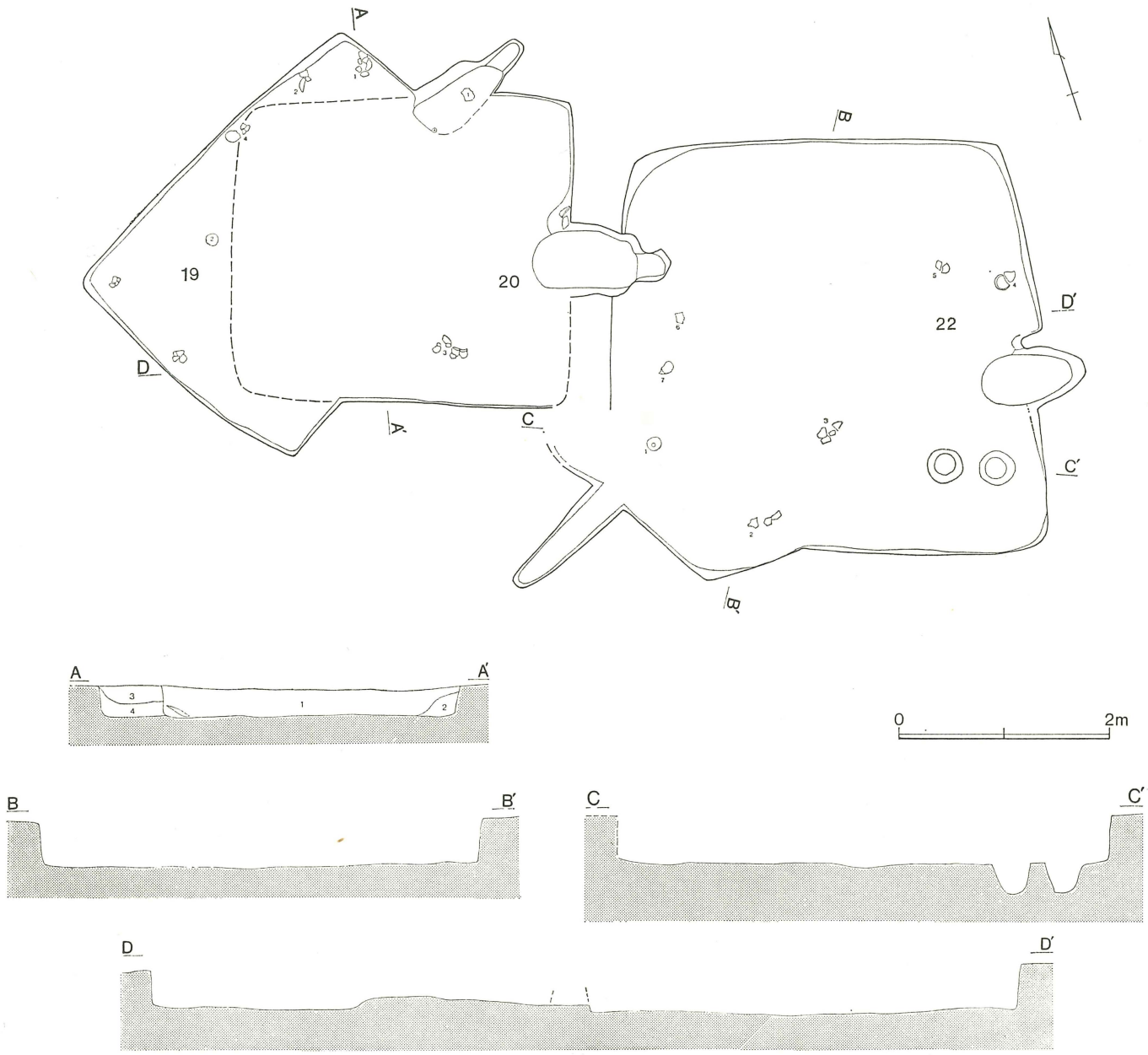
覆土は淡灰褐色土を主体とするものであった。形状は主軸方向に長い長方形を呈するものと思われる。大きさは3.5×2.6㎡。主軸の方向はN—65°—E。

カマドは北東壁を70㎝程掘込んでつくられていた。底は舟底状に5㎝程掘り窪められており、ゆるやかに立上がる。床は平坦である。壁高は北側で25㎝で垂直に立ち上がる。

遺物は北側壁直下の床面より10～20㎝浮いた状態で土師器坏、甕が出土している。

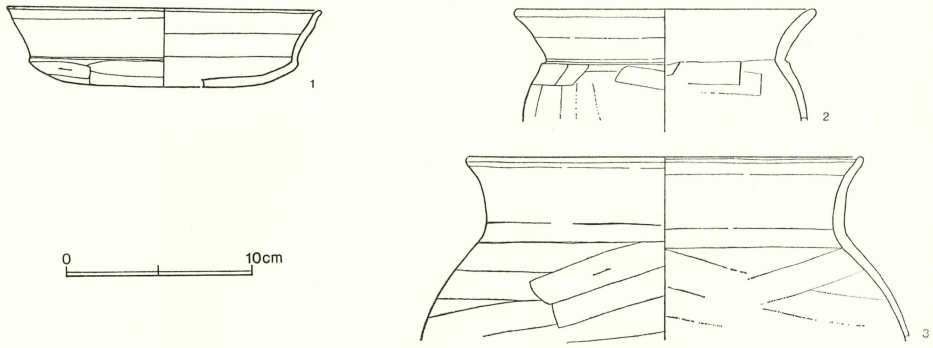
第19号住居跡出土遺物（第38図）

第20号住居跡と重複し、20号住として掲載した遺物のほとんどは、本跡のものと考える。したがって19号住居跡は真間第Ⅰ期に属する。



1　淡灰褐色土　炭・焼土粒子を多く含む。
2　灰褐色土　炭・焼土粒子を多く含む。
3　淡灰褐色土　1よりやや白く少量の炭・焼土を含む。
4　淡灰茶褐色土　1よりやや黄色く粘土質。

第39図　　第19・20・21・22号住居跡実測図



第38図　第19号住居跡出土遺物実測図

土師器

1　小形壺

MⅠ—8類　2（№.2）40%残。肩部の張りは少ない。境に段をもって口縁部は大きく「ハ」の字状に開く。明橙褐色。胎土は密で、非常に硬質。

2　大形壺

MⅠ—9①類　3（№.15）25%残。

3　その他の遺物

1（19号住）の坏は、OⅣ2期のものと思われる。混入か？　口縁部5%、底部20%残。胎土は密で粉っぽい。淡橙褐色。

第20号住居跡（第39図・図版11）

第2地点東側に位置し、第19・21・22号住居跡を切っている。覆土は淡灰褐色土を主体とする。

形状は東西方向にやや長い方形を呈するものと思われる。

大きさは（4.2）×2.9m。主軸の方向はN—108°—E。

カマドは東壁中央部を74cm程掘込んでつくられており、底は舟底状に掘り窪められており、垂直に近く立上がって段を持つ。袖は一部分が残っていたのみであった。

床面はほぼ平坦である。壁高は南側で30cm程でほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマド中から№.9の須恵器坏破片、11の台付（？）甕破片が出土しており、床面からは№.4坏と№.14甕、№.16提瓶があり、他は覆土中からの出土品である。

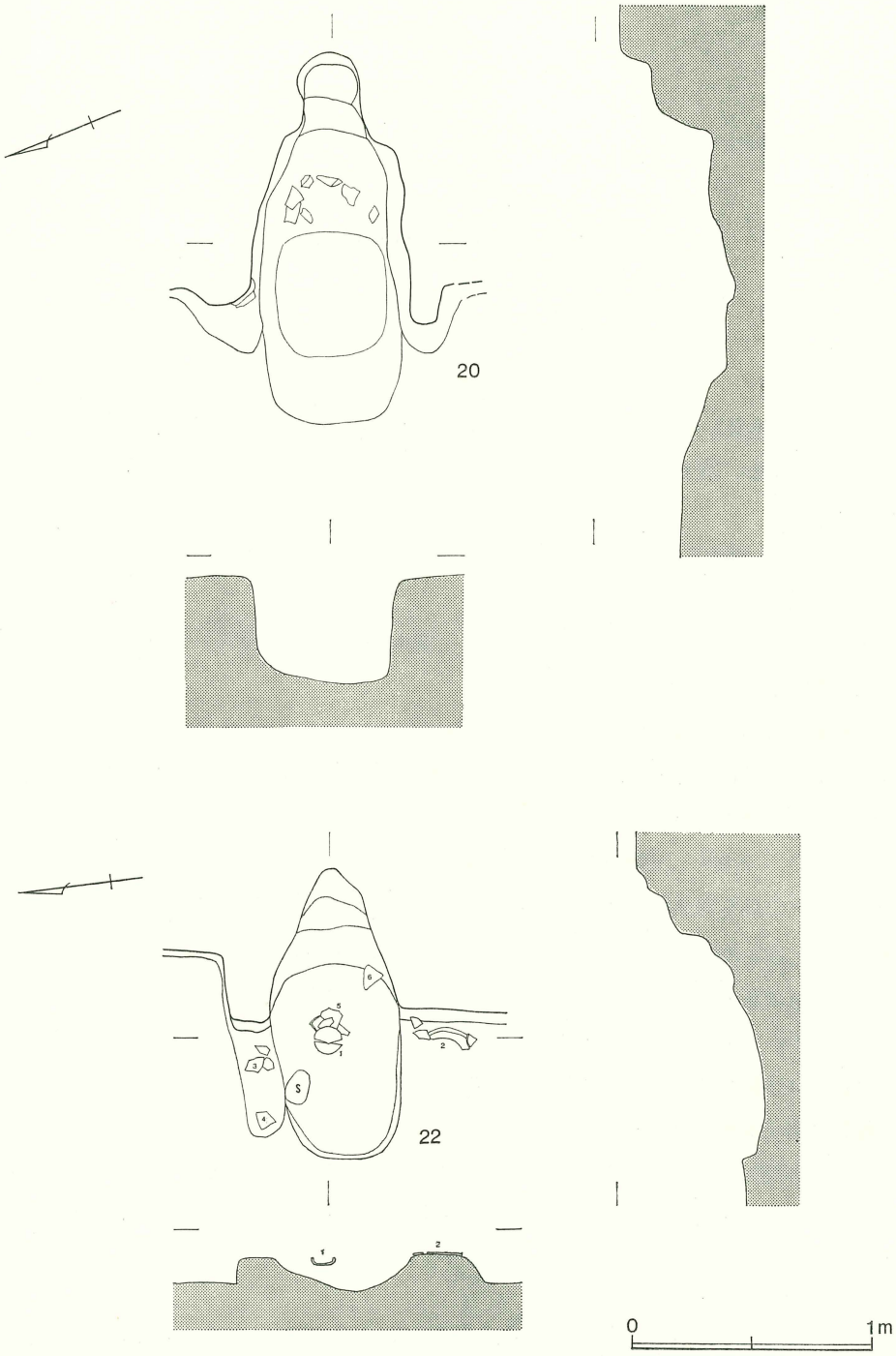
第20号住居跡出土遺物（第41図・図版46）

本住居跡は、真間第Ⅰ期の19号住と重複し、遺物も取り上げたままの状態で載せたので、混同している。カマド出土の土器群から、本来の当跡に属する遺物は9・10・11・12・17・18などの国分第Ⅱ期に属するものである。

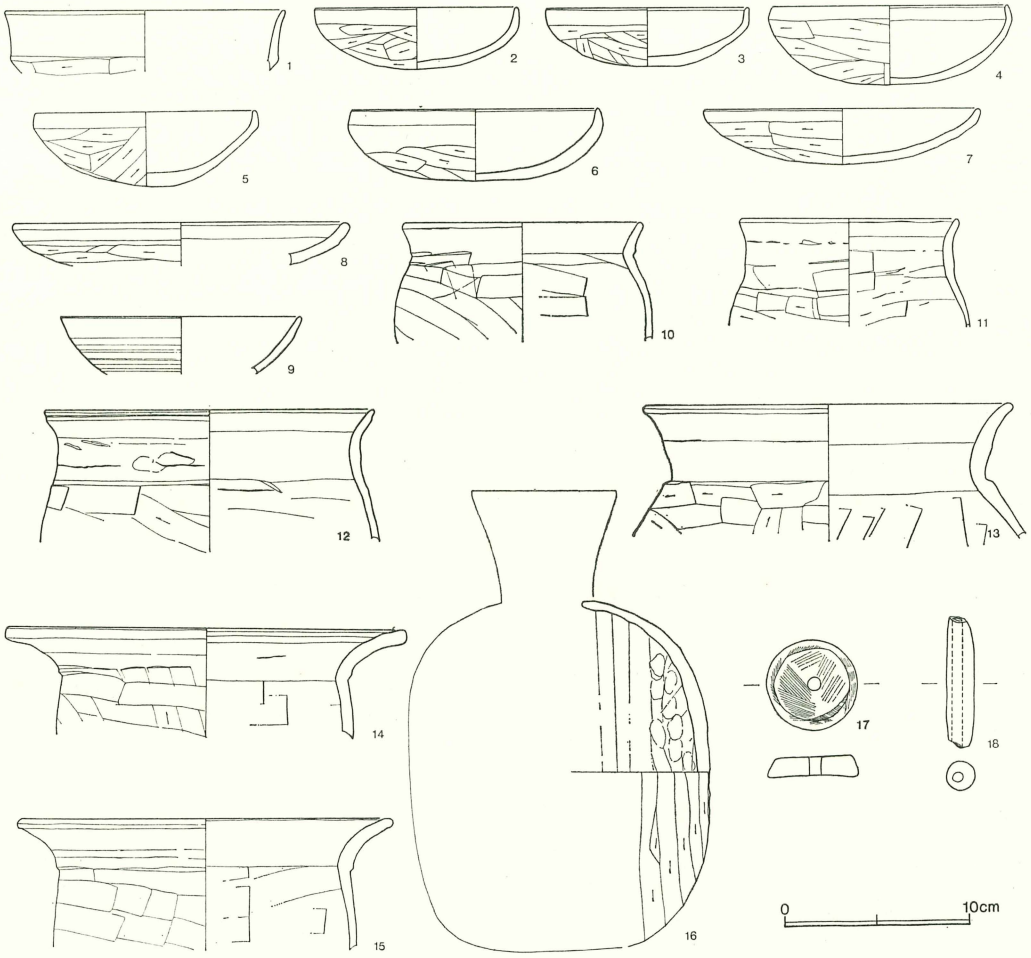
1　小形台付甕

KⅡ—4類　10（№.3）30%残存。基準資料。微粒砂多含。内外面磨滅。淡茶褐色、外面一部黒色。

KⅡ—5類　11（カマド中）23%残存。基準資料。淡茶褐色。外面、茶～橙褐色。体部内外面に



第40図　　第20・22号住居跡カマド実測図



第41図　第20号住居跡出土遺物実測図

爪痕。

2　甕

K Ⅱ—7類　12（カマド袖中）35％残存。微～細粒砂含み、焼成良く硬質。淡茶褐色。

3　須恵器

9（カマド覆土）約8％残存。胎土は土師器1類に似るが、焼成は、余り良くない。色調も土師器風で、橙茶褐色を呈する。器内面は磨滅するが、外面に、ろくろ整形痕残る。

4　その他の遺物

紡錘車

17（注記なし）ほぼ完形。49g。長辺は、僅かにへこむ。全面とも一様に滑らか。石質は滑石。銀黒色に輝く。

土錘

18（北側覆土）一端を欠く。15g。角閃石、酸化鉄などの微細粒砂と、粗粒砂少量を含む。焼成良く部分的に光沢をもつ。橙茶褐色。端部は焼成前に切り落される。

真間第Ⅰ期　（本来19号住の遺物）

土師器

1　坏

MⅠ—2類　6（№.4）48%残存。やや大形。橙褐色。

MⅠ—3類　4（床直）口縁部10%、底部23%残存。器肉薄い。器内面磨滅。胎土は2類と同じ。橙褐色。5（№.a）口縁部40%、底部60%残存。やや小形。胎土は標準資料に似る。細粒砂を僅かに含む。焼成、遺存状態とも良く、橙赤褐色を呈す。

MⅠ—4類　2（№.2）完形。2次加熱か？器内面磨滅。橙褐色、外面部分的に暗褐色。3（№.d）ほぼ完形。橙褐色。

2　皿

MⅠ—5類7（覆土）約20%残存。外面器面磨滅。淡橙褐色

MⅠ—6類　8（№.b、北側覆土）やや小形。胎土焼成は3類と同じで密。橙赤褐色。赤彩か？

3　大形壺

MⅠ—9類　13（№.b）基準資料。27%残存。

4　甕

MⅠ—11類　15（北側覆土）13%残。基準資料。口縁部内面器面荒れる。14（床直・№.6）口縁部はやや長い。明橙褐色。

5　須恵器

16（№.1・22住床直）約35%残存。あるいは、鉄鉢かとも思われる。ろくろ整形後、内面平坦部は篦なで、外面は篦削りが施される。胎土には、浮石などの微～細粒砂と、石英などの粗粒砂を少量含む。暗褐色～灰黒色。

その他、19号住1と20号住1の坏は混入したものと考える。

1（北側覆土）20%残存。胎土は軟質で粉っぽい。明橙褐色。

第21号住居跡（第39図）

第2地点東側に位置し、22号住居跡調査中に南西隅に煙道の赤く焼けた部分が延びていた為、これを21号住居跡として調査したものであるが、形状、規模等は、トレンチ等により範囲を追ったが検出できなかった。出土遺物はカマド付近から、1坏、甕破片2～6が出土している。

第21号住居跡出土遺物（第42図）

国分第Ⅲ期に属する。真間第Ⅱ$_2$期の22号住と重複し、22号住（第43図）のうち7・8・12・15 16・17は、本跡のものと考える。

土師器

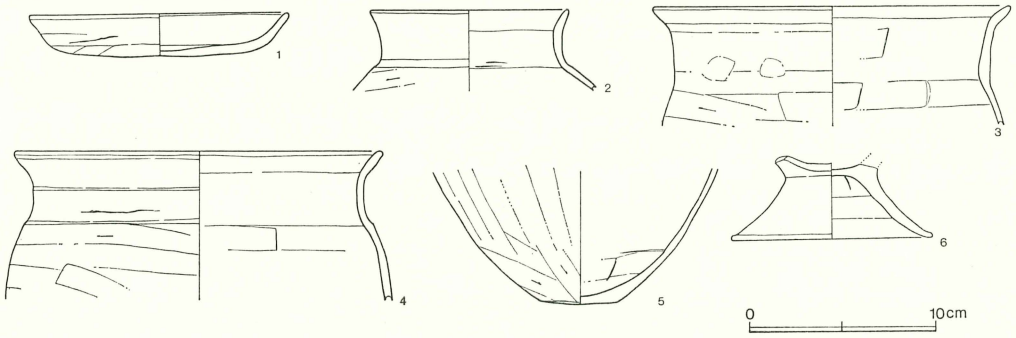
1　坏

KⅢ—2類　22—8（覆土）30%残。橙茶褐色。内面茶褐色で底面に煤付着。基準資料。

KⅢ—3類　22—7（床直）10%残。基準資料。橙茶褐色。内面煤付着。

2　皿

KⅢ—4類　21—1（貯蔵穴）口縁部5%、底部12%残。基準資料。橙褐色。内面磨滅。



第42図　第21号住居跡出土遺物実測図

3　小形台付甕

KⅢ—5類　21—2（カマド内）25%残。基準資料。茶褐色、肩部内面褐色。22—15（覆土）甕底部100%、台部30%残。基準資料。外面橙茶褐色。内面黒褐色、21—6（貯蔵穴）甕底部100%台部10%残。橙褐色。

4　甕

KⅢ—6類　21—4（貯蔵穴）約20%残。橙褐色外面頸部褐色。21—5（カヤド内）60%残。内面淡橙褐色、外面茶褐色～黒褐色。

KⅢ—7類　22—12（覆土）20%残。茶褐色。基準資料。焼成良く焼きしまる。

KⅢ—8類　21—3（カマド内）25残%。基準資料。橙茶褐色。

須恵器

1　坏

22—16（覆土・21号住カマド）底部90%。口縁部60%残。ろくろ永挽成形。底部には、時計回りの回転糸切り痕。淡灰褐色。焼成良いが土師質。

2　高台付坏

22—17（覆土）完形。ろくろ水挽き成形。貼付高台。軟質。明灰色、内面部分的に灰褐色～灰黒色。高台の形はくずれる。細粗粒砂含む。

第22号住居跡（第39図）

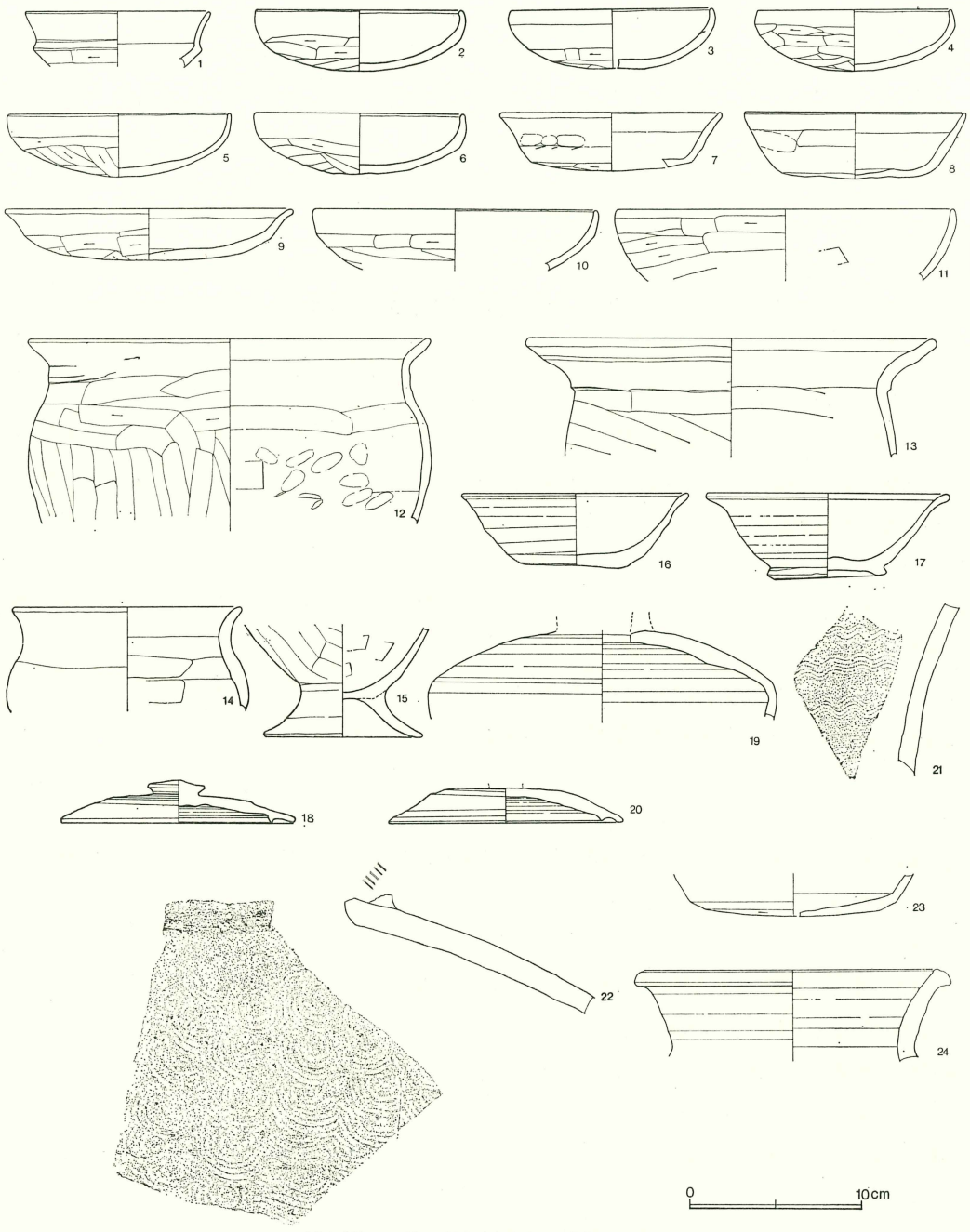
第2地点東側にあり、第20・21号住居跡と切合っている。

形状は南壁及び西壁が一部残存しているのみで、詳細は不明であるが、南壁のやや長い台形を呈するものと思われる。大きさは4.0×3.9m。主軸の方向はN—104°—E。

カマドは東壁中央部南寄りに壁を45cm程掘込んでつくられており、底は床面より3～5cm程低く段を持って立上がる。ピットは2ケ所検出されているが、柱穴かどうか不明である。

床面はほぼ平坦である。壁高は南側で42cmで垂直に立上がる。

遺物はカマド中から№.4、6の坏、№.13の甕、床面付近から№.3、7の坏、№.18の須恵器蓋が出土しており、他は覆土中から出土した。第21号住居跡との切合いが不明確な為、12の甕、16、17の須恵坏は20号住居跡からの混入であろう。



第43図　　第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物（第43図・図版46）

真間第Ⅰ$_2$期に属する。

土師器

1　坏

MⅡ$_2$—1類　3（床直）25％残。橙褐色。内外面磨滅。4（カマドNo.1）ほぼ完形。暗橙褐色。底面黒色。5（覆土）65％残。橙褐色。内外面とも部分的に磨滅する。

MⅡ$_2$—2類　10（覆土）15％残。橙茶褐色。

坏1（覆土）は鬼高期の混入と思われる。

2　皿

MⅡ$_2$—5類　9（No.4）口縁部短かい。口縁部13％。底部18％残。橙茶褐色。外底部黄褐色。

3　埦

MⅡ$_2$—6類　11（覆土）13％残、橙茶褐色。

4　小形壺

MⅡ$_2$—8類　14（No.5）基準資料。10％残。明橙褐色。

5　甕

MⅠ—11類系のもの　13（カマドNo.2）口縁部50％。胴部8％残。橙茶褐色。一部黒褐色。

須恵器

1　平瓶

19（No.2）80％残。微粗粒砂（石英）小石少量を含む。やや軟質。乳白色。

2　蓋

18（No.1）ほぼ完形。胎土には細粗粒砂（石英）、小石含み粗い。焼成良く焼きしまる。暗灰青色。

20（No.5）約45％残。微粗粒砂含む。やや軟質。灰白色。つまみ剥落。

3　坏

21（No.6）10％残。細粗粒砂含む。焼成良。暗灰青色。底部はやや突出する。底部外面回転篦削。

22（No.2）約13％残。微、粗粒砂を含み、軟質。暗灰色。口縁端部の突出部はまめつしている。

21号住に属する土器　国分第Ⅲ期

1　坏

KⅢ—2類　8（覆土）30％残。橙茶褐色。内面茶褐色。底面にスス付着。

KⅢ—3類　7（床直）10％残。橙茶褐色。内面スス付着。

2　小形台付甕

KⅢ—5類　15（覆土）底部100％、台部30％残。胴外面磨滅。外面橙茶褐色。内面黒褐色。

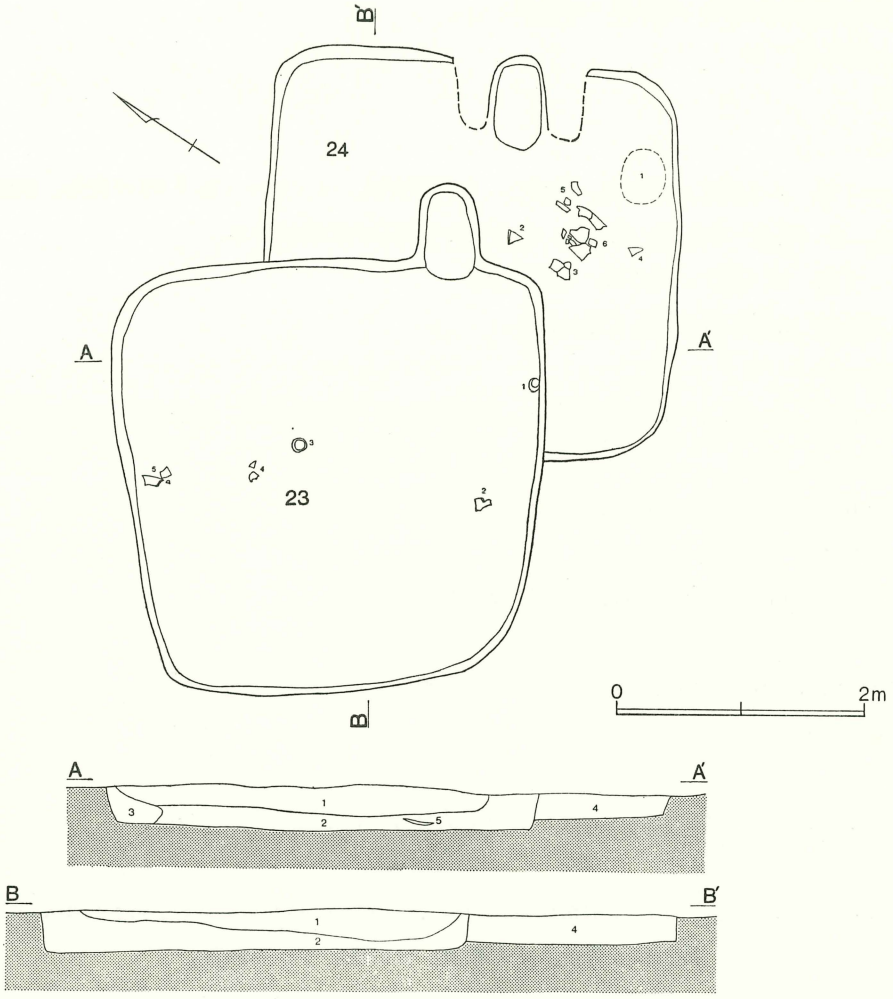
3　甕

KⅢ—7類　12（覆土）20％残。焼成良く焼きしまる。橙茶褐色。基準資料。

須恵器

1　坏

18（覆土・21住カマド覆土）口縁部50％。底部90％残。微細粒砂を含む。焼成良い。淡橙褐色～



1　淡褐色土　　2　褐色土　　3　暗茶褐色土　　4　淡褐色土　　5　焼土

第44図　　第23・24号住居跡実測図

淡灰褐色。ろくろ水挽き整形。底部時計回りの回転糸切り痕。

2　高台付坏

17（覆土）完形。細粗粒砂含む。軟質。内外面磨滅。明灰色。内面灰黒色～灰褐色

3　大形壺

23（№15）細粗粒砂含む。硬質。暗灰青色。外面に波状文。24（№5）細粗粒砂、小石含む。焼成良く焼きしまる。暗灰青色。外面に自然釉付着して灰褐色を呈する。外面は平行線のタタキ目、内面は青海波文のおさえ痕である。

第23号住居跡（第44図・図版11）

第2地点南側に位置し、24号住居跡を切っている。

覆土は淡褐色土を主体とし、下層は褐色土が堆積していた。

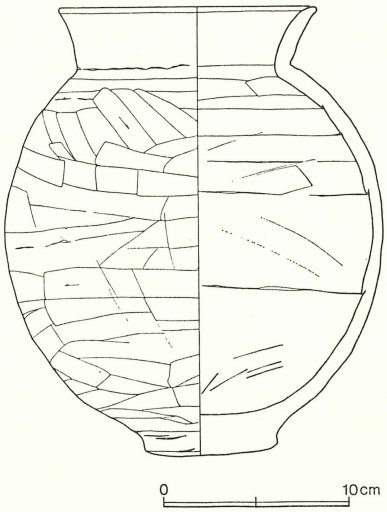
形状は南北２隅が丸味を帯びた、西壁の短かい台形を呈する。

大きさは4.0×3.5m。主軸の方向はN—58°—E。

カマドは東壁を60cm程掘り込んでつくられており底は床面より５cm程掘り窪められていた。

床面は平坦で堅い。壁高は西側で31cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物は土師器甕等の破片で覆土中から出土している。図示した甕は混入したものであろう。



第45図　第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物（第45図・図版46）

鬼高第Ⅰ期に属する。

土師器甕

OⅠ—18②類　口縁部75％。底部100％残。胎土には微細粒砂と大粒の赤色粒を僅かに含む。焼成は良く焼きしまる。外面胴下半は篦削り、上半は、篦ナデである。２次加熱。暗橙褐色、胴下半一部明橙褐色。口縁部内外面に煤付着。

第24号住居跡（第44図・図版11・12）

第２地点南側に位置し、23号住居跡に切られている。

覆土は淡褐色土１層であった。形状は南側２隅の丸い方形を呈する。大きさは3.3×3.4m。主軸の方向はN—62°—E。

カマドは東壁中央部南寄りにつくられており、袖は地山のロームでつくられていた。底は床面から10cm程掘り窪められており、ゆるやかに立上がる。

床面は平坦で堅い。壁高は東側で21cmで垂直に立上がる。

遺物はカマド前の中央部から多く出土しており、坏１・３と甕７が床面から、小形甕５と甑６は10cm程浮いた状態で出土しており、他は覆土中のものである。

第24号住居跡出土遺物（第46図・図版47）

鬼高第Ⅳ$_2$期に属する。

土師器

１　坏

OⅣ$_2$—１②類　２（覆土）20％残。淡黄橙褐色。３（№５）28％残。橙褐色、外面一部茶褐色。２次加熱によるものか？

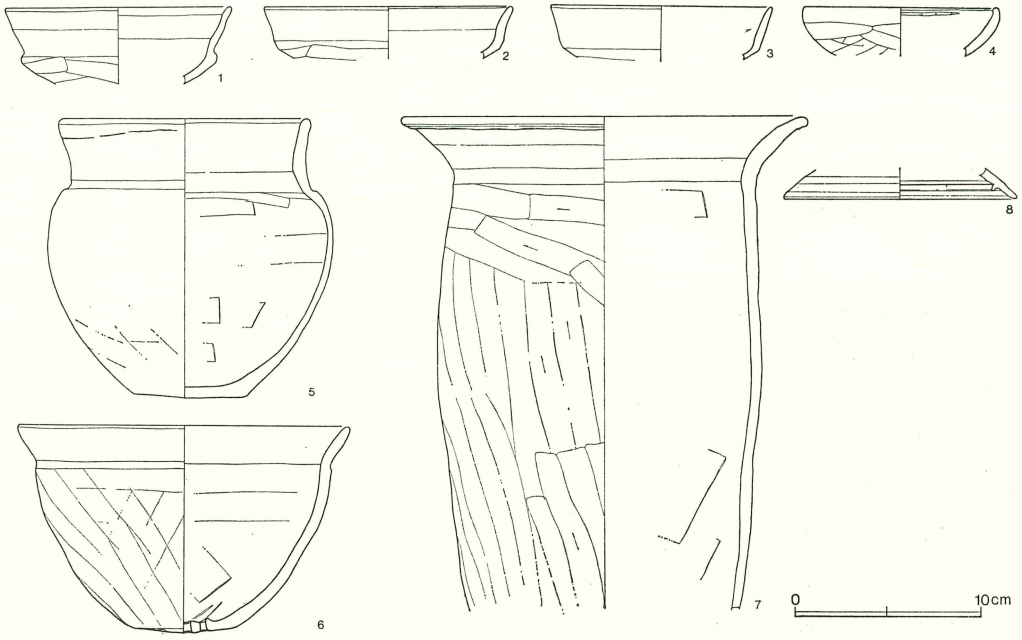
OⅣ$_2$—５類　１（№５）やや大形。18％残。焼成は悪い。明橙褐色。

OⅣ$_2$—６類　４（覆土）20％残。基準資料。口縁部は横ナデ。外面篦削り。内面篦ナデつけ。

２　小形壺

OⅣ$_2$—12類　５（№６）ほぼ完形。内面暗茶褐色。外面は器面荒れ整形痕不明。黄褐色～黒褐色を呈す。黒斑。口縁部外面にまき上げ痕。口縁部横ナデ、内面篦ナデつけ。

３　甕



第46図　第24号住居跡出土遺物実測図

基準資料には入れなかったが、ＯⅤ—12③類へと続くものと思われる。

7（№.1）68％残。口径21.7㎝、胴部最大径17.5㎝。胎土には、角閃石、浮石などの細粒砂を多含。焼成も比較的良い。橙褐色、２次加熱のため、胴部外面朱色～黒褐色、内面胴部上半も黒褐色となる。器肉は均一。

4　小形甑

ＯⅣ$_2$—16類　6（№.2・3・6）口縁部40％、底部25％残、孔は現存部で４つ確認できる。外面は器面荒れる。淡茶褐色。口縁部内面炭素吸着、外面一部朱色。底部に黒斑。

須恵器蓋

8（23・24号住覆土）13％残。暗橙青色。粗粒砂を少量含む。硬質。かえりは外側に向ってつままれ、丸味をもつ。

第25号住居跡（第47図・図版12）

第２地点東側にあり、26号住居跡に切られている。カマド等は検出されなかった。

形状は方形を呈するものと思われる。大きさは3.0×（1.25）ｍ。主軸の方向はN—62°—E。

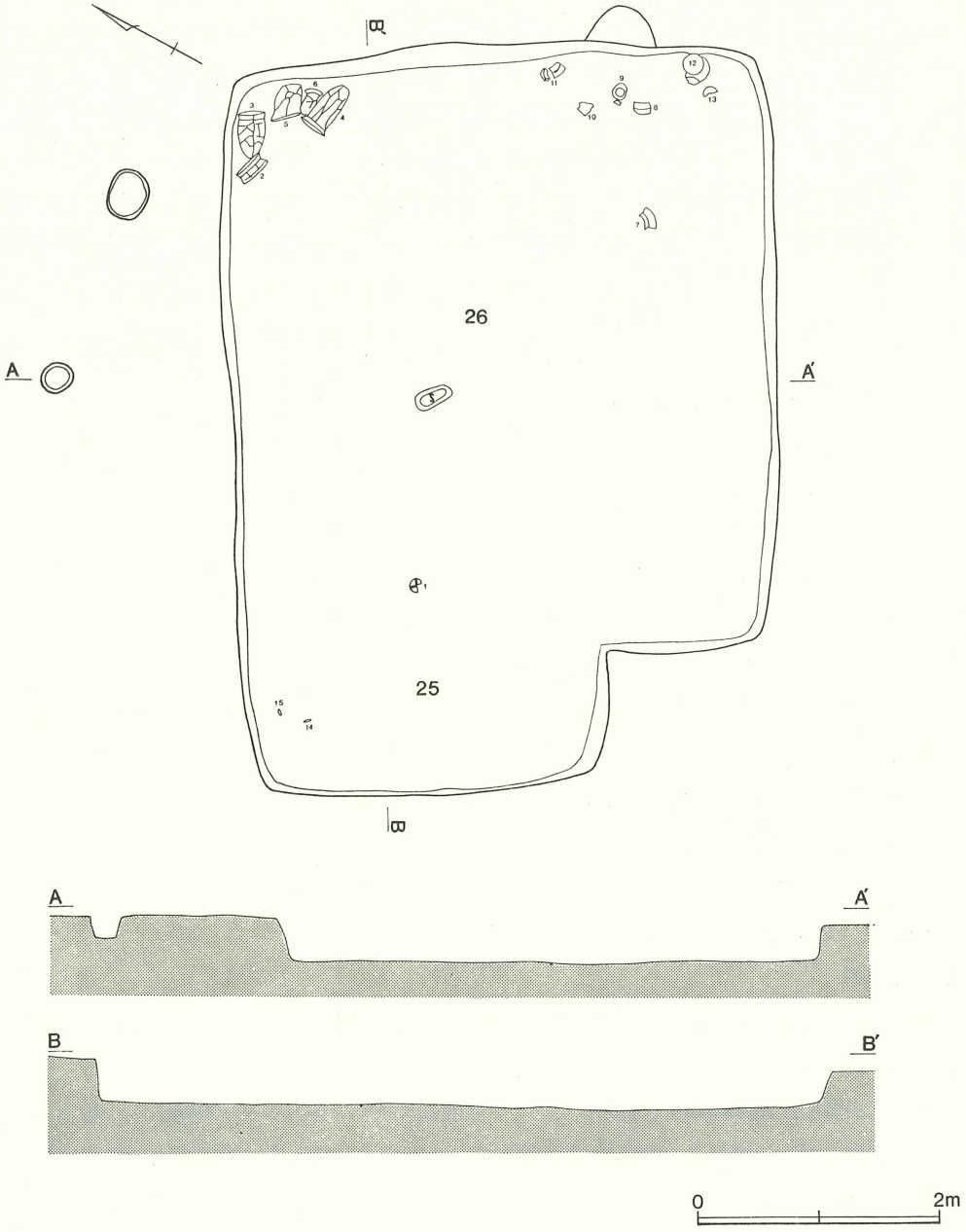
床面はほぼ平坦で、壁高は33㎝で垂直に立上がる。

遺物は床面近くから土錘１・２が出土している。

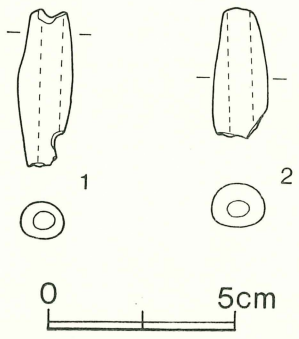
第25号住居跡出土遺物（第48図）

遺物は土錘のみである。

1（№.14）胎土には角閃石・浮石などの微粒砂と酸化鉄の細～粗粒砂を含む。焼成は比較的良い。



第47図　第25・26号住居跡実測図



第48図　第25号住居跡出土遺物実測図

橙褐色、両端を欠く、炭化物が斑点状に付着。

2（№15）一端を欠く。約70％残存。胎土・焼成とも1と同じ。淡黄～橙褐色。同様に炭化物が付着する。

第26号住居跡（第47図・図版12）

第2地点東側に位置し、北4mに19～22号住居跡がある。本住居跡調査中に西側に更に落込みを発見し、25号住居跡としたが、本住居跡はこれを切っている。主軸の方向はN—62°—E。

形状は主軸方向にやや長い長方形を呈する。

カマドは東壁南寄りにあった。構造ははっきりしないが、№11の壺を伏せて芯に河原石を入れて支脚として使用したものであろう。

床は平坦で堅い。壁高は北側で36cmで、ほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマドの支脚として使用された小形甕11、カマド周辺の床面から坏1・2、甕10・13、北東隅の床面から甕14～18、坏3～6がまとまって出土している。他は覆土中からの出土である。

第26号住居跡出土遺物　（第49図・図版47）

鬼高期第Ⅳ2期に属する。

1　坏

OⅣ2—1①類　4（№7）30％残。明橙褐色。

OⅣ2—1②類　6（№1）口縁部30％、底部40％残。淡橙褐色。2次加熱のためか、外面朱色～黒褐色を呈する。

OⅣ2—2①類　1（№8）口縁部45％。底部50％残。淡橙褐色。

OⅣ2—2②類　5（覆土）50％残。明橙褐色。

OⅣ2—4類　7（覆土）13％残。淡橙褐色。

OⅣ2—5類　2（№11）ほぼ完形。明橙褐色。

その他の坏

3（覆土）底部は扁平で、口縁部が立ち気味に開く器形。小形である。Ⅲ類に多く見られた器形と類似する。大形のものが、14住4にみられる。

9（№6）22％残。底部は扁平、体部は「ハ」の字状に開き、口縁部はやや内彎する。胎土には、角閃石、赤色粒、浮石の細粒砂を含み焼成も良く焼きしまる。赤彩か？　淡橙褐色。底部箆削り、口縁部横ナデ、体部箆ナデつけ、内部なでつけ。

2　皿

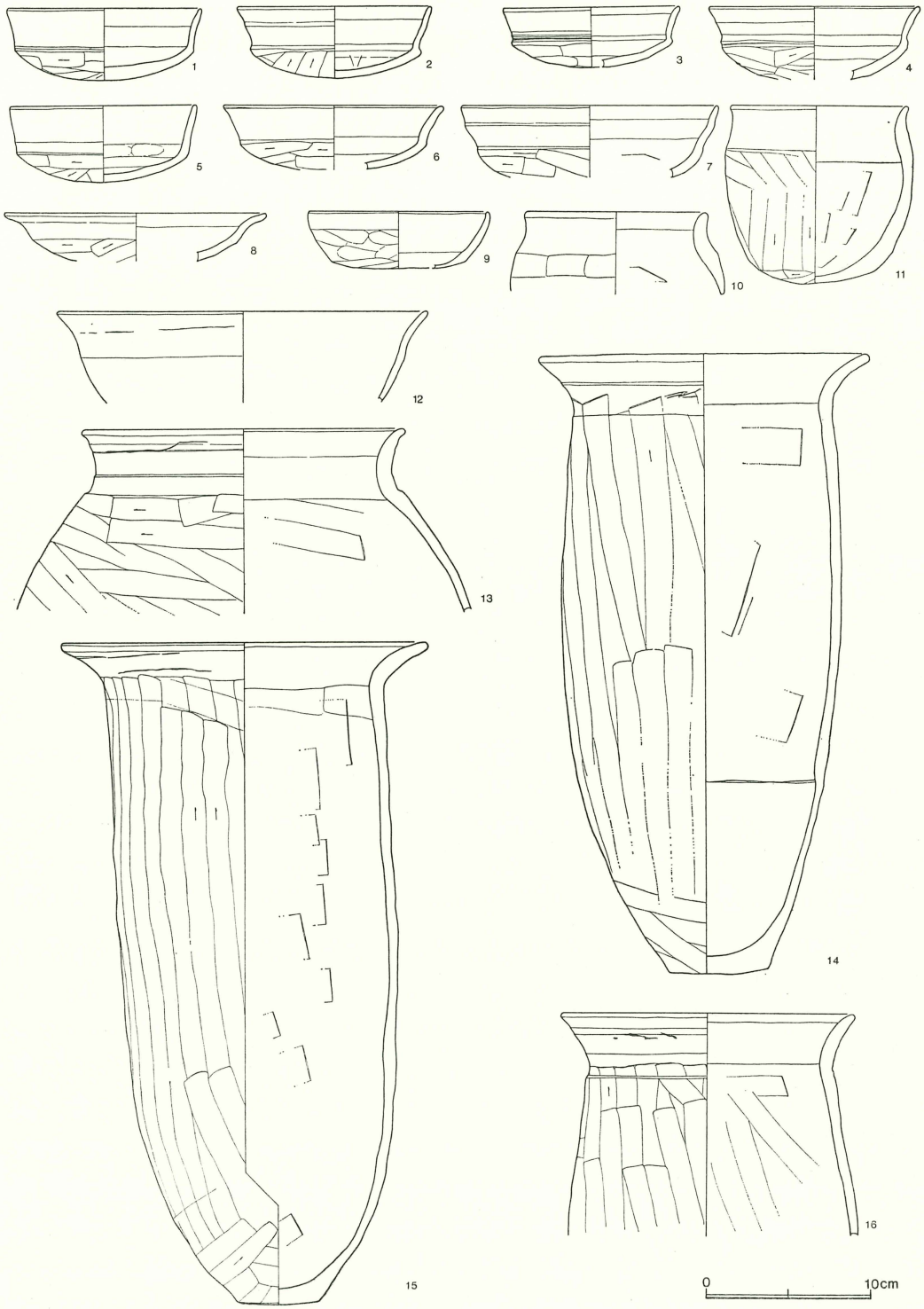
OⅣ2—7類8（№5）口縁部8％、底部20％残。橙褐色。口径約15.8cm。口径はあと1.4cm程広がるものと思われる。

3　鉢

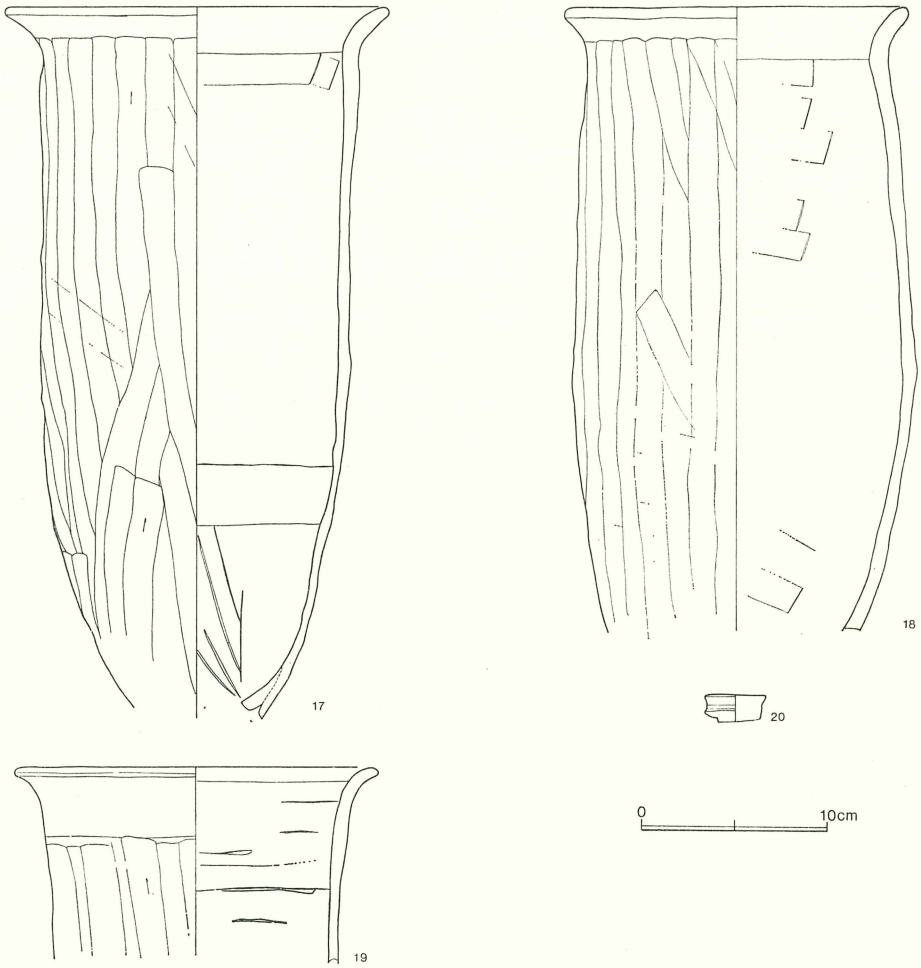
OⅣ2—8類　12（覆土）13％残。磨滅が著しく整形痕は不明である。明橙褐色。

4　小形壺

OⅣ2—9類　11（№9）口縁部5％以下ほぼ完形。硬質。内面暗茶褐色、底部に煤付着、外面底部



第49図　第26号住居跡出土遺物実測図(1)



第50図　　第26号住居跡出土遺物実測図(2)

黒褐色、二次加熱、朱色～黄褐色。口縁部は磨滅し器面剥離。内面は木口状工具によるナデ痕が顕著。口径10.8㎝、底径6.9㎝、器高10.8㎝。

OⅣ2—10類　10（№15）13%残。全体的に磨滅。器肉は分厚い。橙褐色。

5　大形壺

OⅣ2—13類　13（№12）口縁部100%、肩部25%残。口縁部外面に巻き上げ痕。肩部外面2次加熱によって一部朱色～黒色。口縁部は最低3回なでられる。

6　甕

OⅣ2—14①類　17（№3）底部を欠くがほぼ完形。胎土には小石が目立ち、ごつごつした感じ。内面は平滑、橙茶褐色、外面胴下半、暗褐色～朱色。18（№6）胴部下端を欠く。他はほぼ完形。内外面赤彩か？胎土には細粗粒砂が多く小石はほとんど含まれず、ザラザラした感じ。胴部はややふくらむ。口縁部は更に短い。淡黄褐色、外面は2次加熱により赤褐色～暗褐色。

OⅣ₂—14②類　15（№.4）ほぼ完形、胴部には粘土ひもの痕がよく残る。内面は木口状工具によるナデつけで平滑。14（№.5）口縁部100％、胴中央部30％、底部70％残。口径20.2㎝、底径6.0㎝、器高37.5㎝。胎土焼成は15に似る。口縁部は最低2回に亘りなでられる。頸部には削上げたときにあたった痕が顕著である。胴部はふくらみをもつ。橙茶褐色、外面黄褐色～黒褐色。16（№.2）上部のみ完形。胎土、焼成は14と同じ。口縁部はやや立ち気味となる。胴部にはふくらみをもつ。色調も14と同じ。

OⅣ₂—15①類　19（覆土）口縁部5％、以下20％残。器肉は比較的薄い。

7　その他の遺物

20（№.5）土師製である。胎土は精製され、非常に密で、焼成も比較的良い。つまみ部と思われる。赤彩か。つまみ上部も、器面も平坦である。

第27号住居跡（第51図・図版14）

第2地点北東側に位置し、東側に第28号住居跡が隣接している。西側を南北方向に攪乱溝が走っており、これにより西半分を切られている。

覆土は暗灰褐色土を主とし、下層は粘土質が強い。

形状は南壁が他の辺に比してやや長い台形を呈する。

大きさは3.6×3.3ｍ。主軸の方向はN—91°—E。

カマドは東壁南寄りの壁を72㎝程掘込んでつくられている。底は床面より10㎝程低く、長方形を呈し、ゆるやかに立上がる。

住居跡の南東隅に床面よりやや窪んだ部分があったが貯蔵穴としてはやや浅い。

床はほぼ平坦で堅い。壁高は南側で23㎝斜上方に立上がる。

遺物はピット中から甕1・2が出土し、セクション第4層の溝の覆3土中から甕が出土した。

第27号住居跡出土遺物（第52図）

鬼高第Ⅲ期に層する。

土師器

1　小形壺

OⅢ—7類　1（南側ピット）20％残。胎土は精製され、焼成も非常に良く堅緻。外面肩部は器面剥離する。

2　甕

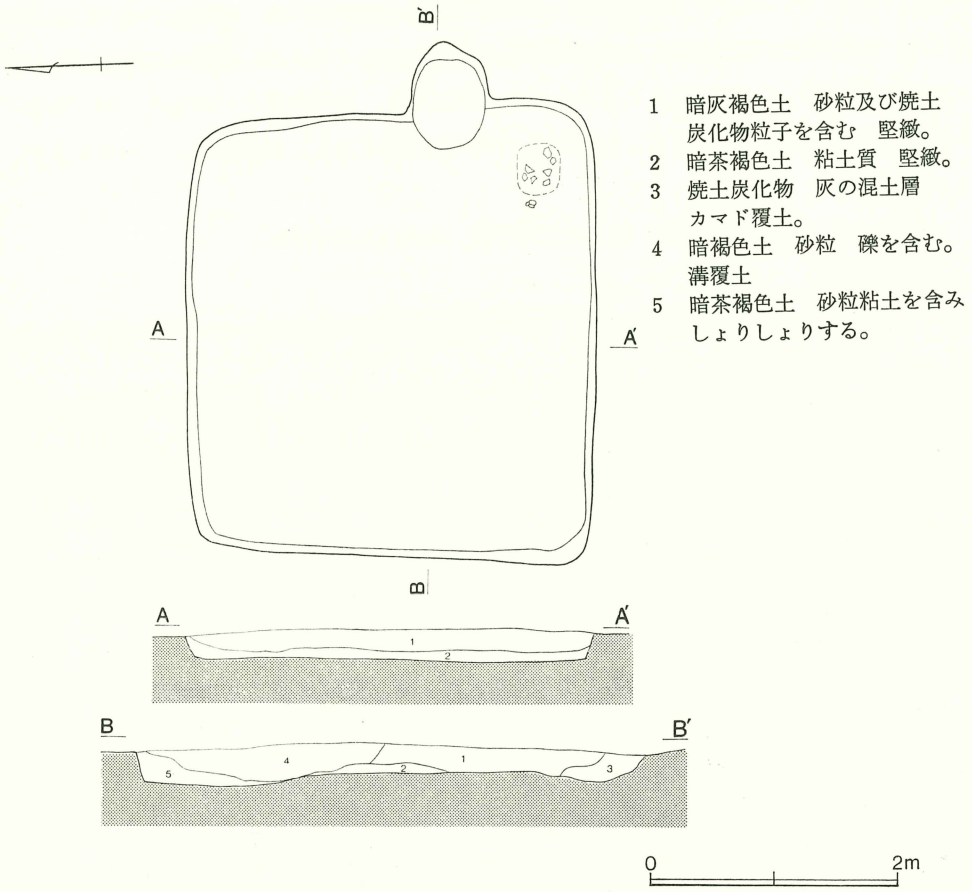
OⅢ—17類　2（南側ピット）13％残。微粒砂の他、細～粗粒砂を含む。焼成比較的良い。2次加熱。黄～橙褐色～暗褐色。

3　その他の遺物

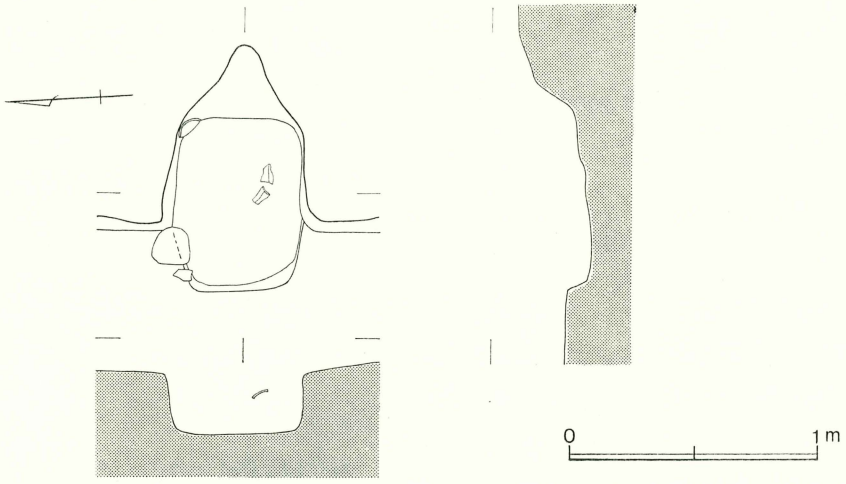
3・4は溝の覆土から出土したものである。

3は国分期の甕8％残存。胎土には、微細粒砂を多含し焼成も良い。

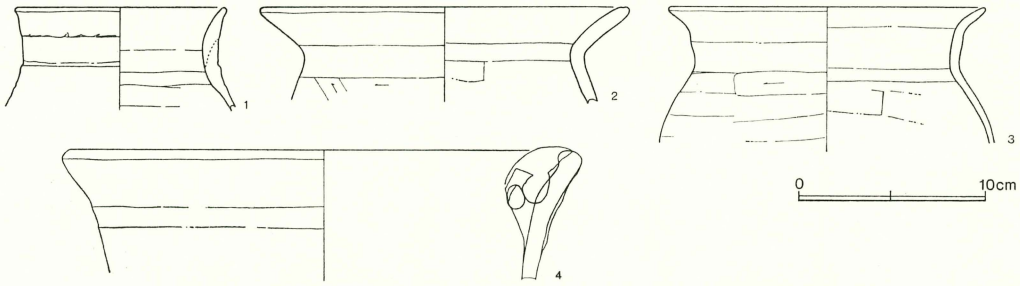
4　内耳鍋の破片5％残存。胎土には、微細粒砂の他、粗粒砂を僅かに含む。環元焼成で暗灰色を呈する。軟質。



1　暗灰褐色土　砂粒及び焼土
　炭化物粒子を含む　堅緻。
2　暗茶褐色土　粘土質　堅緻。
3　焼土炭化物　灰の混土層
　カマド覆土。
4　暗褐色土　砂粒　礫を含む。
　溝覆土
5　暗茶褐色土　砂粒粘土を含み
　しょりしょりする。



第51図　　第27号住居跡・カマド実測図



第52図　第27号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡（第53図・図版14）

第２地点北東側に位置し、南に第29、西に第27号住居跡が隣接している。

覆土は暗灰褐色土を主とし、下層はややローム分が多い土が堆積していた。

形状は北西隅のやや丸い、主軸方向にやや長い方形を呈する。

大きさは3.6×3.2*m*。

主軸の方向はN—105°—E。

カマドは東壁南寄りに壁を71*cm*掘込んでつくられている。底は床面とほぼ同じ高さでゆるやかに立上がる。

床面は平坦で堅い。壁高は西側で42*cm*でほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマド中から甕11、床面から坏１・砥石15・須恵坏14が出土しており、紡錘車状石製品16は床面から10*cm*程浮いた状態で出土し、他は覆土中から出土した。

第28号住居跡出土遺物（第54図・図版48）

真間第Ⅱ$_2$期に属する。

土師器

１　坏

MⅡ$_2$—１類　３（覆土）30％残。薄手。橙褐色。１（№.２）口縁部50％、底部90％残。橙褐色。底外面に黒斑。４（覆土）口縁部15％、底部30％残。内外面磨滅。橙褐色。２（覆土）25％残。小形である。MⅠ—４類系のものと考えられる。内外面磨滅。橙褐色。

２　皿

MⅡ$_2$—４②類　５（覆土）13％残。橙褐色。遺存状態は良い。

MⅡ$_2$—５類　６（覆土）23％残。やや小形。橙褐色。内外面。細かくあばた状に剥離する。

７（覆土）口縁部３％、底部25％残。比較的きめ細かくやや軟質で茶褐色を呈する。

MⅡ$_2$—６類　８（覆土）　基準資料。口縁部20％。底部80％残。外面磨滅。橙褐色。外面一部黒色。

３　小形壺

MⅡ$_2$—７類　13（覆土）20％残。基準資料。内外面磨滅。淡黄～橙褐色。